

川柳塔

昭和十九年六月二十三日
昭和十九年七月一日発行 毎月一日発行
創刊大正十三年 通卷 六八六号



日川協加盟

No. 686

七月号

川柳大阪500号記念大会

と き 昭和59年7月8日(日) 午前11時開場・締切13時

ところ 大阪市中央公会堂

大阪市北区中之島1-1-27 TEL (06) 231-0631~4
(地下鉄淀屋橋駅スグ・中之島公園内)

会 費 500円

兼題と選者 (25題・事前投句)

風 雪/板尾 岳人	革 新/大坂 形水	期 待/大矢 十郎
月 給/笠原 吸江	合 風/片岡 湖風	体 操/金井 文秋
通 信/川口 弘生	強 気/河内 天笑	ネズミ/久保田 寿界
兄 /黒川 紫香	昔 /高杉 鬼遊	友 /小出 智子
鯉 /斉藤三十四	始 め/高橋 操子	祭 上/高橋 古啓
積 む/天根 夢草	石 /定金 冬二	流 れ/西村 芳川
思い出/野村太茂津	お守り/辻 圭水	ビール/宮口 笛生
歌 /山本 翠公	ドラマ/森中恵美子	好 き/辰己 胡村
火 /吉野 瑛二		

☆大会会場では3才のみ発表

特別課題と選者 (5題・当日投句可) 各題2句

五……………橘高 薫風
百……………片岡つとむ
号……………海土 天樹
記……………奥山 晴生
念……………井上 喜酔

総合司会……………西田柳宏子
志水浩一郎

☆入選句は500号誌上発表

「記念合同句集」

参加作品募集

- 1人10句まで。投句料1,000円
- 第2次ベ切 59年7月8日
- 句集タイトルの名付親に記念品贈呈

<投句先>

〒583 羽曳野市高鷺8-31-11
塩満 敏

「川柳展示会」併設

大会会場に15コーナーを特設。
136 柳社の柳誌・6 大家コーナー・
大阪の句碑パネル・異色句集・珍書
奇書・ビデオコーナー・川柳年賀状
など。

大阪市交通局互助組合文化部川柳部

路郎忌

西尾 栞

第十九回目の路郎忌がめぐってきた。

明治二十一年七月十日の誕生で、昭和四十年七月七日に歿くなられた。享年七十七歳であった。

七月という月は著名な文人が没くなっている。上田敏（大正五年）森鷗外（大正十一年）戸川秋骨（昭和十四年）は共通した七月九日が忌日である。七月二十日は谷崎潤一郎忌である。鷗外は西洋名前が好きで、子供に外国人と同じクリスチャンネームをさへらんだ。長男が於菟（オットー）、長女が茉莉（マリー）、早世した次男が不律（フリッツ）、次女が杏奴（有名な随筆家小堀アンヌ）、不律の前に生れるはずで流産した子が男だったら半

子（ハンス）と命名する予定だったという。

路郎は四男五女の子沢山であった。

子沢山僕の枕はどこへいた

子煩惱がったんがったんしてくらし

ある時は子をだんばしてくひとめる

長女の純子さんは現在東京で住んでおられるが、次女御世子さん、三女御幸さん、長男ロンドンさん、四男洋さんは夭折された。

子を死なし学校に子の多いこと

だす入りの一つ欠けてもがたがたし

きてのない帽子があるに気がつまり

路郎も亦西洋名前が好きであった。日本名の子供が余りにも夭折するので、西洋名ならと思われたのかも知れない（之は私の勝手な推測）。師もクリスチャンで洗礼名をもっておられた。宝塚のフアー・ストバイオリンを弾いていた次男のアー・トちゃん、三男の一步ちゃん、四女の奈那ちゃん、五女のリリー（雅号梨里）ちゃんは今尚健在である。

路郎の本名は幸二郎、雅号は二郎が路郎にされたときいている。尾の道市の出生、大阪高等商業学校（現在の大阪市大）出身で、あの細い身体で相撲が強く、戒橋の上で喧嘩を売りにきた奴を二、三人投げとばした武勇伝がある。それもさることながら昭和十一年三月、川柳作家のブロを宣言されたことは偉大であった。

大阪に人あふるるも路郎いず 甲吉
路郎忌や美濃の大八備後の垂鈍 栞

（当時垂鈍さんは備後の尾の道に住んでいられた）

一人一人話せばみんないいお人
つまらないことおぼえている女房め
この島に人買族がきた五月
海女の輪の五月の空の笑い声
情容赦のない女が好きになる夜中

座右の句

大根の白さ故郷の彩になる

(酔々)

私の句

貝の風鈴膚のふれ合う音がする

西村 美佐女

川柳塔 七月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

路郎忌 西尾 葉 (1)

路郎先生の思い出 米沢 暁明 (2)

川柳塔(同人吟) 西尾 葉選 (4)

自選集 東野 大八 (29)

■川柳太平記(74) 川柳の群像 麻生路郎 (32)

■連載 誹風柳多留廿六篇研究(十六丁) (34)

「折句式大成」について(2) 阿達 義雄 (36)

水煙抄 黒川 紫香選 (38)

秀句鑑賞 [同人吟] 高橋 操子 (57)

..... 山内 静水 (61)

愛染帖 橘高 薫風選 (54)

路郎先生の思い出

米沢 暁明

この帖は藤樹先生の食べた鮎 路郎
これは路郎先生大洲ご一泊の夜の作品であ
る。そしてこの夜が先生と私の出合いの夜で
もあった。昭和十八年末曾有の大水害では、
二階まで浸水、記録や写真等水に奪われ、い
つかは定かでない。昭和十七年長男誕生祝
いに贈られた揮毫だけは危く助かった。

その後 大阪は住吉区万代西へ何回お訪ね
したことが。如才ないご夫婦の仲のよさに何
時も魅せられた。ハワイからのパイナップル
を「さあ、お上り」と出され、クイックスロ
ーの扇団をいただいた夏、ある時は、ご長男
ロンドン君命名のいくさりも伺った。先生の
一徹さに耳を傾けたものである。

子を死なせ学校に子の多いこと 路郎
亡くなったのは無論ロンドン君である。

◇

修学旅行の日程をお知らせしておいたら、
ご夫婦で宿までお訪ね下さったのには、びっ
くりしたが、それだけありがたかった。その
夜、心斎橋の古い大きな囲炉裏の坐っている

悼畏友伊藤茶仏氏……………	西尾 葉……………	(58)
にんげん伊藤茶仏……………	吉田 秀哉……………	(59)
村諷子さんを偲んで……………	森山 盛桜……………	(60)
娘と時計と川柳と……………	中川 滋雀……………	(62)
ボツの釈明……………	布施サチコ……………	(62)
新緑伊勢・志摩めぐり《富柳会吟行》……………	吉岡美房・藤田泰子……………	(64)
「クール」……………	辻 文平選……………	(66)
一路集「味」……………	神夏磯道子選……………	(66)
「返 事」……………	川上大輪選……………	(67)
初歩教室……………	本田恵二郎……………	(68)
柳界展望……………	……………	(70)
遠山可住句集「ふろんぼ」出版記念本社六月句会……………	……………	(73)
各地柳壇（佳句地10選／田中笑風選）……………	……………	(77)
編集後記……………	薫風・鬼遊・史好……………	(87)

座右の句

天の声まだまだ君の席はない

(紫 香)

私の句

果てるまで虹を追いたい花ざくろ

伊藤 春子

純日本風の店へ案内を受けた。大変な食道楽、いや食通とお見受けしたのは昭和三十三年。ついで昭和三十六年五月二十九日は万代西公園へ先生と林宏子さんと私と三人で散歩に出た。「この公園はあまり知られていないが僕の散歩道、向こうの建物は女子大」と仰言つて、こよなく愛されていたようである。万代池のほとりで記念撮影（川雜四一―号に掲載）の後、ご夫妻に連れられ、なんばの蓬萊別館で広東料理をご馳走になった。田舎者には珍しかったが、ビールを飲みながら懇切に説明を受けた。お別れしようとする、梅田までお二人で見送っていた。今でもブラットで手を振られたお姿が臉に浮かぶ。思えばこれが最後のお別れになったのである。昭和四十年五月末、東京からの帰路、病氣御見舞に立寄ったが、面会謝絶で果せなかつた。

川柳雑誌に投句しはじめ、先生との出会いに感激し、私の道は「川柳雑誌」と心に決めてから五十年近く、同舟近詠に遇され、実によい師に恵まれたと思う。「いのちのある句」を作れと先生のお声が聞えて来そう。

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ 路 郎
これが長男誕生祝の揮毫。後年の「作品頒布」は残念ながら返金となり先生の真筆はこれだけ。ご命日七月七日を迎えるにあたりこの軸をかかげ、師を偲ぶことしきり——合掌

川柳塔

西尾 栞 選

桜井市 岩 本 雀踊子

風よけになろう妻子が居てくれる

凡人の私に敵が居た吹き矢

病妻の愚痴を笑顔できいてやる

和を願う女になつた言葉数

つながりを残さぬ旅の花暦

憎しみの数だけ惨めさを残す

屑籠の中の月日に悔いがある

和歌山市 西山 幸

泣けるだけ泣いて人形眼をさます

女ひとりの不安を溜めている眉間

晴れた日がつづき造花を濁かせる

寝て起きてしよせん一人の豆ごはん

姿見が悪い冗談ばかり言う

退屈な人にかかわらないように

空海を読んで春から夏になる

大阪市 中川 滋 雀

ごもくめしああそうだったのか記念日

妻の目の死角でコントあたたためる

ひとり占めにしたいされたいのも女

犬養節ああで始まる山霞

吐くだけ吐けばシジミも楽になる

入院(二句)

鳩も雀も病人と知ってくれている

ありがたい事によく寝て叱られる

岸和田市 高橋 操 子

人間修得出来れば用のない此の世

角とれぬ石にまだまだある重み

雑草の花終日を蝶や蜂

忠告も耳にはいらぬ程にほれ

花の名も気高し十二単衣なり

立候補するらし親せきなどと言う

倉敷市

野田 素身郎

襟足をきっちり決めている浴衣

美術展眼鏡かけたりはずしたり

凝視してゐる女を見つめる美術展

待人はまだ来ず美術展二巡

雨の音妻よ朝寝を楽しまん

粥ひとつにも病院の味妻の味

出雲市

原 独 仙

無縁なり大型連休老一人

従いて来る君は愛しい影法師

自慢にはならぬ脱税トップ記事

窓際の欠伸課長の眼に射られ

働いて知る親の恩金の価値

わが底も自然の恩恵深みどり

平田市

久 家 代仕男

松の花ゆらげば妻の花粉症

質問を笑う解せない子も笑う

いけませんよしなさいでは育たない

尤もなはなしへ犬も座りこみ

同輩の頓死へ咽喉がひからびる

蟹縦に歩めば親の嘆くらん

京都市

都 倉 求 芽

吊橋を越えて散る散る山桜

矢車が明けゆく街をはずませる

永いから日が永いからした油断

冷静に見せてもライターの火がつかぬ

大空に空を書く筆が欲しい朝

不参するつもり突然のことにして

吹田市

藤村 女

春の高山カンカコカンに酔わせられ

飢えし過去思い出となる桜餅

忘れたい思い出ばかり流れ星

言い出せぬ思いを溜めて娘と別れ

批判の眼意識しているイヤリング

他人にはなり切れぬ血がまたうずく

藤井寺市

児 島 与呂志

諭されもするから人に愛される

気くばりが空振りで良い花も買う

手を貸せばうっかり倒れるかも知れず

のんのんと妻の言葉の可愛いくて

またひとり心の友の訃報あり

許される心を知ってる愚を信じ

松原市

玉 置 重 人

留年をしてて精出すアルバイト

登り坂誰かの銃に狙われる

マリンスルク戦艦大和を知ってるか

生き字引人さし指も煙草好き

熟年の自信免許を持つている

飲む打つ買うみんなあかんが生きている

松江市 恒松 叮紅

菜種梅雨知恵がわかない粗大ゴミ

デジタルを使って指先から呆ける

雪害が壇家へひびく後遺症

新緑に染まって無職恙なし

セールスと五月の風へ無駄話

墓石が春の表情して並び

松江市 柳楽 鶴丸

極楽にも地獄にも僕の椅子がない

五臓六腑へゴツンゴツンと河豚の肝

天は二物を与えぬ声美人

欲求不満ですクルミ割ってます

頑固な父が頑固者と叱る

イライラを鎮めてくれるモーツアルト

松江市 小林 孤呂二

国鉄の時計ばかりが狂ってない

国鉄の鏡に笑って貰えない

JISどおりの男ばかり丸の内

風呂敷の好きな役人ばかりなり

非常勤それはそれはエキストラ

掛がえのない命と定年後に解り

岡山県 嘉数 兆代賀

群れを離れた猿が出発点に付つ

世渡りの下手なおとこの茶漬け好き

決心がついて少年ガムを吐く

生きていく憂いが溜まる火消つば

あやまればすむにと思ふ波しぶき

花道もない晩春のネギ坊主

大阪市 小出 智子

五十過ぎこころで半分荷を下す

都市砂漠やさしい男が増えてゆく

妻とした約束だからすぐ忘れ

たった一つの答えを探す松林

嫂の冗談だから笑えない

失敗の数をかぞえる雨もよい

八尾市 宮西 弥生

当分は現状のまま花も散る

友達をかばう同じ傷をもつ

五月の日傘に心の揺れをもっている

角のない言葉の愛にある不信

憎まれぬ立場にあつて休暇なし

ふるさとへ帰るまでがふるさとで

倉敷市 小野 克枝

肩書きも欲も青葉のひとつしずく

不揃いの顔で退屈させぬ妻

似合わない柄に迷って女です

新調の服に気付かぬあ夫婦

指図してくれなくなつた墓へくる

一つ引き一つ返して逢う暮し

兵庫県 遠山可住

初夏の風もらう庭木を一つ買う
遠足の列へ車窓で応えとく
船下り川はスリルを一つ持つ

人柄はお人好しだけかも知れず
女房に慕われて居るありがたさ
ものにするまでの熱意と読み取られ

春を待つ土は野心を抱いている
一匹の鮎半日の釣自慢

第二の人生課長に遠い椅子もらう

島根県 堀江正朗

夕暮れて音のペースが速くなる
幸せが逃げます腹を立てたなら
甘えてはならぬロボットにも劣る

花言葉忘れ大きい荷を背負う
肩書きの大きい方へ村雀
修羅の風ぬけて気ままなシャボン玉

米子市 小西雄々

もう一度念押ししてみても薄く自信
緑みどりと気易く書いてサテ緑

孫男子誕生
鯉のぼり三十五年目に泳ぐ

一喝のあとの淋しさ疼きだす

地方紙の身近な記事に茶をすする
嘘も混ぜ不況に耐える策を練る

鳥取市 小林由多香

そばで見る夫は心に花を植え
老い先は石ころ道でない祈り
テレバシー夫に色彩乗せてほし

粗大ゴミどころか宝の夫です
不整脈に負け一日の長いこと
平穏な厳しさ夫の白い杖

すみませんその一言で丸く済み

町内の道具にされる粗忽者

洪ごのみそんな貴方に惚れました

鬼の腕時計よ急ぐことはない
何ごとかわからぬままの春狂い
眠らせてたまるか太鼓乱打する
神々は次のマジック考える
一字ずつ伏字をたどる崖の道
雲の峯そろりそろりと参ろうぞ

倉吉市 奥谷弘朗

米子市 八木千代

米子市 林 瑞 枝

木偶といふ孤りを見舞う笑い独楽

青空へ名刺を飛ばす南風

樹の下で手の鳴る方へ耳澄ます

檸檬ただよと鬼が眼を醒ます

シグナルの赤に感謝をして見よう

計画のメモから落丁見付け出す

島根県 小 砂 白 汀

呆然を残し巢立てり風の中(孫娘進学)

けつまずくことにも慣れて転ばない

花むくろいまさら過去を想うなよ

水子地藏にしゃがむ女の重い過去

出っ入りつ雉子も伴侶を得しもよう

委託駅そばを打の手で切符きり

富田林市 岩 田 美 代

辻袂をあわす葉桜になつてから

きれいごと並べて五月を汚してる

ねぎ坊主はじけて言いたい事があり

一本の桜吹雪を浴びた駅

貯金帳好きな女で無口なり

花の下すぐに忘れる小指と小指

竹原市 小 島 蘭 幸

雨が降ったら困る案内状が来る

連休をぐうたらパパに徹しきる

猫抱いて男は信じないことに

藤の花母のうしろに亡父がいる
曇天や郵便受けが飢えている
亡父の友達と話をして帰る

堺市 高 橋 千万子

三面鏡今夜逢う人着物好き

相性は凶でも添うて見たい人

式間近娘のデートも世帯じみ

色直し炎える女に作り替え

真相へ心の弱さ背を向ける

不純な恋春雷に裁かれる

大阪市 津 守 柳 伸

今日よりも若い日はない水鏡

姉ちゃんにされて地を出す市場籠

孤独ではなかつた友の痛み止め

ライバルがとても気になる糸電話

もう泣かぬ女が明日の虹を追う

愛憎の鬘に謀反が落ちてゐる

八尾市 高 杉 鬼 遊

核を背に天が下なる蟻地獄

パソコンの世に営々と辞書を繰る

メガネ屋がよろこぶ美人近視説

信号の通りに人が歩かされ

白靴をはく七月の輝けり

老いの背を老いが見送る夫婦とや

岡山市 時 末 一 灯

夫唱婦随破調のリズム生きている
止り木で上着を脱いでからおとこ
ロボットを酔わせる酒を考える
飲食の果てのため息など聞かぬ
背伸びして果て清貧というのかい
蛇の目傘たたむここらはビル谷間

竹原市 森井菁居

入院のバジャマ明るい彩を撰る
手術前五分を多弁になる男
両眼を病んでる人も居る救い
先駆者のメスにすがって楽になる
俺の目に光が戻った日の夕陽
不自由な眼にも五月の風光る

岡山市 川端柳子

虫さんにお毒見させた菜っぱ購う
一万円息をつく額遊ぶ額
六月の多忙さ留袖三度着る
好きな色着るのになんの世間体
下町に相性がいい丸い顔

「ほな、さいなら」そよ風となる京女

鳥取県 川崎秋女

真中にいる幸せの飯を盛る
悪書食む山羊を飼ってるモデル地区
悪書だと言うから覗いてみたくなる
一つだけ昔話をもつ蝶々

予定日へ軽い音楽などいかが
切つて女が泣いた雨の午后

島根県 榎原秀子

春の陽をおそれる帽子と草むしり
たのしくて楽しくての時少女かな
水くぐる度本音をみせる藍緋
疑惑少し晴れ平常心を取戻す
蚕豆の花のさかりを鯉のぼり
レース編む指先初夏の風を知り

米子市 青戸田鶴

連翹よいつまで続くぬかるみか
夕ぐれの道へ木連浮きあがる
刺子さす一針ずつの歩みかな
あの壺を買った時から迷い出す
菜の花の海で死にたい蝶の夢
春なのに訃報ばかりが追いかける

米子市 雑賀美世

あじさいの謎へ動かぬかたつむり
どの貌であじさい今日を生きのびる
あじさいの心変わりを覗く雨
ロボットの耳へ童話が届かない
盗み見たカルテの謎が解けぬまま
滝壺へためた迷いを捨てに行く

米子市 菅井とも子

冒険と思わずつばめ飛んで来る

周遊券別れのドラマ繰り返し

四コマの漫画今でも埋らない

子供の国から方言が消えてゆく

盗まれてやつと気づいた赤いバラ

涙壺涸れてあしたがもう見えぬ

名古屋市

越村 枯梢

食べすぎて消化不良の糞もいる

そろばん玉ときには拗ねてみたくなり

太ッ腹叩いてみせてみたものの

掟など要らない春は無法者

棺の中紙と鉛筆入れておけ

親ゆずりの貧乏大事にして生きる

熊本市

有働 芳仙

素晴らしい嘘聞いている聴診器

星影のワルツで本当に別れて来

華麗なる過去のページを又あける

着飾ったママは見すてたものでなし

靴の跡砂丘へ笑いこけている

溜息の重さが違う差し向かい

西宮市

杉浦 婦美子

明日はまだ白紙があると言いつけ

傲慢な女にもあるアレルギー

眼を閉じてあなたの嘘をゆるします

一張羅着ても敬語がひっかかり

ハイハイと素直女房も酔うている

月並な慰めみんな他人様

松原市 北野 久子

村開発亡母が居てたらなと思つ

夫婦かな妻の落度を庇うなり

孫の留守憂さを晴らそかペン持とか

一枚の葉書こんな弾ませる

好きな柄二つ並べて金は無し

挨拶は独り善がりのかなつんば

京都の旅(二句)

岸和田市

清野 こう

異国語でガイド率いる三寧坂

鞍馬山土産に嬉しとちの餅

雨の音嬉し茄子苗植え終えて

観察を記して孫の鳥の世話

春や春老いも明るい彩を着る

胡瓜の手とらす夫の助手となり

大阪市

西出 楓楽

老父母と語る日心の休日に

つじつまは合わないけれど生きてゆく

疑うより信じることの気楽さよ

脳みそがいつまでたっても熟さない

ため息を雨の降る日につかぬよう

悪筆の中から誠意こぼれ出す

和歌山市

浦野 和子

一生は何だなんだと言つ枕

桜草おんなは優しい方がよい

生きていて逢えてよかつた柿若葉
衣着せた話に飽きるティーカップ
単調な一日ひと日の養生訓
女から見ればおんなのテクニク

大阪市 神夏磯 道子

春雷に脅かされた凡夫婦
菜の花も桃も咲いてる忘れねば
健康は相手の気持ちにもなれる
洗濯をする時妻に嘘がない
列島が小さくなつた宅急便
したたかな雀に恐いものがなし

桜井市 河合茂雄

生きるのに邪魔な角ならとつておく
定年があつて良かつた悪かつた
下手は下手なりに続けた趣味の道
台本の梓からそれた逆転打
エリートの露払いしているピエロ
一枚の百円玉の重さ知る

倉吉市 渡辺 菩句

冬のカマキリに似て来たとも思ふ
水仙の夢をたぐると巫女がいる
金輪際敵を殺せぬかたつむり
どの壺も魔法の話しながらぬ
どこか洩れているのは僕の事らしい
眠りの世もこの世も同じ山河なり

高石市 牛尾 緑良

明日の空見せたい父の肩車
子の視野に合わせる父の背くらへ
喜びも涙も目尻からこぼれ
前進の一步へ妻の子の重み
少食でよく寝る老母の置き土産
合掌をすれば面影ある仏

大阪市 鈴木 節子

わだかまり少しほぐれていく枕
ひとりになるときつと転んでばかりいる
趣味の会お名前だけは知っている
留守番電話がすらすら話をしてくれる
曲つてもまだ坂道が続いている
遅すぎた花だが一寸褒めておく

西宮市 奥田 みつ子

砕け散る怖さかたばみ未だ知らず
京劇を観て(二句)

貴妃の艶いま玄宗の酔心地
胡弓の音耳に残して春おぼろ
子離れの部屋に胃の赤い紐
雨の午後いろは唄など書きもして
幸せも砂の上なり主婦の午後

島根県 松本文子

自己弁護今日の風船ふくらまず
二杯目のコーヒー心も冷えてくる

春うらら入院するかも知れぬ人

言ひ訳は緑の風のせいにする

日記帖あのこと書こうか書くまいか

紅少し落した午后の憂うつよ

米子市 林 荒介

落武者が遺してくれた麦とろろ

雑踏を逃れた服が吊つてある

ひとこまの漫画の中で箸をとる

火と水があつて大きな月を待つ

闇を抜け今も聞こえる弓鳴りよ

約束を果たし葉ざくら彩を増す

岡山市 行 吉照路

裏方が時計を止める演技する

肩の荷を男の顔に書いてない

返り血を夕日に男の貌帰る

持駒に爪をもがれて啞になる

生臭い五指はそれぞれ罪かぶる

だまし舟泣かせるそんな数え唄

大阪市 西 森花村

老人の朝は眼鏡をまず探し

笑つても泣いても客席沸いてこず

正価では損したように妻は買い

アスファルト故郷に足跡残してず

女見る時は乱視の社長さん

京都市 松 川杜的

宝川、四万温泉の旅に

北の旅桜前線に歩を合わす

春の宿天ぷらに出た露の臺

陽疲れの眼に残雪の宝川

桜吹雪白衣観音も眼を細め

宇治にて

三の間で先陣争いの声を聞く

美祿市 安平次 弘道

遣伝子操作神を怖れぬ果し状

猜疑心リンゴよりリンゴなぜ赤い

窓際ではずまぬ毬を突き続け

暗い過去かくす女の饒舌よ

只酒に酔うて明日を見失い

大阪市 川 口弘生

一重には一重の匂と可憐さと

一葉はにぎりえの花曇り

里帰りした花もあり花の里

大阪の花関山で締めくくり

花の裏嫁ぐ人あり通り抜け

綾瀬市 大山と 金

吹き溜る花の命はすでに失し

カンガルーのように子供を腹に抱き

マスコミのお先走りは困りもの

習うより盗めと先輩こともなげ

厨事しながら時折舞の新作

奈良市
絵に画いた餅とはうまい言いまわし

森田 カズエ

定退の父きつちりと朝起きる

倉敷市 藤井 春日

先代は話のわかる人だった

署名捺印嫌な予感が背をはしる

補聴器のいつかははずれている多弁

東大阪市 森下 愛論

ピクニック土の匂に触けてみる

簾越しビールの泡を嬉しがり

しぶぶ湯に浸り我が家は平和です

兄死す七十二歳

大型連休西へ西へと旅立てり

まる十日眠り続けて永眠し

東大阪市 斉藤 三十四

一合で桜の下ではずむ古希

ギャンブルにくれてサラ金に追われ

三更の月に寝みだれ気にしない

名月に遠慮しいしい肩を寄せ

針を持つ祖母は先生とも呼ばれ

仙台市 川村 映輝

世界を真二つにするロス五輪

日の丸に向って不可解な眼が通る

ベレー帽気取って見てもピエロめき

おしんでも我慢できないこともある

気の強い妻にかしづき五十年

完全犯罪天知る地知る己知る

菅屋市 竹中 綾珠

朝風呂につかりこの儘死ねたらなと思ひ

嫁がせて父の晩酌量が増え

老いの眼に涙どの娘も優しくて

人の世の奇しき運命の糸手繰る

人生の旅路の峻しき知るも老い

菅屋市 竹中 綾珠

新築の一番風呂の昼の月

子や孫と共に暮せる昼の風呂

息子に連れられ散歩の波の音

新築の神殿拝む閑けさよ

気くばりをうるさがられる老いの日々

東大阪市 桑原 喜風

永病みの妻に小刻み返す恩

同居して嫁のペースに染む生活

自炊から日に日に慣れる塩加減

若い娘の敬遠を嘆く針仕事

浜田儀一さん逝く

本名で通した呼名句座寂し

柳井市 弘津 柳慶

君が代だけは音痴もまともなり

暦だけ進み雪はまだ残り

議事進行後の宴席が待っている

結婚などどうでもいいの会いに来て

好き嫌いはつきりさせて嫁き遅れ

神戸市

中村 ゆきを

ハッピーのポーズ覚えて知恵おくれ

若い娘に囲まれ神経痛忘れ

ひとり旅みな寂しくて温かで

かけひきも打算も捨てて旅の空

汚れなき心の飾り亡父に受け

太田市

藤田 軒太楼

うすうすは感付いていた艶話

足もとの吸殻見詰めて待つ弱身

言外に匂わせ誠意示しとき

あの時の友情なぞか忘れまじ

嫁がせる父には空しいお立酒

笠岡市

松本 忠三

きりつめた家計足許だけを見る

妻の意見素直に聞いて年を知る

大の字に寝て神棚の煤を見る

ゆきあたりばったりその他大勢で

女房の仕度へ一足先きに出る

島根県

西村 早苗

雨になり窓へ思案の顔をたれ

今夜逢う意識の中の美容院

とやかに言うので監事さしておく

日傘さす女に出逢う坂の町

ほろ酔いの顔食卓に残される

大阪市 天正千梢

はぎ婆にしかと挨拶申し上げ

閻魔大王の手形をもらい安らぎぬ

不器用さ自分が一番知っている

人間関係が仕事の幅を決めてくれ

熟年で吸取紙を替えずぎる

寝屋川市

宮尾 あいき

母の日の墓参うれしいうす曇り

風薫るひらどにむせる父祖の墓

一人分の切符で妊婦広く居る

座席ゆずる年上の人乗って来ず

人間の都合で御地藏様移転

和歌山市

内芝 登志代

もう一度貸して成功祈ってる

いい腕を機械が駄目にする歎き

病む身でも女衣裳へ眼の動き

店守る老にエプロンよく似合う

野心もつ背に新緑が燃えている

今治市

越智 一水

日々好日孫が耳打ちしてくれる

とび石連休短い人に長い人

ロッカーを選ぶ数字の好き嫌い

いれずみの男が滝の中に立ち

婚約の肌へ化粧がのつてくる

倉敷市

小幡 里風

花愛す妻でお茶が冷えている
さつき咲く悠々のそり孕み猫
秒針のリズムに伸びる無情髭
生返事無理に笑うてつくろいぬ
筈の自信隣へ無斷顔を出し

八尾市 内海幸生

遠吠えは聞く耳もたぬ筈の耳
三日でも日記を買わぬよりは良い
腹たてて犬を蹴ってはなりませぬ
大波のあとの小波に足とられ
夕闇が禁酒の誓いまた破り

岸和田市 福浦勝晴

妻(二句)

絶世の美人に遠く妻達者
妻曰くあんたつてほんまにあかんたれ
極道の果てパチンコに辿りつき
エリート序幕を飾る週刊誌
スキ鍋をひっそり突つく母子家庭
忘れてたゆっくり歩く楽しさを
不可侵に徹し一枚貝となる
一線を引いてひかれて平行線
警官を見て強盗と思うまい
赤紙を刷るには足りぬ防衛費

和歌山市 若宮武雄

兵庫県 河原みのる

首相外遊自腹痛まぬみやげ撒き
自民党よ三ツ五ツに切ればよい
面子など捨てて休耕解き給え
兼農もあまりの連休もて余し
返済のメド強盗と書けもせず

大阪市 河井庸佑

お互いにさぐり合つて初対面
はいはいと聞いてはいるがやらぬだけ
管理職越えねばならぬ壁があり
風向きが変わってきたなと管理職
口べたが余計なことはよく回り

橿原市 岩井本蔭棒

港また騒然とする核の有無
スピードの目盛りを叱る母を乗せ
緑蔭の恋へ毛虫がぶら下り
逆転を狙う男の目が静か
棧橋の別れを泣くか島も雨

寝屋川市 柴田英壬子

立食へ控え目に摂る血糖値
母の日はとてもやさしく聞き上手
試されているから逆なことと言い
堺すじある時タクシー横へ外れ
水中花砂漠の花粉持っている
綱渡り綱を揺さぶる人がいる

富田林市 藤田泰子

そろばんを弾くゆとりも出来た恋
そよ風をいつでも遅れて来る女
待たされて病気になった医者通り
花を買うことも忘れた二三日

京都市 山本規不風

オリンピック狐と狸の運動会
オリンピック聖火の炎にある戦火
嘘つきの競技を創るオリンピック
オリンピックやがて喜劇の新記録
オリンピックの言い訳に無理通らされ

神戸市 仲 どんたく

運転の腕信じるとするハイウエー
名物の蟹を迎える国なまり
見せしめのように廃車の山を積み
半世紀ぶりの故郷が朽ち残る
南無女房と呼んでやもめの夜の酒

藤井寺市 吉岡美房

菜の花を一畝残しダンブカー
無心にはなれないままに春有情
豌豆の花を見付けた造成地
サラ金で売ってる地獄への切符
飛行雲河内平野を真つ二つ

大阪市 江城修史

母の日の花屋にもっとも風薫る
老化とは哀しきものよ物忘れ

春愁の頼春雨に濡れ乍ら
執念に生きた命の無為無策
方便の嘘はさらりとと言えるもの

島根県 大森孝華

産卵へ春を信じて夫婦鳥
風車今日はどちらを向いたやら
向かい風丸く納めたお人柄
旅の空お国なまりへ振り返り
年古りてきしむ水車も春の音

倉吉市 渡辺独歩

謹んで申せば威猛高のひと
急ぎ足それはローンのなせるわざ
ひらかなの里があるなら住みたいな
いさかいを持つ日紫煙が輪にならぬ
掌中の珠が登校拒否にでる

松江市 舟木与根一

腹が出て悠々自適と間違われ
足腰にまだ空元気だけはあり
定退でも勲八等へとどかない
夏草の伸びに余生は付いてけず
ソバカスのどこがいいのか腕を組む

和歌山市 松原寿子

大樹からの熱い言葉へ向きを変え
哀しい指へ余韻ひろがる日の受話器
オルゴール風の蒼さに溶けてゆく

煩惱の火をあたためるピエロとも
振り向いても愛の路線にあるさだめ

島根県

林 露 杖

倒木の処分馬謖を斬るおもい
散る花に金のない身の詩心
遠国の友の計をきく花の雨
自叙伝に格好いい失敗なら書ける
住職も稼業葦酒を拒ばない

鳥取市

森 田 熊 生

正直に話して笑う歯が白い
好き嫌いないテールブルの音をたて
妥協して来た足音が弾まない
さようならの空をつばめが斜に切る
風紋と対話裸足でかけてみる

和歌山市

堀 端 三 男

策立てる間は黙って小言聞く
撫肩の男思わぬ芯があり
掲揚台山の分校の立志伝
飛躍したきっかけたぐれば母が居た
はめられる穴とも知らず深く掘り

大阪市

黒 田 真 砂

句読点ない人生の落し穴
行きすぎの愛たしなめるぼたん雪
ゆきずりの人にふと見た亡母の貌
花に座し心に固い鍵を持つ

一步置いて夫見つめて居るゆとり

守口市

羽 原 静 歩

定期券シルバシートに縁がなし
雑草の生きるかぎり天を指し
日本の敬語そろそろ呆けてくる
太郎塾太郎も花子も酔うている
相槌をうってたっぷりスバイする

諫早市

原 田 明 春

太陽が一日燃えた色で没ち
真すぐに歩いて左遷とはあわれ
パチンコで足らずマンガもおやじとり
男女同権女いたわるのは男
今は山中今は浜新幹線の速すぎる

吹田市

西 川 景 子

遠い昔Sと言われた友に逢う
軽々とジルバ還暦過ぎた友
電話しきり同窓会の通知きて
ころし文句堂に入ってる友と飲む
友独りうちの宿六好きと言う

富田林市

中 村 優

振り向かぬ男の背なで見せる意地
鬼瓦松竹梅の夢を追う
闘いの跡のむなしい灰皿よ
未練など持つてはならぬ花吹雪
句読点妻の笑顔で締めくくる

七尾市 松高秀峰

百までも生きるつもり竹を踏む
五十路過ぎ鬼門を避けた兎小屋

兄弟の肩寄せ合つて七回忌

四季の花咲く奥能登の無人駅

身に余る栄転ライバル胃をこわし

和泉市 西岡洛醉

感傷のつまずき片道切符だけの旅

成るように成つて今から酒にする

各停の人生だつて春は来る

飛び越えた敷居に敵の目があつた

うっかりと乗つた話に鬼が住み

大阪市 長谷川春蘭

潔く散るすべもなく造花あせ

亡き父の土産こけしにある絆

貴族的紫好む御曹子

網棚に今日の疲れを置いて帰に

肝心の話忘れて電話切れ

大阪市 那須鎮彦

一片のパンの幸せ忘れかけ

なあホタル天国の母達者かな

火がある人が居る雪が降る

皿に盛る味に国境などはない

倅せな女からもらう星の砂

大阪市 藤田頂留子

マンガラの世界に会いたい手を合す

北海で春がすねてる初夏の風

せつかちな世相に季節も歩をそろえ

無用の長物止つてる自動車

だんじりばやし亡兄の声(杭全神社夏祭)

貝塚市 行天千代

友ガンで死す(二句)

花満開友よ友よ散り急ぐ

小さくなり花に埋もれ別れ告ぐ

花菖蒲ぬれて色ますなやましさ

心電図少し乱れて気が重い

生きてれば今年私等結婚式

兵庫県 辻文平

多情仏心誤字のまま綴る夢

五線譜をこぼれてからの父の唄

寝返りを打つて未遂の罪を溜め

逢えぬ夜の仮面がずれてゆく女

蛇口からポトリと母の数え唄

唐津市 仁部四郎

朝七時渦へ小舟を今日も出す

男ならあえて噂の渦の中

二つほど自力で抜けた渦もある

ネクタイを撰んで渦へ橋を架け

男なら渦のデザイン描いてみる

唐津市 浜本久仁於

運命を変えた或る日の時刻表

肩の荷がおりて体が重うなり
旅人の泣いた峠のハイウエー

考古学神代が一つ出土する

カラオケの苦手が酒をつぎまわり

唐津市 浜本義美

チョッピリの嘘が重荷となる心

話合い妥協ができぬ隙間風

空振りも諦めきれぬ親探し

鉢巻きをすれば値上げに跳ね返り

遊び場が増え住民は貧しかり

唐津市 田口虹汀

最高の倅せと言う靴の音

最高は幸も不幸も貝にする

母さんの良い人に会う七回忌

空振りの券が舞い舞いする広場

上向いて瞬きばかりしてる父

唐津市 久保正敏

出勤の途中で男が捨てるゴミ

喪が明けて女がしまう涙壺

着ぶくれた患者が待たず医者 of 耳

体臭を消せば消したで妻の鼻

業績が伸びて汚染がひどくなる

唐津市 木塚素石

商魂が季節と味覚狂わせる

峠茶屋雲に心を乗せてみる

連休に数字一ばい母のメモ

値札なく客に決めさす陶器市
手をつなぎ心もつなく春の旅

高知県 松岡三吉

アスファルト転んで握るものがない

朝酒をゆるしてくれる日曜日

おはなしの上手な人に負けました

時は流れて妻の帰りをまつ灯り

一筋の涙が父としてこぼれ

高知県 赤川菊野

憎んでも憎みきれない血の絆

春雷を遠くに聞いて孤をかこつ

家系図へ積木くずしの子が一人

孤り寝のまくらを鬼が攻めに来る

五十路まだ愛のモチーフ編み続け

大阪市 欄 蘭

割勘へ下戸の財布は固すぎる

見合慣れ娘心はときめかず

ゴールデンウィーク古里の水うまかった

良いニュース無くて誘拐よく流行り

定退後の地図は自分で書き入れる

大阪市 清水健司

罰金刑運が悪いと思うだけ

事故よりはましだと思ふ罰金刑

ニコリともせずに婦警の書く調書

釘のかずすこしへらした罪と罰

罰金を貸してほしいと頼む釘

西宮市 野呂鶴汀

笑いつつ軽く他人の子を叱り
善人の笑えば前歯抜けていた
友が死すただ庭先を行きつ来つ

酒の席隣は景氣よい話
灯を消せば父母が生きてる闇の中

大阪市 北勝美

母の日に少しは妬ける男親
手話の指顔一杯にありがとう
セーターを一枚脱がせた藤の花

卯の花の歌に童心よみがえり
兼ねるのもくらしの智恵か誕生日

西宮市 林はつ絵

叔母の葬里は変らぬ灯をともし
叔母逝きぬれんげ田の中櫓の中
お互いのつのをよく知る金平糖

サラ金のマツチでお灸点けている
雑犬に知らぬふりされ雨の中

米子市 桑原伊都

夫婦ごま廻して幾つ数え唄
豆のつるのび大空へピアノ弾く
熱意だけは汲んで叱らぬ通知表

三猿になって都会の渦の外
遅刻した春がりズムを取り出した

米子市 田中亜弥

ネガの中の嘘なら許すことにする

一ページから笑いとまらぬ悪書です
中心は五体のへソと神がきめ
ローカルの踏切棒はすぐ上り
礼服を着るとやさしい父となる

角とれた石よころ転ぶなよ
墨の香に私の性を覗かれて
しんどうて亡夫の分まで生きられぬ
のらくろよおたまじやくしと出ておいで
一杯のレモンティーです時事漫画

米子市 野坂なみ

ああ平和腹をへらしに朝走る
らくだのあくび覗きこんでいる歯医者
流行の靴きらいぬく魚の目よ
回り道したのを知っている雲雀
単語だけならべ娘の長電話

賀状以後定年云々ばかり来る
乗りすごすほどの名著にやつと会い
渡航談せぬは能ある鷹のよう
万緑は写生の兎らの手に余り
べ・アに縁なくラ・テ欄が糧

寝屋川市 江口度

町田市 竹内紫鏑

羽曳野市 佐野白水

鴻池新田会所跡

河内から今橋見えた火の見小屋
鴻池が儲けただけの会所跡

鴻池が儲けただけの会所跡

鴻池が儲けただけの会所跡

鴻池が儲けただけの会所跡

鴻池が儲けただけの会所跡

弁天池の庭は役人だけのもの

野崎まいり

墓地出来てお染、久松山を降り

差別戒名展にて

観音も釈迦も差別をせぬ教え

弘前市

波多野

五楽庵

白足袋をはいて涙の席へつき

哺乳瓶残りを二歳の姉が待ち

戒名のついた子がいる不倖せ

耐えるより知らぬ女に育てられ

イデオロギー捨てて自嘲のほそ顔

福岡県

横地

雅風

孫寝る娘へ灯明の数増やす

今掘った筈ですと両隣

趣味朗々庭師暫しの手を休め

かさむ荷は義理果したい旅みやげ

いい娘見れば息子に結びつけ

八尾市

山下

みつる

革新の旗手もいつかは変わるだろう

月給とローンの借りが釣り合わず

台風の芽に成りやすい老母がいる

体操をして熟年に活を入れ

都会から逃げた雀が山で飢え

河内長野市

井上

喜醉

下ッ端は列にいるだけ気が軽い

形身分け喪服の陰にあるいくさ

自腹まで切って宴会盛り上げる

本能の虫が知らせた三りんぼ

大臣になって大きな嘘がつけ

新宮市

川上溪水

控え目な言葉を撰っている余裕

トレードに互いに出したい倦怠期

自分から齡のせいだと言おう不覚

向こうさんはライバルなどと思っていず

言い訳の誤算は恥をうわ塗りし

玉野市

小谷仙山

計算の下手な女の面が好き

疑心暗鬼梅干の種までしゃぶり

鬼が買うきつと仏の面だろう

髪洗う五月の風は浮気もの

弱肉強食魚の世界も人の世も

岸和田市

原さよ子

花に酔い人にも酔うて通り抜け

ふり向けば子も振り返る曲り角

寝たきりの人を訪ねる重い足

バリウム飲む前から狂う胃の調子

チャンネルに合わせて入る孫の風呂

岸和田市

島崎富志子

寒冷

風邪三日起きれば庭は春の色

カラオケがはやりしんみり酔えぬ酒

老婆逝く金使うすべも知らずに

子に重荷課して夢とは思つてず
いつからか似て来た夫婦のくせいくつ

和歌山県 天満 三千代

春風を待ちくたびれて蔬菜果て
貧しさも美味い空気のある誇り
米をとぐ一粒拾う流し台

御先祖の汗も肥料となる稔り
連休もラッシユも野良は無関係

出雲市 吉岡 きみえ

七月七日亡母の忌

花が散り蛙鳴き亡母の忌が近く
いっときの倅せなどはもう追わぬ

許されぬ罪を背負うた半生記
酒に罪着せて男をかるくする
ほんとうの素顔が隠してある鏡

豊中市 田中正坊

所により雨とはずるい気象台
公園がきつと出てくるメロドラマ

少女雑誌バッグに秘めた青い性
そつと手を握っただけのスキヤンダル
一〇番警官が追う警官

東大阪市 崎山 美子

小説になりそな半生ふり返る
寄りそつた二人に楽しまわり道

ドラマのよな出会いさがしにひとり旅
PTA親もライバル意識もつ

スター夢見てすみれの花咲く門くぐる

岡山県 土居 耕花

焼香の順に美男の顔をする
パーマ屋を出てもおんなじ妻の顔

首少し傾げた馬鹿な影法師
絵心が一服させる松並木

お上りの二度目は独り法善寺

大阪市 吐田 公一

出嫁ぎが故郷へ帰る髭を剃る
双葉マーク体よく同乗断わられ

一円玉拾う勇気がまだ残り
また父の苦労話を聞く苦労

回転椅子いともクールに背を向ける

枚方市 稲葉 星斗

一箱の苺の数に母困り
押売と間違えられて笑う客

泣き乍ら木馬の耳をしかと持ち
週刊誌親も気になる記事があり

休日新聞だけは全部見る

大阪市 杉本 智慧子

草いきれ土の香りに身を投ず
母の背の温み忘れたベビーカー

とり立てた用もないのにプッシュホン
デパートで習った中華のレパートリー
花菖蒲生けて床の間改まり

出雲市 園山 多賀子

蛇口から今日の幸せ掌にうける

糸底が欠けて或る日のわだかまり

人真似の上手な猿に餌が寄る

雨の日に言葉遊びに刻移す

舌先きの愚痴を呑み込む喉仏

岡山市 井上柳五郎

しくじりの予感言いわけはや模索

やんわりの皮肉深さへ間をはかり

病気かと目立つ白毛の不精ひげ

落込みを踏台として練り直し

祝休日稼ぎ時なる勤め持ち

岡山市 岩道博友

見え過ぎた事実へ鬼の嘘を借り

全自動便利の良きへ落し穴

地下街に来てから響く片ちゃんば

花嫁へ持たすマツチへ無いかまど

ハンカチの色真白で反省日

姫路市 大原葉香

道ばたの小石お前も無口だね

通帳の残高へ夫婦しがみつき

一日のリズムに慣れたパンの朝

相手の気ためすつもりで酒こぼし

わけもなくライターつけて又消して

岸和田市 芳地狸村

京都に旅して

深緑に映える鞍馬の雨上り

千年の伝統生かす荒法師

いまもなお晶子が生きる冬柏亭

境内にゴルフ姿が見える寺

松原市 佐藤藤子

負けそうになるから化粧するのです

嘘などはつけない女の子守唄

その艶で歳ですなどと言わないで

風光る呼吸の中にいる女

陶磁器の土の情けと火の素顔

姫路市 丁坪サワ子

曲り道抜けると亡夫の待つ浄土

母の日を素直に喜ぶ姑になろ

病上り鬢(びん)の白さが目立って来

若葉映えこぼれ陽肩に坂登る

美容院百恵の育児に花咲かせ

西宮市 妹尾春江

亡妻を今も褒めてる愛してる

八十歳童女に戻ってかぞえ唄

美しく老いていく日のプログラム

柿若葉夢を繕う日の多し

森林浴今日は緑の雨が降る

倉吉市 野中御前

好きな彼女に紙飛行機をとばそうか

円周の中心だから動かれぬ
雨蛙が鳴いてるような乳児園

十二時に賑やかに鳴る鳩時計

ハネムーン親も知らないハワイ行き

浜田市

佐々木

裕

一端の社長をほこる元大工

香典の行方も書いて長者死す

妻とすりや細く長く生かせ度い

人の良さだけを取り得に利用され

極楽へ見切りをつけた嫁いじめ

境港市

細木 歳 栄

人恋し梅雨の夕べはなお恋いし

親指が今日失った自尊心

戸籍までキャベツ人形もって来る

かすみ草なれど持つてる小さな意地

燃えつきぬうちに愛の木つき足そう

西条市

片上 明 水

成行を一番先に背が感じ

引き金の指のびたまま春が逝く

花日和みんな背すじがのびている

末子が単立ちお膳の向きを替え

父の手綱旅の先までのびてくる

兵庫県

藤 後 実 男

左遷地でもうあきらめた日を数え

言う事を言つて茶柱口にせず

親も子も試験地獄の中で伸び

人妻の背の糸屑を取るこわさ

恋をして少しゆるんで来た指輪

大阪市 橋元 美 恵

日曜日トマトジュースの昼下り

外側で昔の恋を見て笑う

虚勢から始まりました酒タバコ

鏡拭く力いっぱい自己嫌悪

嫁いびりしなくなつたら惚けはじめ

今治市

矢野 佳 雲

ライバルの冗談知らぬ顔をする

カーテンで女一人を覗かせず

人が背に廻ると嫌う叩き売り

台所任されていて母達者

責任のない弥次馬が性にあい

出雲市

板垣 夢 酔

遺言にあらす手箱は恋の文

慰謝料がないから離婚言い出せぬ

定退より手強い赴任の敵迎え

高校の非行パーズン捨てたがり

留守番の財布に札が見当らず

和泉市

岡井 やすお

労使間未明決着スケジュール

管財人に管財人が要る破産

革新もアメリカ詣で何かある

苦勞して入学コンパの湖に死す

連休の終るを待つてつじ燃え

米子市

澤田 千 春

忘れたいことがある夜の月の顔

口べたが夕陽の海と対話する
かたわれの貝がらが鳴く夜の浜辺
長すぎる助走距離にはまがぬける
温かい空気のような人を恋う

尼崎市 西村 かすみ

着道楽陽の目を見ないしつけ糸
夕焼の道を音痴な子もまじり
父さんのおしゃれは糊のさいた白
仲直りすれば本気で拗ねる妻
まじないが効いて悪女になった夜

鳥取県 中原 諷 人

無念無想れんげ畑に亡父が居た
かくれんぼ避けて風ぐるまを廻す
寛大な心の的に妻を置く
悪役の頬に流れ星が見えた
窓越しに雀の笑う部屋がある

交野市 山本 テルミ

花の宴月もほどよい位置に出る
洗濯をハミングでする晴続き

大正が叱り明治が弁護する

次で下車言われてねむい春の旅
子と孫の事にふれ退屈なコーヒ

尼崎市 春城 年代

女王の孤独を蜂はしゃべるまい
落谷虹児のさし絵に少女期があった
わら灰の温みは母のふところか

住む人がどう変ろうと蛙鳴く
緑切りも緑結びもある宇治の神

出雲市 石倉 芙佐子

人柄と言っても水はこぼれそう
帽子掛わたし一人を取り残す
むらさきが好きで女になりきれず
天を突く夢を見ていた豆の蔓
三十五赤いシグナル付いて消え

尼崎市 奥山 美智子

ペン持てば雨には雨の思いあり
骨壺の軽さにことば見つからぬ
冗談が本気だったとは知らず
バラが咲く女の化身かと思ひ
それからのことは聞くまい傘を干す

大阪市 鍛原 千里

豆ごはん或る日の亡母を思い出す
子守唄忘れた女へ水の刑
落付いて妻は謀反を考える

三朝温泉旅行

うさ捨てる旅の一夜の三朝川
出会いも雨別れも雨の三朝川

宇部市 平田 実男

寝たつきり愚痴は聞こえぬことにする
料理より器の味がする値段
美人では売れぬコマーションシャルもあり
貯めているほうが質素な市場籠

表札へ亡夫まだまだ生き続け

島根県

藤原鈴江

水だけで生きてアザリヤ老い知らず
老木に花は昔のまま咲き

満月に女の素肌覗かれる

負けて勝つつもり意地のまま終り

老いてゆく男ますます片ちびり

島根県

木村はじめ

テレビなど見ずに終った父母の墓

金婚も終って残るものは風

百までは漕ぐ気夫婦の木の葉舟

老いの身に三面記事は怖すぎる

大根の値段の愚痴が悲しけり

松原市

本多洋子

風が来て三色すみれの細い道

木蓮の花に少うし嫉妬する

かやつり草いつか何処かで聞いた詩

看護婦長必要なことだけを述べ

あげられる幸せ献血台にのる

豊中市

上田登志実

達観の境地負け惜しみもあるか

新入の娘が活けたらし百合薫る

沈丁花市の花とする街に住み

買わなけりや当る筈ない宝くじ

正直な鏡言うべきこともなし

浜田市

中川幸一

神妙に意見聴いてるどん詰り

教科書にそつはないけど味もない

檻隔てどっちもどっち動物園

源泉で都合も聴かず控除する

慶弔にホンネではない世辞を述べ

尼崎市

角野かず子

夕食の手抜き知ってるふきんかけ

老人に飼われた犬は走らない

ふるさとの港に派手な服で着く

言い聞かせた筈の心が騒ぎだす

父を待つ表通りに風がない

西宮市

津山冬子

勘違いしていた事を姑が詫び

風みどり旅の電話へまた出かけ

誇れるは健康だよと老夫婦

アドバルンのぼりの鯉が気に入らず

いい返事五月の風が持つて来る

大阪市

岡田ふみ

殉教のように一人でブルートレイン

子に会いに旅しらぬ母空を飛ぶ

大正の生まれで警察信じきり

ふり返る事はかりなり老の春

腹立ちがしつこく後ひく五月症

鳥取県

金川満春

文化財亡母愛用の縞もんぺ

平和な日本古墳で沸いている

讚美歌を唄う女で黒が好き
相談に乗って男の義理果たす

大東市 土岐 トク子

母守る会より花束捧げられ
亡夫眼る墓に別れの顕祥寺

久し振り子（息子夫婦）の団欒に満ち足りて

さくら草路地にあふれて人誘う

松江市 竹内 寿美子

いびきかと妻の疲れをふと思ひ
最後迄漫画の中の一人です

春風に娘やさしく妊りぬ

切れた時ケラケラ笑う弓の弦

岸和田市 吉水 照江

中央アルプスの旅

五平餅の茶店にうさぎつながられる

協議員受けて社会へ第一歩（町の役）

鯉の軸茶花も活けてお茶を立て

赤を着てゲートボールにある意欲

岸和田市 古野 ひで

生きてゆく焦点にいる好きな人

逆境にかこつけて来る宗教家

憂き心溶かして呉れる春の海

蟻の列やっぱり先頭ボスでした

加賀市 細呂木 魯木

国境を気ままに越えてる渡り鳥

願ひ事多くて多面千手仏

狐にも狸にもなれずむきになり
釣糸にかかる魚にある因果

島根県 石田 清泉

逃避行地球の丸いのも忘れ
髪染めてスタートを切る古希の春

お隣が風で差つける鯉のぼり

花束よ父の泪を隠せるか

倉敷市 斎藤 通風

左遷とも知らずもてなす隣組
追伸の一行母の情とする

自負心の器用でメッキ剥けてくる
踏みなれた道に職安待っている

寝屋川市 稲葉 冬葉

世紀末カチカチ山の話など
スピードのエースを待っている女

錯覚の中で女が眠っている

幕引いてどっと出てくる玉の汗

島根県 松本 はるみ

泣くこともない身軽さは背信か
まだ女赤いブラウス網タイツ

焼香をしながらお布施のことに触れ

満潮に貝の涙はすぐわれる

羽咋市 三宅 ろ亭

外出の服装妻に検査され

辞書練ってよかった変な先入感

幹事する身になり出席の返事出す

億却なことには用意ドンをかけ

奈良県

宮川 古都路

尼崎市 伊藤 春子

宴会の膳ふきぬける花の風

他人の死重い空気の立ちばなし

無人駅桜吹雪のあるところ

運不運ゲートボールへゴルフ歴

姫路市

松浦輝 月

鳥取県 森山盛 桜

背信の古疵許す年となり

民謡が取持つ縁の共白髪

衣食住足って何追うわが奢り

茨道越えて夫婦の味が出る

島根県

岸本輝 水

一言の奥に含んだ針が見え
風上に向けた女の風車
鳩時計女に酷な時を告げ
背なの天忘れて自閉症になる

西宮市 西口 いわゑ

夜桜に急立てられて共稼ぎ

寝たきりへローカルバスの優待券

筆談が声を合せて笑いだし

手鏡が映す心の裏表

大阪市

山根 いつを

そわそわとせかされて引くルージュ
走らせてもらえる時の犬の目よ
野良犬の自由も欲しくさりながら
予言者を信じたくなる日の不安

加賀市 竹浪 浪寿

美人薄命金魚きれいな順に死に

風かおる五月の裏に雪の責め

裏切ってゆれる矢切の渡し舟

大黒柱五代ささえた黒光り

寝屋川市

堀江光 子

岡山県 直原 七面山

花に酔う幸せがある花の国

屋台店さくららの長さだけ並び

虫干しの半分ぐらい着ないもの

欲得をはなれた事がかましい

効いて来た鼻薬
叱る子も無くて秋
怒ったら負けと妻
都合よく風邪を引き

恍惚が白紙を出して五拾萬
絵心があればと思うぼたん咲く
ひとり寝にとりの猫でねむられず
好きだったことも昔の物語

自選集

正本水客

エイプリルフル雨降って止み降って止み

四月馬鹿いちにち写経していたり

春愁やポットのお湯がちとぬるい

春愁へブランドコがまだ揺れている

別れ霜無口な人と連れになる

若柳潮花

ひよ鳥が実物の鉢へ降りて来る

夜の蝶羽根むしられたように寝る

張り鬢のかづらに似合う蛇の目傘

春雷へ桜狂うたように散る

乱拍子歌舞伎踊りの道成寺

尼 緑之助

スポーツもいくさの道具目をまわす

ロス四輪三浦につづく世紀末

手もみ茶の香りしきりに古が誘う

はきだめの鶴小庭にも牡丹咲く

吉田隆徳氏長逝

ガン一発ばったり暁の超特急

工藤甲吉

核のあるうちは晴れない世界中

人生はよいしょこらしよにとっこいしょ

回らない時もちよいちよいある首で

新樹みな輝きやはり娑婆がよい

空想をたのしんでいる床の中

大矢十郎

路端の山を崩してパチンコ屋

先に泣いておこう人さま泣かすまい

大工さんに借りた鉋が欲しくなり

天婦羅油捨て方があるコマージュナル

和を保つための黙秘へ肩が凝り

野村太茂津

バイパスに町の中心動きそう
百姓をなさらぬ手だと見破られ

水粉千翁

水ぬるむ人美しく性洗う

目を閉じる白木蓮よ泣かないで

四捨五入したら仲間になれました

すがられてはらうたしかに親心

面壁を貫きて喝命研ぐ

金井文秋

染めない方がよいと言われる齢になる

今の話は忘れてくれと無理を言う

養老保険満期でもらう小さい額

地の利には勝てぬと知った店じまい

考古学大きいロマン掘り起こす

市場没食子

今月も出銭が多いカレンダー

大型連休単身赴任帰って居

ライバル視されて自分が大き見え

歳をとり過ぎて迷い子札が要り

国私鉄値上げお布施もほっとけず

梅雨しとど旅の一座に米が無い

月原宵明

誤算には気付かぬ父が旗を振る

儒教踏まえて老兵揺れる満員車

攻め方を戦闘綱要からもらう

斃される機先を制す武器である

フィクサーを大正ロマンで引き受ける

山内静水

町並はなるほど匂う酒の町

過去みんな忘れ参らせ祝い酒

盃に攻められ泰然自若たり

酔い覚めの水もなるほど仕込み水

酒巖し今宵はどうしても酔えぬ

藤井明朗

親と子のすき間を埋めることの日

貝になるおんなへ過去が追うてくる

家中の和が良心を支えてる

平和です妻が握っている主役

信号は赤家計簿は吐息する

米沢暁明

ついで見て杖の助けの大ききよ

眼を伏せて女耐えてる燃えている

きれいい好き名もなき女路地に住む

藤の棚日本髪にも藤の花

死んだのが損花紅く風みどり

贅肉がついて亭主に従わず

七十まで書き続けてた間違い字

本田恵二朗

さりげなく褒めさりげなく叱り

恋の芽がはちきれそうな春霞

安心と不安の渦に巻き込まれ

禁煙の手伝い船にしてみらい

紅椿笑顔のまままでさり落ち

黒川紫香

レモンスカッシュ今日の日デートに悔いはない

嘘嘘とやっぱり本音出てしま

泣かれたら困る女にまた泣かれ

恨みなど一と言もない置手紙

夢で逢う亡妻にシャッター押してみる

橘高薫風

路郎の忌これも魂金魚の朱

路郎忌の暑さと霞乃忌の寒さ

菊沢小松園さん百ヶ日 一句

万緑に松一本の涼し気な

歡喜天息をつくろう偽夫婦

◇ 本社 8 月 旬 会 予 告 ◇

大矢十郎還曆記念句集

「みかん船」出版記念句会

日時 昭和59年8月7日(火)午後6時開場

場所 なにわ会館

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12

地下鉄谷町9丁目近鉄上本町下車東南

電話 06(772)1441

はなし

西尾 栄

兼題

「富」 川上 大輪選

「喜」 岩本雀踊子選

「豊」 野村太茂津選

「栄」 橘高 薫風選

特別課題 「みかん」

大矢十郎謝選

席題 当日一題

黒川 紫香選

各題3句・締切午後7時

会費 千五百円

(記念品・句集「みかん船」呈)

川柳塔社

川柳の群像

麻生路郎

東野大八

釈迦は菩提樹の下に三年坐して悟りを開いたが、その悟りとは「因縁」ということであつた。因縁とは即ち「業」をいう。人間業の深き」というその業である。麻生路郎と川柳—これこそ最も深き因縁・業を意味した。

俳人西東三鬼はその「俳愚伝」に言う。

「俳句このへんでこなもの。短小で不自由で難しくてその魅力絶大なもの。こういうものにとり憑かれたのは、全く私の不運というほかはない。(略)全く家庭も顧りみず、妻子を放置し、貧乏させて悔いなかった。俳句が私を駆りたてて止まなかったからだ」

三鬼はれっきとした歯科医師なる職を捨て貧窮の底にある家族を残して蒸発し、俳誌の編集に熱中し、死病にとりつかれた俳句の果

てに反戦句により七十日も留置され、戦後はいきずりの女と同棲し62歳で死んだ。

路郎もこの三鬼とどこか似ている。通信省外電技師、A級病院事務長など幾度か立派な職に恵まれながら、その悉くを放棄し妻子を貧窮にさらし、その家族から川柳と手を切ることを誓わせられながら、川柳を捨てるところではなかった。その上、壮年期には悪性のチフスに罹り一家心中の噂さえたてられた。

「十七歳頃から川柳をはじめ、六十一年間も川柳に魅いられた生活をした(北川春巢市辞)昭和四十年七月七日がその七十七年の生涯の忌日であつた。

人間路郎の性格は、頑固で剛直で、それ故になやすく肚をたてるくせに寂しがりやであつた。この子供のよくな屈折の多いこの連れ合いを殉教者の如くいたわり抱擁したのは葎乃夫人である。

人間失意の時が一番人生の真実に近づけるのだと常々路郎は言っている。それは彼の生涯不遇の生活環境がいわせたものだが、

—古くとも僕には仁義礼智信 路郎
という終戦直後にもされたこの句に路郎の凡聖一如の処世観がよく示されている。このため三鬼の如く妻子を捨て蒸発もせず、特高につけ回されることもなかったのである。路郎夫婦ほど身辺雑記をものする作家はいないといわれているが、その貧窮の生活環境がいれば路郎夫婦の場合は、一種の価値観を帯びていたとも判断できる。

麻生路郎は本名幸二郎。明治21年7月10日尾道に生れたが、誕生と同時に母を失い里子に出された。陶器商を継いだ父善七が大阪市転住にともない十歳の折上阪し、一家は船場に住む。父親は会社員となり、路郎はやがて現商大の前身、大阪高商の子科に進む。この学生生活のなかで読売新聞柳壇に行き遣い運命的な川柳人生に入る。

路郎には別に川柳の師はない。強いていえば小島六厘坊に兄事し、藤村青明、松村柳珍堂に啓発された他、同志の柳友、川上日車、

木村半文銭との交友に負うところが大きい。

この川柳の同志的人々とともに「葉柳」「土団子」「雪」「楊柳」「番傘」と歩き、川柳を新短歌と改称する試行錯誤（柳誌「雪」）もあつたが、結局伝統川柳を近代詩に見出す新文芸川柳の本道を歩み、大正十三年「川柳雑誌」を創刊する。この間「専門家のなき世界は発展せず」と昭和十一年七月川柳人初の「川柳職業人」宣言を行った。

三太郎、水府、周魚、雀郎、紋太の五大家も帰するところ、その生涯をいわば職業川柳人の生涯を送ったわけだが、路郎独り敢えてそのプロ川柳人宣言を行ったところに、路郎らしい潔癖さと川柳一筋への情熱の燃焼ぶりがうかがえる。

路郎は職業人宣言を断行する実践的な信念の現れとして、川雑発刊以前は川柳の日刊新聞経営を企図したり、戦後は川柳の社会化運動をスローガンに掲げて衆院選に出馬するという破天荒な川柳闘争を行い柳界の眼をそばだたしめたものである。

路郎を知る人々の中には、彼の持つ宗匠氣質を指摘する人もいる。彼が五〇歳の折開いた趣味道場松坂俱樂部の指導姿勢をあげてのことである。然し一方ではこれこそプロの川柳人の行き方だと肯定する人もいた。

「いのちある句を創れーこれは私が大正十三年に川柳の社会化運動と初心者への指導と川柳研究の目標に、川柳雑誌を刊行して以来、今日まで呼び続けてきた言葉であつた」（句集「私達」序文）

この路郎の川柳スローガンは、これ以前「芸術衝動なくしては芸術品なし」と主張してきた言葉が、生硬で大衆化向けの川柳のPR用語としては不適当とみて、苦心した末に編み出した言葉である。還暦の際の句に

一六一 まだ情熱は燃えに燃え 路郎

この頃、路郎は「われ川柳の子規たらん」という自負に燃えるまま、伊子松山の子規を生んだ俳都で「われ柳壇の子規たらん」という演題を掲げようとして葭乃夫人の懸命の阻止にあつてやむなく断念するという一幕もあつた。

「こんな元気がその後も全国から朝鮮蒙疆満州北支まで押しかけさせたのであるが、雪の満州は防寒具もつけず、内地の姿そのままで出かけたことを思うと、全く熱の塊りだつた」（川柳雑誌・路郎古稀特集号）

こんな話もある。堺に建てる食満南北句碑の作品選定委員として出席した際、

「路郎氏が熱心に推薦したのは一悪人が栄えたままで初日果て 南北」の一句であつた。

作品としては面白かつたが、「悪人」という文字を碑面に刻むことは抵抗があつた。結局多数決によつて否定されたが、作品としてはこれがよいのではないかと、路郎氏はその主張を断じて曲げなかつた。彼の叛骨精神の厳しさを思い知らされた（堀口堯人）

麻生路郎の川柳上の足跡は、まさに巨匠の名にふさわしいものがあるが、「句集旅人」「新川柳講座」「川柳漫談」など著書多数で、これらの路郎作品および詳細な年譜や印象に残るエッセイなどをまとめたものに橘高薫風編「川柳全集②麻生路郎（構造社刊）」の好著があるので参照を乞ふ。

路郎晩年の句に

一子よ妻よばらばらになれば浄土なり 路郎

は葭乃夫人が最も推奨の路郎作品だが、その臨終に近い鬼気迫る最後の句の辞世は

一雲の峰という手もありさらばさらばです

路郎の一句でこれを掲げた「川柳雑誌」は、「麻生路郎主宰」の文字とともに長いその四六〇号の歴史を閉じたのであつた。門下によりその後を継いだ本誌は、今還暦の通巻を迎えている。

★次回は「麻生葭乃」

誹風柳多留廿六篇研究 (十六丁)

大屋六郎・八木敬一・鈴木 黄
 石田晋一・南 得二・小野真孝
 本田正範・石田成佳・多田 光

故岡田 甫

264 去りにくひわけは桜の名歌也

大屋「桜の名歌」は、平忠度の歌、「さざなみや志賀の都はあれにしを昔ながらの山桜かな」(千載集)をさす。

平家一門が都落ちのとき、一旦都を落ちた平忠度がまた都へ戻って来たのは、日頃詠みおかれた歌、ことに「さざなみや」の山桜の歌を一首なりとも後に残したいと願ったからである。

世が静まって千載集を撰進のとき、俊成はありし日の忠度のありさまを思い、詠み置かれた歌の中から「さざなみや」の一首だけを「よみ人不知」として入集した。

うでのある内に桜の哥を書き 二四・38

山桜よみ人しらぬ者ハなし 二八・18

多田「贊、別解をというわけで「去りにくい」を「離縁」ととつて調べてみたが、ないようである。

岡田「礎稿、贊。

265 畳のうへの摘草ハ落茗荷

大屋「畳のうへの摘草」は琴を弾くことをいったもの。落・茗荷は琴歌の落の組歌をいう。

句解としては、畳の上で摘草でもするよくな格好で、筑紫琴の落の組歌を弾くことだ。

多田「礎贊。ただ私としては、琴を弾く様子

が摘草に似ているとまでは考えず、「落茗荷」↓摘草と単純にとつていた。

岡田「同。

266 けつかうな御天氣に嬢礼に出る

大屋「嫁の年礼の句。正月、男の廻礼は三日間、遅くとも松の内におこなうが、女の場合は松過ぎがふつうで、二月・三月ひどい場合は花の頃、またはホトトギスが鳴くころまで延びることもあった。

松よりも桜に近き嬢の礼 二七・32

かれ是と夏を隣に嬢の礼 五一・32

初かつほ山ほととぎす嬢の礼 拾一・16

のように、春か初夏の天候の良い時分になつ

て、年礼に来る場合が考えられる。

八木 遅い年礼。

けここふな春と暮春に娠ハのへ

二七・二

多田 贊。

岡田 同。

267 新シ蔵を丸綿で出る娠の雛

大屋 雛祭りが近づいたので、嫁が結婚のときを持って来た雛を新しい箱から出すと、雛は綿で顔が包まれている。「新シ蔵」は新しい蔵のことで、この場合は雛をしまっておく箱のことであらう。

八木 新シ蔵がはつきりしない。娠は川柳では「新婚」であるから、新しい入れ物から、（破損防止のための）綿をかぶせた雛を取り出すというだけの句のように思う。

本多 八木氏説のように解しています。雛の破損防止に丸綿をかぶせて保管していたことは、

はつかしくない丸綿を夏ハ取り

三六・一

の句によってもわかる。

多田 同。

岡田 新蔵はシングラ。新築した家に造

られた蔵。普通は紙に包んで箱に納めるのだが、運搬で痛まぬよう綿で包んである。

268 御居間迄出る植木屋の歳暮也

大屋 植木屋が、ふだん出入りのお屋敷へ、年末の挨拶に行く、ご挨拶のしるしにと、鉢物を持参する、といった句か。どうもはつきりしない。

南 本句は、出入の植木屋が此の床の間に飾る盆栽を歳暮として御座敷まで持って来るという句ではないかと考えます。

床の間の富士の裾野に福寿草 四六・30
植木屋の持参した歳暮は福寿草と思います。

多田 贊。

岡田 南氏の言われたように、福寿草です。植木屋も出入りのお邸にお歳暮として贈るのが習慣でした。

259 山桜しはられるのハ手から也

大屋 全くわからない句。

八木 見事な桜の木には細引を結び付けて幕を張る。花見の句であらう。

鈴木 単なる花見の句であらう。花見のマンマクのひもを枝ぶりの良い美しい山桜の幹に結んで、そこで花見の宴ということになる。

山桜にとつては、ひもでしばられることは、やはり手柄であらう。

石田成 吉原仲の町の桜。移植のため枝を縛られ運びこまれてきたものか。花が散り葉桜になるとお役目終了で引抜かれ縛られて片付けられてしまう。

多田 八木・鈴木説贊。

岡田 「山桜」ですから花見の場合ではない。

石田成説のように吉原仲の町へ運ばれた山桜です。枝の折れぬよう、また根もしばって運ぶ。

270 若草を白魚の喰ふうらゝかさ

大屋 摘草の句である。江戸の町はいまちがって、すこし歩けば摘草ができるような場所がたくさんあった

春の一日、若い少女たちが郊外に出て若草を摘む。白いのびやかな、白魚のような指でみずみずしい草花をつむ上に、うらうらと春の光がいっぱいに満ちている。

一寸の草にも五分の春の色 拾一・12
つみ草もざるもつたハ近所なり

多田 贊。

岡田 同。

一一・一

『折句式大成』について <2>

阿 達 義 雄

(二) 『折句式大成』と江戸・上方の前句附

『俳諧折句式大成』は、宝暦三年に呉綾散人(至席)の序を附して大阪で刊行された折句集であり、この書の内容について触れたものは、恐らく鈴木勝忠氏の次の文言が最初であろう。

「句風はすべて川柳点の調子をもち、折句という一句立様式と共に『柳樽』というより江戸雑俳界との関係を考えさせられる。いわば、いわゆる『川柳』だけでなく、同様の行き方を大阪雑俳も辿っていたことを示すといえる。」

(『未刊雑俳資料』中の『折句式大成』についての「附言」)

右の附言は簡潔であるが実に示唆に富むものである。先ず、本書の呉綾散人の序を見ると、「此度はいかいかい折句、書肆九華抱玉の二子、なにはの判者達に、よしあしの評を乞ひ、秀逸高判抜群凡千余吟を椽に彫り、予に端書を乞ふ云々」とあり、多くの折句について浪華の判者達の評を乞うて、大阪の大和屋利兵衛・田原

屋平兵衛が秀逸高判抜群の句を取めて、上梓したものであることが知られる。

この内容を見ると、多くの句を頭音によって伊呂波順に分類配列したもので、例えば①の部を見ると、

イキキ 去ナセたい客と留たい客ハ連

イサホ 一丈も去ッて師匠に惚て居る

という様な句を二一句並べており、②の部を見ると、

ハコミ 母の呼声にも恐キ身の覚へ

ハクハ 鍼もいや薬もいやとはんじもの

ハタキ 恥しめる度に娘の肝太り

右の様な句が矢張り二一句並べられている。

すなわち、本書は、今迄の一般折句集とは編集手続が異なり、収載する迄には少し手数をかけているので句の作者は勿論のこと、これぞという評者の名も記されていない。

伊呂波順に句が分類されてあるので、即吟でもない限り、折句の作者にも若干参考になったであろうが、所謂高判秀逸の句が多い処を見ると、折句に限らず、長句又は短句の一句立の範例集とも見られる。

というのは、上方の前句附には長句題も短句題も盛んに出されていたゆえに、それ等に対するハメ句や改作句の種本としても利用価値が充分あったと考えられるからであり、書肆の狙いも其の辺にあつたであろう。

本書は折句集に似ず、秀逸高判抜群などという文句が序に謳われているだけあつて、この書の出された宝暦三年頃の前句附集、会所本などにも、一巻の書にして、これだけの佳句を収めている句集は殆んどなかつたと言つてよからう。今、この中から少し例句を示してみると、(句の上部の片仮名は折句題であるから、この三字又は二字を「五・七・五」又は「七・七」の語頭に詠み込ませるのである)

カミヲ 孝行て皆顯ハれし親の恥チ
カムテ 合点した娘に母ハ手を合せ
カクナ 掛乙かくれハ和讃を長ウ引
ヨラク 世ハ夢とおしへ住持の蔵ふしん
タ ツ たれがいふたとツイ落にけり
ソイイ そんな事いふてかいなと糸通す
ナタカ 泣た眼の互に光ル記念分ケ
ムヒコ むつまじさ昼物いふた事が無ヒ
ヤ コ 病て夫の心見あげる
ケハフ 傾城の腹の立ッ日ハ不養生
ユモキ 遺言にもれし妹は器量よし
ミケト 道の記の消した所を問フ女房
シライ 心なか追剝に逢ヒ生延る
モニフ 木綿物似合ハぬ程の不仕合

セナカ 千人の中へくハ、るかすり疵

本書の句と他の折句集の句を比較してみても感じられることは、この『折句式大成』の中の句には、実際には折句として詠まれたものでなかつた句が多く交つていたのでないかということである。

というのは、これらには折句題の文字に制約されて作られた句にしては、余りにも巧妙であり、自然的な詠み振りの句が多いからである。又、中には、

落城の堀に張形浮て有

石塔の赤い信女がまた孕み

などの様に、少し古川柳に親しんだ者ならば誰しも思い当るような句がいくつも発見されるからである。

これは、普通の前句附の中から、附句だけで意味のよく通る佳句を選んで、先ず語頭の音によつて伊呂波別に分類配列し、更に五・七・五なり、七・七・七なりの語頭の文字を抜き出して、これ等を恰も折句題の文字の様に偽装して掲げたものだと考えられる。

もし、この推定が確証によつて断定されるならば、この編者は、『柳多留』を編集した呉陵軒可有に先立つて、前句附の附句の中から一句立となり得る句を選んで、人々の鑑賞に値する独立句の集(名は折句集にしても)を世に出していたことになり、江戸における明和二年の『柳多留』の出現の必然的であつたこと——前句附の前句脱落の史的必然の結果であつたことが認められることであろう。

(つづく)

水煙抄

黒川紫香選

藤井寺市 赤木和子

一本のテープ切る時ありがと
キスはこうするとテレビに教えられ
行くあてのないのも混じる御堂筋
厨房を他人に任せて主婦作家
泣き虫のツボを覚えてまた泣かず

尼崎市 田中晴子

窓開けば父の絵がある一周忌
旅先の花屋で誕生日を祝う
この矢には釣書なども付けてくる
おなじみの顔ぶれそこだけ花が咲く
先頭を歩いているのは嬬天下

西宮市 紀市郁栄

喝采の渦に無表情でいる
知っているくせになんにも言わぬ妻
二人きりの部屋でからだを堅くする
弱い者ばかりに督促状がくる

アルバムの若さがとても憎らしい

和歌山市 中尾まゆみ

出来たてのプリンゆらゆら何思う
野仏のほほえみと逢う回り道
休日の受話器を一人じめにする
逢えるあえない花占いが遠くなる
父よごめんねいま川柳はやめられぬ

名古屋市 藤井高子

風甘じ螢の尾頭軽やかに
無防備にポツンと姑の椅子がある
甘い球投げて男は一步寄る
終列車風もそろそろ眠るとか
惰眠して自動扉のぬるい風

尼崎市 春城 武庫坊

腹がたつたんびに皺をのばしてる
背中にはさそって欲しいと書いてある
風呂敷で包んだ過去をそっと置く

信号の青を野良犬知っている
バッグから大きな謎がころげ落ち

八尾市 高杉千歩

病院にいて三食を差し向い
看取りの記雅号でうまる四十日
よく笑う女に消せぬ泣き黒子
その朝も普段着でした母を恋う
一途なる画布の山は夕焼ける

熊本市 永田俊子

珈琲の匙が時間をもてあまし
鳩時計とぼけた音で座をほぐし
脱税の医院の庭の埴輪の目
やりこめて何かむなし風の中
適材適所歯車のネジとなる

尼崎市 丹下玉子

挫折した父の太鼓はもう鳴らぬ
赤い櫛思い出ばかり花言葉
自画像を飾る勲章一つなく
色褪せた壺に造花の失語症
水かけ地藏恋の願いに濡れ給う

寝屋川市 平松かすみ

ネクタイと時計が欠伸して無職
年金で少し小粒の苺買う
すきやきのお好きな方と汗をかく
独りなら裸になり度い二上山

いい湯だなだあれも居ないので伸ばす

京都市 松川芳子

仲人の夫婦他人の顔で居る
混浴へ女気兼ねのない会話
灰皿が綺麗煙草の主が病み
言いわけがだんだん嘘に近くなり
母の日はカーネーションも化粧する

高槻市 竹内花代子

淋しきはエンゲージリング抜けた指
セツトして女出かける顔にする
斬出ぬ寝息へ耳を近づける
割れるまで夢を見ているシャボン玉
裸婦の絵が風邪ひきそう窓を閉め

岐阜市 市川鱈魚

セールの布石地道に歩を囲み
さらし首だけはふる里見せられぬ
一日が永いポケットベルしずか
二つ返事が敗北妻の目が笑い
きつと鬼は手の鳴る方と決めて来ぬ

富山市 舟渡杏花

音立てぬ不満がつのってくる怖さ
来世を手さぐる写経の墨をする
固い目の帯その気になればすぐ解ける
千鳥足落ちた仮面と振り向かず
ラストダンスへ思いもよらぬラブコール

東子市 小山 悠 泉

泣き羅漢を笑い羅漢にした出世
進軍ラッパ鳴って曠野の夢がさめ

亡母からの合図はいつも風の中
こつてりと父の言葉が胃に溜る
魂を埋めた男に山の位置

清貧に慣れ素うどんがいつち好き

尼崎市 福田 礼子

背中にも目がありそんな母の勸

女が一人急に味方が増えてくる

勉強嫌いにせぬ先生のユーモア

よく笑う女で軽い嘘が好き
振り向けばうなずく人がそこにいる

熊本県 大川 幸子

ジーパンで茜だすきも風化する

あたたかい音をたててる台所

声のない台詞で通じ合っている

鳥取県 中原 汲香

置物でなかった妻に引きかかれ

鬼になる役を買ってる母で良し

久し振りなのに距離を意識する

広場へ出よういい友達が待っている

子沢山規格はずれの子も育つ

初老らし渋い好みの女に逢う

近江八幡市 前川 千賀子

パパの子も蛙に和している軒

髪染めて踊る仲間と輪をつくる

熊ん蜂心醜き人は刺せ

鳥取県 中原 みさ子

湖を抱いた姿で山昏れる

たんぼぼで風とほんわか旅に出る

美術館少し無粋な眼も混じる

カモメの嘘へ港の女泣かされる

悪女だと言われるもよし赤ワイン

こつてりと甘い二人に月も妬け
窓ごしに風の噂が絡みつく

滋賀県 安田 志津

和歌山市 後藤 正子

母の日も母が一番いそがしい

サルビアの朱に想い出出る夏

日銭追う小商いにも夢があり

打診する風にやさしく試される

散らかしておける自分の部屋がほし

励ましてくれるぶつきらぼうな声

旗色を曖昧にして隅に居る

ファイナーレの涙はこころの雫です

倉吉市 淡路 ゆり子

(前月分) 和歌山市 中尾 まゆみ

哀しさはひとつの嘘に引きずられ

十六歳のやすらぎ着い海が好き

クラス替え岸をはなれてゆく小舟
掛けがえのない父だから母だから
衣替え髪型すこしかえて見る

宝塚市 丸山 よし津

白を着て若さは夏を先取りす
玄関に鍵かけ裏は開いている
主婦の面はずして座る繩のれん
タレントの飼ひ馴らされた受け応え

豊中市 満仲 きく子

良い便りもってきたかい初つばめ
しゃぼん玉飛んで少女は見当らず
鏡見た蝶の根強い自尊心
葱坊主生きる喜び知っている

和歌山市 福井 桂香

ほんとうは悪女だまって保険かけ
風鈴の小箱よはやく目をさませ
バラ色の口紅持っている自信
妻という安全地帯であきたらず

唐津市 浜木 ちよ

ちよっとした挨拶隣と近くなり
新仏花も供物もふんだんに
これ猫よお前の足拭きマットだよ
髪梳けば何処に行くのと子に言われ

尼崎市 吉永 伊三郎

野仏の円マダな前に立ちつくす

塵一つ廊下に落ちて謀叛洩れ
禅寺で匂う若さと隣り会う
ピノキオに学んだ孫の低い鼻

尼崎市 児玉 歌子

忠犬である筈がない座りだこ
春立つ日床屋めっぽう混んでくる
窓口を広げて嫁に行きたがり
風呂敷をひらくと刑が軽くなる

熊本市 高野 宵草

土がある水分がある雑草が居る
帰省子を帰したとたんくたびれる
哀しげな顔でこけしが転がっている
仮縫いへ今度の旅が待ち遠い

羽曳野市 天崎 只士

折り鶴に孫の笑顔を折りたたむ
少年の目が美しい古い町
デジタルの時計情けを気付かない
検討をしますと脈のない答え

竹原市 岩本 笑子

過疎の果て水車コトリともしない
むらさきのスマレよ恋を知りました
家庭訪問子等それぞれにおとなしい
六歳の知恵へおろおろする母で

西宮市 松本 一郎

はいはいと言ってる妻に操られ

きつかけを掴めぬままに逃げた恋
即興のおとぎ話を孫にする
病む友へ桜の一枝置いて来る

今治市 月原 つくし

風当りまともに受ける日の孤独

逆わず生きてて亀に知恵貰う

矢面に立つと男が生き還る

結び目のゆとりが欲しい倦怠期

八尾市 宮崎 シマ子

上品な言葉で大根値切りはる

病む父の浴衣の糊を加減して

朝顔の種まく土も買う都会

欲深く貯めたに子等の消費癖

寝屋川市 岸野 あやめ

尋ね人戻れば許すとは言うが

手鏡へひとには言えぬことも言い

試着室鏡と相談まともらず

毎日が気楽でだんだん馬鹿になる

高槻市 笠嶋 恵美子

若者がどやどや電車熱くなる

髪染めて明日の虹を追いかける

アドバイス通り結べぬ靴の紐

何事も無かったように朝の月

和歌山市 山川 克子

納得の行くまで続く修羅の旅

贅沢な汗を出したいジャズダンス
こつこつと道を開いた手内職
マスコミの煽てに自己を見失う

吹田市 井上 照子

涙など素知らぬふりの熱帯魚

球根の小さな裏切り花の色

何時か来た荒野が高級住宅地

あまりにもよく鳴く犬で狭く生き

大阪市 野田 君枝

へソクリが桜と共に咲いて散り

母の日の花屋可愛い客がくる

天気図とにらめっこするにぎりめし

浮かぬ顔して不参加の国ならぶ

桜井市 前川 美恵子

パンパンとプール開きの華やかさ

九官鳥いい声ばかりしていない

ゲートボール笑い声にはっとする

内緒だと言えばよけいに子は喋る

八尾市 古川 覚然坊

老の手帳子等の住所書いて旅

先生も仲間となつて張るキャンブ

入学日兄貴振って妹連れ

秃鷲とだけ先生の名を忘れ

熊本市 宇野 昭代

泣きに来て母の白髪に言い出せず

口げんかならば末っ子負けて居ず
風止んで森は何時ものたはずまい
帰省子に慣れぬ洋食作らされ

大和高田市 岸 本 豊平次

借りた傘荷物になった通り雨
別室でひっくり返す策練られ
鯉のほりみどりの風に素直なり
落ち椿まだ紅の色もえている

尼崎市 山 田 保 蔵

鍋料理ゆげの向うに孫の顔
結論を出されて困る人もある

コップにつぐ音が何とも言えぬ音
球根に花の色まで書いてある

米子市 茂 理 高 代

水車小屋音のあたりに夏が来る
かたくなな指で貧しい運をひく
はけ口を求めて浪費して歩き
子育ての終った後のすきま風

吹田市 茂 見 よ志子

飲まぬのに酒税上ると御用聞き
クリスタル食器が初夏の出番待つ
浴衣会白黒写真に見る若さ
一年中苺があつて季が薄れ

兵庫県 脇 田 米 朝

客が来て夫唱婦隨に切り替える

肩の荷を下すと腰が曲りかけ
豊かさが溢れ出ているゴミ袋
見えすいた世辞がこそばい脇の下

吹田市 栗 谷 春 子

連休の最後は晴れた競馬場
おしゃべりに聞こえぬ耳が相手する
うしろから掴まれそうな黒い雲
深呼吸させて上げたい時計にも

島根県 森 山 英 子

七十の手習い鉛筆ばかり舐め
すねかじり地球一周など思い
手も足も出ない焦りに夢が覚め
足音を待ちて厨の灯をともし

和歌山市 神 平 狂 虎

体当りそんな策より浮かばない
スポンジの包容力に騙される
ハンカチの中の涙にある理由
夢が欲しくて心の窓を開けて待つ

今治市 野 村 京 子

ピエロの鼻は涙をかくす赤で塗り
女の午後は爪をまあるく切って待つ
子のために流す涙はたんとある
かごめかごめ籠を抜け出す術がなく

竹原市 佐 藤 令 子

電線のカラスも見えていた赤信号

ある予感電話の前を離れない
ときめきに気付いて欲しいイヤリング
気後れは義理を欠いてた共稼ぎ

大阪市 古川 美津枝

薫風に悪女可愛い策をねり
魂胆は見抜かれてる向い風
くり返しくり返し見る旅句集
ポストへも午前三時の五月風

枚方市 二宮 山久

受付に美人がいてると武器になる
忠告へ静かな闘志もやしとく
流行に乗れぬ男でよくしゃべる
確かなる一日始まる台所

大阪市 堀口 欣一

独身の社長漢法薬をのみ
大正琴がきかせてくれる枯すすき
春光をあまねく浴びて墓眠る
鬼の攪乱などと社長入院す

出雲市 落合 正江

石投げて心の隅を打診する
母の日に嬉しい嫁のブレゼント
やさしさに触れた日風も凧いでいる
エリート粗忽隣と近くなる

西宮市 草刈 墮駄

中流の家から流れる悲愴の曲

鏡みてそれから慢画好きになる
インテリアお伽の家に灯をともす
一円の金の価値知る古日誌

大阪市 布施 サチコ

断りの前座つとめる美辞麗句
蛇行して常識論へたどり着き
聖火台めいて団地の焼却炉
屈辱がとり残された舞台裏

高石市 浅野 房子

老いらくの手許狂わす花鉢
返事待つ明日は晴れるか虹の橋
松風にふくささばきが目にしみる

芦屋市 上田 佳秋

芦屋ですと言うのが辛いわが暮らし
白旗を味方に出した日の孤独
これきりの訣れに女謎残し

米子市 光井 玲子

みの虫が雨に降られて口つくむ
ヒロインの地位ささえてるトーシューズ
底辺を這って夫婦の灯を信じ

京都府 木本 如洲

遅刻した膝を盃攻めてくる
檜山の切符をもたぬ旅に出る
子袋がおんなの形で落ちている

寝屋川市 立床 晴風

神無月鳥居に休業貼って無い
カマキリを備蓄へ運ぶ蟻の列
月給の尻叩いてる物価高

島根県 高尾 よし子

古傷にそつと触れゆく春の風
ジーパンを干して少女に夏近し
それぞれのリズムで楽しい小鳥たち

弘前市 田中 叶

死ぬ時も並のコースの癌で逝き
倦怠期どちらともなく寝てしまい
窓ガラス少女の何か欠けた顔

鳴門市 八木 芳水

コンパクト持たぬ女で温かい
青春の思いで出来た途中下車
家計簿のゼロが私の最努力

尼崎市 大江 かね子

バラ活けて花好きだった子を偲ぶ
母さんが座ればそこらあったかい
ヨチヨチができてやんちゃがひどくなる

尼崎市 野瀬 昌子

泊つてと孫は嬉しい事を言い
旦那には地酒を買って古都めぐり
引き潮の砂一っときの空を見る

鳥取県 羽津川 公乃

ドラマから流れる方言誇張され

栄転の別れハンカチ軽く振り
冒険の見合結婚まだ続く

和歌山県 寺田 裕美

反省で埋まる母の日の日記
お祝いに行く誉め言葉を温める
膝の猫嘘のつづきをきいている

西宮市 山片 紀雄

木芽和え小鉢の中に初夏が萌え
長生きをしてよかった匂香る
無頓着八方破れにある魅力

岡山市 広田 小菊

こいさんと呼ばれた過去の車イス
天王寺祖父母の遺影安らかに
すきやからと言えばあのこのほほあかく

山口県 高崎 雀声

子育てがすんでコートでボール追い
お茶汲みもします入社をするまでは
公園に人誘い出す春の風

愛媛県 八塚 三五島

美しいと思った時から負けている
損をしたままで人生終りそう
遺伝子を組み変えている種を播き

京都市 森川 春子

陽のあたるふみ石とかけ動かない
後悔が残り深夜にする電話

春の宵男やもめののろけ聞く

高槻市 芦田静江

許し合う確かな愛で坂越える
賞でられて満足感に花終る

翔びすぎて春に酔つてた請求書

大阪市 稲本凡子

夢にみる亡夫はちつとも年とらず
服装も気性も男の様な女

百まで生きるつもりの家を建て

尼崎市 鈴木良征

出世した奴だけもてる同窓会
恋芽ばえ化粧一際手間をかけ

雑巾が縫えぬ女はタオル出す

岡山県 山本玉恵

みの虫がすこやし居場所を変えて夏
孫の靴ならんで居るのがうれしゅうて
女ひとりになってけわしい道を知る

大阪市 松本ただし

奔放に生きて浜辺のもろい砂

もつれても慈母観音でおわす妻

月に手を振れば月も酔っている

守口市 結城君子

こんな字を引いたら辞書に笑われる
サラ金の貸してた方も逃げました

百万長者と言つた昔の暮し良さ

雑音も入る補聴器には困り

一杯の酒に夫婦と云う対話

単身赴任カレライスを卒業し

新潟県 高野不二

午下りリズムの合わぬ親子です

軒しのぶ今年も可憐に涼を呼ぶ

バラソルを買い替えてみる期待感

富田林市 植松慶子

百人一首姉と競つた札一つ

生真面目が心配させる適齢期

気に入らぬと黙つてる夫が気に入らぬ

守口市 森川まさお

新幹線乗る分だけの雑誌買う

ケーブルの乗り場いっぱい花が咲き

知らぬ町ソフトクリーム舐めながら

大阪市 上田柳影

別居してから母の日を忘れない

母の部屋と謝野晶子が生きている

老い二人ゴキブリまでが無視してる

尼崎市 佐藤美代子

姑の口あちら好みでケーキ買う

お墨付が辞令あるまで神だのみ

真夜中にコップ一つが起きている

大阪市 今西静子

いつもなら寝ている頃を先着順
長の字がついて苦勞が増えてくる
散る花に身の終焉を考える

大阪市 町田達子

花の宴花から見ればゴミの宴
ぬけぬけと言っても嫌味の無い若さ
郵便受け何度も覗く孫の青春

米子市 本吉宗光

青白い鬼が問答挑む夜
路地裏に紙くずだけを風は押す
俺だけが耳鳴りしてるのではない

姫路市 人見翠記

花吹雪浴びて二人は手をつなぎ
木蓮の香に夕暮の外出かな
今年の寒さに梅桃桜一せいに

西宮市 飯森泰世

連休がすぎれば財布軽くなる
老夫婦雨の花見に静をみた
新茶つむどこかで雪が降っている

高知市 北川竹萌

製茶機の向うで片手振る別れ
之でなきやならぬ序列をつけてみる
八ッ橋をいただく孫の旅帰り

島根県 喜島ノブ

師を恋えば便りの返る嬉しい日

雨の中可憐に咲いたかすみ草
孫の手を握ればいとしい血がぬくい

島根県 北川民子

振り返る暇もくれずに日が過ぎる
騙されてだまされて女貝になり
定年のこれから歩幅ととのえる

岡山県 後安ふさえ

吸い殻をふやして長い待ちぼうけ
舞台裏敵同士でお茶を飲み
瀬戸の海時の流れに逆らわず

弘前市 眞喜内 實

やりなおし出来なきや別の花咲かそ
のどかさを野良からもらう日がつづく
おかえりと心で呼べばかえる夫

青森県 波 ただお

正座して練習用の短冊へ
鯉のぼり窓から子らのはしやく声
メダカにも海まで泳ぐ夢がある

泉南市 坂根流水

日本も変りましたと渡り鳥
面妖なグリコ事件のうらおもて
そのむかし瑞穂の国があったとき

西宮市 朝山千世子

牧人忌柳魂という瞳の輝り
若葉風うれしい便り乗せてくる

他所のペット横文字の名ですぐ忘れ

箕面市 坪田紅葉

妹とつきぬ話でおそくなる

塾よりも落語を聞きに行かそうか
愛の字が上手に書けぬ日記帳
島根県 岩田三和

取り込んだ洗たく物に花びらが
つむ人もないつくしんぼむらがつて

大阪市 平井露芳

アマゾンも知らず飼われる熱帯魚

少年が持つと鳴りだすバイオリン
俯いても聞える海の音
みんなは元気かとさく淋しい声
豊中市 小林一夫

馬の脚も居らねば芝居の幕開かず
咲く時と散る時花は何か言ひ

西宮市 秋元てる

檜苗寄進の碑のみ大きかり(秩父三峰神社)

べそかいた足音必死についてくる
ドアきしみ風が居留守を攻めにくる
春雷が約束の場所変えに来る
和歌山市 森敏子

しるべ岩有馬へ続く古道行く
朝詣り犬の散歩のついでらし

大阪市 日阪秋子

死角から流す噂に背を向ける

味見するつもりがみんな平げる
不気嫌な日は料理まで味が落ち
返事だけハイハイハイといひ夫
守口市 中原好恵

蛙飛び貴女はいつも前にいる

おめでたい女が嘗める手前味噌

温室で春を忘れた冬の蝶
針金が植木の自由奪い取る
貧しさに耐え底辺の手をつなぎ
米子市 堀江純子

浮動票政治は動く方がいい

風の子と火の子と風呂で仲がよい

少しずつかじって太るとぶ鼠

広島市 望月晴彦

嘘多く釘抜き自動にしたエンマ

世界から見れば減反バカみたい

気に合わぬ世でもやっこ生きている

八戸市 島田昭治

琴の爪女の意地を知っている
線と点からんで回る糸車
相談はいつでもおいで母達者
岡山県 矢野山人

岡山県 松本元江

身籠らぬ花にも蝶が来て止まる
お隣の花の嫉心に見つめられ
黒揚羽あしたはいずこの花に合う

岡山県 千原 理 恵

春うらら雀口笛吹くように

足音でわかるペットに迎えられ

ささやかな友情互いに肩を貸し

大阪市 板 東 倫 子

気くばりも出来ぬ女の愚痴を聞く

孫の眼に映る姿を意識する

年金で暮す安緒と空しさと

愛媛県 石 手 武

智将かも知れぬが欠ける人間味

Tシャツの乳房が揺れる夏来たる

鳶職の地下足袋怖い場所を行く

熊本市 北 川 一 進

本番の済んだ出前を良く食べる

骨のある奴が兄貴になる掟

レントゲン胸の古傷見逃さず

大阪市 山 本 炉 斉

春うらら大川に散る花模様

老佗し返事の来ない日は淋し

取りえのない妻だが味は日本一

大阪市 野 村 八 重

山路の佃煮うれし亡母の味

一物を胸にもってる笑い顔
気乗りせぬ手紙の主にペン持てず

羽曳野市 田 中 隆 二

咳ばらい一つで会議引締まる

春風の誘いに乗って来たおんな

ポロポロになるまで読んだ好きな本

岡山県 戸 田 種 子

マイホーム母はこつこつ日銭積む

ワンマンな父ワンマンな子に育て

春闘も限界にきて妥協する

鳥取県 福 田 あや子

春の海若布の桶も眠たそう

春闘で片付けられぬ小商い

蕨狩り縄文土器の私語を聞く

指宿市 渡 辺 伊津志

挺子の理と少うし違う箸使い

妻の茶は咽喉の加減を知っており

天才の一人は菜っ葉服脱がず

鳥取県 新 家 まさる

カラカラと対岸の火事笑う夜叉

皿割った女を叱る店を出る

ゴール前もう散っている外れ券

唐津市 筒 井 朴 竜

比の春へ進学子等の夢弾む

勉学の子へ負けぬ気で母パート

パワ－ウ－マン保育進學塾任せ

岡山県 二宗 吟平

自転車を迎えてくれた山桜

煙突の欠伸不況と言ううわさ

夜桜のために警官かり出され

豊中市 辻川 慶子

開店日友がトップの客となる

心配をよそに迷い子よく眠り

倉敷市 赤沢 沢の藤

尺八を持てば聞える亡妻の琴

火の車忘れ外車で風を切る

羽曳野市 吉川 壽美

ばあちゃんと呼ばれてからの身嗜み

哀しみて曲ってしまう棺の釘

大阪市 塩田 新一郎

何一つゆるせない妻ノイローゼ

柿の実より少し大きい墓一つ (去来)

大阪市 北山 悟郎

根廻しの話が油乗り過ぎた

連休は充電どころか妻の供

泉佐野市 大工 静子

コーヒ味汽車ポッポという喫茶

遠隔の孫之下手な句などませて

和歌山県 山田 久子

同類であった安堵の彩浮ぶ

妻の顔母の顔して荷をおろす

兵庫県 森脇 和子

自画像へ古い先伏せた絵具皿

くもの巣にかかってみたい四月馬鹿

岡山県 伏見 すみれ

太陽のような母だと大事がり

ご来光待つ山々が燃えてくる

岸和田市 奥 礼子

米をとぐ音も静かに早い朝

亡き父母のドラマを胸にしまつとく

和歌山県 森 三枝子

野菜ばりばりぼちぼち血圧意識する

朝市の野菜はすぐに売り切れる

鳥取県 松本 みをき

老妻が今日は突然薄化粧

白足袋が大切そうに紙バッグ

岡山県 豆泉 千代女

不況顔するなど夫注いでくれ

一句出来覚えてる気が寝て忘れ

鳥取市 武田 帆雀

熱いおしぼりスランプの顔を拭く

出鼻をくじかれたなどと茶の話

大阪市 松尾 柳右子

バスタオル私のヒップもてあます

一日の疲れタオルにいたわられ

他人の世話すきな娘は親ゆずり
岡山県 後安江山
年頃となつてやさしい孫娘

返事する言葉に人柄あらわれて
和歌山県 西村重彦
旅をしてしみじみ想う母の味

うどのびて小さい春がとどけられ
大和郡山形 岡田すみれ
雨きびし孫は勇んで塾にゆく

まだ元氣と母の返事は氣の強い
大阪市 權安達一郎
ゆり二号の高い機械が故障です

ハイハイハイ本日は低氣圧
大阪市 朝倉利義
病む妻が見るに見かねて味をつけ

人生の味見失う棒暗記
熊本市 黒田緑
ある時の迂濶をシミに指さされ

温泉の濁り湯子供汚ながら
和歌山県 玉井豊太
新築の庭におんなの下駄揃い

葉桜へ変身したくて散りしきる
大阪市 渡部さと美
手洗いの鏡を女にらみつけ

大阪市 山脇正之

苦勞人さすが話に味があり
その物の味を出して京料理

付き合つて味のある人無い人も
味しめた泥棒二度目に逮捕され
大阪市 田淵晴子

治つたらにはおいても孫を抱く
治つたら夫になにからしてあげよ
大阪市 麻倉はるえ

一人居のゴリラはじつと客を見る
この路地にも桜あるぞと咲いている
大阪市 田中節子

引き止めて引き止められて咲く話
母の日にせめて電話で安否問ひ
岡山県 杉本伊久栄

くさ餅に母のうれしい訪問者
宵みやに天狗の面の肩車
吹田市 園田文子

予想外の寄りに羊羹薄くなり
会釈され思い出せないもどかしさ
和歌山県 桜井千秀

つまずいた凸凹道でまるくなる
俺からさき私さきよと老夫婦
吹田市 西岡豊

情報のない国へなら行つてみる
和歌山県 北山凡太

角い教室で丸い人間出来まっか

唐津市 山口高明

一畳に大の字を書く粗大ゴミ

お叱言も母に似て来て母の年

お遍路に道をゆずった遊山客

春冷えはコート持参で出発し

八尾市 葛 幸子

八尾市 松 下 蕉 露

会葬御礼本人テープで蝶り出す

公平を欠くとゆれ出すヤジロペー

岡山県 藤 瀬 比沙子

人知れず燃えて沢山の虹つつじ

おいしそうな草ネと妻と野菜高

笑い顔出せば柘榴はもぎ取られ

真夏より女が先にぬがされる

出雲市 河 原 恵美子

おしん去りだいこんの花やさしくて

パパママがおりに入りたいた動物園

兵庫県 浜 田 雅 子

梅雨晴間テラスがせまく感じられ

いつまでも若いと言われ口紅を

愛憎の果て一塊の骨となり

二枚目が二枚目の儘旅路逝く

大阪市 川 原 章 久

岡山県 小林 妻子

メーデーへ蟻ストライキ無いらしい

子の電話やっぱり故郷恋しくて

佃煮のわらびの味に自信もち

鶯のふと耳にするさわかさ

共白髪妻への讃歌ありがとう

前列を将棋倒しにするサイン

神の前やはり言いわけしてる口

娘のために心の鈴を振り続け

寝起きにも時計の要らぬ暮し振り

藤柵の下に一服老夫婦

八重桜訪う人もなく盛り過ぎ

筍の掘られるものと伸びるもの

接近し過ぎてちようちよに逃げられる

祖父の汗にじむ旧道の草を刈る

面白く人の不幸を聞いている

嘘少し入れると話生きてくる

守口市 岸 野 キ ミ

川西市 野 村 静 雄

島根県 園 山 世 似

福岡県 福 間 芳 枝

岡山県 牧 野 秀 香

竹原市 信 本 博 子

泉佐野市 真 崎 浪 速 子

高槻市 大 池 好 古

巨神戦お見事掛布三ホームー
寝たきりの母に洗髪春日和

西宮市 松尾志保

物事をクールに見つめて敵つくる
味つけて妻と娘を区別され

高知県 山下登舟

余生とておろそかにせず障子張る
新しき職にありつき風邪を引き

高知県 小沢幸泉

タバコ吸う女カワユク見えてくる
放浪に不良おしえたある出合い

千葉県 中村有人

暁の空は知らない百姓で
有名な地名となつて地図開く

兵庫県 野々口ゆう也

詩ごころ解る友逝き千の愚痴
ウイंकへ絵を忘れて虹を描き

新宮市 船越正

乗れぬのに夢で自転車壮快に
顔だけで性格丸出し湯舟中

東大阪市 小林勇人

自らの姿勢を正せ影法師
離れ島配水管は海の底

八尾市 椎尾公子

スポーツ紙で昨日の勝負たしかめる
就職は野球が出来る腕をもち

緑なら沢山あります古里に
世話好きか鬼角とかくの勇足

島根県 田中ヒデ子

木目見て大工のキャリア墨を打つ
別れの日涙に夜の星写る

守口市 長谷川 司

いまボクは男ここでは言わず置く
言い訳はした事が無いいまのボク

榎原市 西本保夫

亡妻記読めば涙のこもる部屋
この世にもおすえ極楽宇治の寺

京都市 小林英子

女関を出た女の話まだつづき
あけないとおこった父があけてくれ

富田林市 松本 今日子

《ジュニアの部》

背の順で並んでいると安心だ
心にも春が来たかと新学期

枚方市 二宮 正よし (中一)

レストランマナーがわるいいけないな
せんでんでたつきゆうびんの歌がある

枚方市 二宮 正よし (小四)

ちえの手のなかにシマシマみつけたよ
みかづきはみかんをそらになげたのです

米子市 八木 千絵 (四さい)

愛染帖

橘高薫風選

今治市 月原宵明

忍従の過去小走りの癖がつき

ユーモアが根つから好きな葱坊主

結論を出そうシクナル赤の間に

笠岡市 木山遠二

夏寒く冬の暑さも喜ばれ

女房によく叱られる程に老い

寝屋川市 宮尾 あいき

母の日の母の城なり百合匂う

もったいなやありがたやはすかしや余生

父健在ときどき腹を立てている

よく見える眼鏡に変えて悔いている

藤井寺市 赤木 和子

幽玄の郷ありその名LOVE HOTEL

うたかたの恋ならレッドバトラーと

岡山県 土居 耕花

むっくりと起きて他人の顔になる

掃除機が一番悪い将棋盤

尼崎市 西村 かすみ

拝啓と書かない温い便りくる

すぐ帰る祭り夫婦に子がい

町田市 竹内紫鏘

仏像にわれも加わるエレベーター

老軀みなカメラを持たぬ年忌かな

豊中市 田中正坊

鯉口は切ったが僕に妥協癖

田友の訃を聞いて

また一人大正琴の絃が切れ

唐津市 浜本義美

しきたりの一つひとつに母が住み

飽食の父は麦飯喰いたがり

仙台市 川村映輝

ネクタイが不用となった再就職

殺された方が人権無視される

唐津市 田口虹汀

母となる日の近うして母が来る

毒虫も身仕度をする卯月かな

高槻市 笠嶋 恵美子

人間に似た蟻がいておちこぼれ

囀りの小さなロケット揚雲雀

島根県 堀江 正朗

見えもせぬ彩にこだわる阿呆らしさ

子のような返事でお茶にくる夫よ

島根県 堀江 芳子

五月晴れ心配ばかりして居れん

富田林市 松本 今日子

風船の中の空気は渡さない

米子市 八木 千代

鯉のぼり子無し夫婦の託ち顔

鳥取県 林 露杖

お多福の面も心配持っている

尾崎市 春城 武庫坊

鏡みて罪の思いが甦える

豊中市 上田 登志実

フルコース私が宙に浮いている

守口市 羽原 静歩

フルムーンうちの漬物宿に無い

寝屋川市 岸 野 あやめ

幸せな傷みつめあう珈琲店

松原市 佐藤 藤子

將軍が死んでも記事にならない日

山口県 高崎 雀声

街の灯が恋しい妻籠から帰り

守口市 結城 君子

蛇毒寂しき白昼夢を見た

近江八幡市 前川 千賀子

マツチ擦るほんやり妻の過去が見え

弘前市 田中 叶

欲が出て白紙になれぬもどかしさ

鳥取県 奥谷 弘朗

米びつの底から亡母の声がする

西宮市 津山 冬子

燃えそくに消えそくに咲く遅れ花

富田林市 藤田 泰子

目鼻立はつきり人の世にこびる

岡山市 川端 柳子

弘前市 真喜内 實

句読点知らぬ女のプチケーキ

和歌山市 浦野 和子

鳥取県 岩田 三和

我がゆとりマラソン中に行くトイレ

和歌山市

西山

幸

桜井市 谷口梨郷

悲しみを独り沈める自尊心

豊中市 満仲きく子

亡父母と影を重ねて生きのびる

島根県

松本文子

やりくりへ冷たく笑う銭の音

岡山県 千原理恵

てるてる坊主もわたしも忙しい五月

高石市 牛尾緑良

すぎる思いで墓地の草抜いている

尾崎市

春城年代

言いすぎてあやまる女いじらしく

岡山市 広田小菊

蝶の死よ菜の花の黄に溺れたか

岡山県 岩道博友

新緑の雨に染まった雨蛙

吹田市

西川景子

結び目が固くて親の手に余る

川西市 野村静雄

人間の弱み主治医を替えにゆき

堺市 高橋千万里

コンピュータが選んだ人と見合いです

大阪市

松尾柳右子

雨上り草木も人も陽に燃える

岡山東山 山本玉恵

早熟をかしこいなあと見た誤算

岡山県 直原七面山

女坂鏡割れそな赤い服

西宮市

奥田みつ子

点と線結び合せて夢にする

岡山東山 月原つくし

曲りくねった峠を越えて来た夫婦

米子市 小西雄々

メルヘンのタオルで流す子の背中

西宮市

朝山千世子

毒舌もいつか熟年愚痴にされ

今治市 岩田美代

勤務地のやっさ踊りに子が招く

吹田市 茂見よ志子

初仕事娘からの電話はがらかに

羽曳野市

吉川寿美

握手した手を洗ってふるふんまん

富田林市 堀江光子

馳け引きの出来ぬ男だどんと来い

島根県 淡路ゆり子

見合いです娘の帯山を高う締め

大阪市

上田かつみ

朝夕に顔を映して顔を見えず

寝屋川市 田中晴子

かちかち山いつしか母の瞳もつぶら

米子市 野坂なみ

落ち椿不安がらせて又落ちる

倉敷市

藤井春日

いちぬけて旅が始まる流れ星

尾崎市 古川美津枝

鬼の面つけると鬼の音となり

愛媛県 八塚三五島

頬つたう一滴の涙に重さあり

大阪市

朝倉利義

願望が過ぎて自画像ノッペラぼう

大阪市 井上柳五郎

亡夫との良い思いだけ胸に抱く

具塚市 行天千代

般若経無の字無の字が二十一

鳥取県

川崎秋女

鬱つづく日の沈丁花咲きさかり

岡山市 栗谷春子

春愁を亡父が出て来て眠らせず

高知県 赤川菊野

散り敷いて椿真赤な血を流す

島根県

小砂白汀

簾吊りようやく筆を取る気分

吹田市 久保正敏

セーターを一枚脱がせた藤の花

大阪市 北勝美

糸くるま無限軌道をあやつれり

和泉市

岡井やすお

国民が総理の手形買い戻す

唐津市 仁部四郎

みつめると亡母が重なる鏡かけ

米子市 青戸田鶴

院長の精神病が要治療

和歌山市

中尾まゆみ

一枚の葉書で機先制せられ

大阪市 稲本凡子

幸せを貴方とわけるレモンの黄

今治市 矢野佳雲

雑草へまきれ込むのか赤い毯

和歌山市

中尾まゆみ

一枚の葉書で機先制せられ

大阪市 稲本凡子

幸せを貴方とわけるレモンの黄

今治市 矢野佳雲

八尾市 松下 蕉露

兵庫県 脇田 米朝

滲みついた人聞くさがが抜けずいる

鳥取県 新家 まさこ

商敵が斜めの顔で挨拶し

羽咋市 三宅ろ 亭

この地球君中心に回らない

和歌山県 北山 凡太

考える故に我あり山路ゆく

豊前市 波多野 五楽庵

曲引きの指に遅霜のしかかる

指宿市 野上 伊津志

箸立の底を磨いて寂しがり

米子市 菅井 とも子

紫陽花の色に迷うなかつむり

鳥取県 清水 一保

清貧と書いてしみじみ金の価値

大阪市 江城 修史

愛果てし男女に遠い古里よ

唐津市 相葉 あき

桜の字付くものみんな綺麗だな

新宮市 船越 正

我が里に徒歩さえ土を踏まず着き

米子市 沢田 千春

窓は雨思ひ出さんと呼んでくる

東大阪市 市場 没食子

内風呂になつても祖父が軽い四股

名古屋市 藤井 高子

夕顔の白さ届かぬ恋をいつ

鳥取県 林 瑞枝

向日葵を見染めた風のホヘミアン

笠岡市 松本 忠三

長いものに巻かれてやるも作戦か

西条市 片上 明水

一番に大事な鍵がよく光る

岸和田市 芳地 狸村

山吹の濡れて静かな寺の坂

羽曳野市 天崎 只士

ぼけ老人明日の自分が恐ろしい

和歌山県 天満 三千代

春告げるれんげも殺す除草剤

岸和田市 古野 ひで

ひとり居に心優しき花の四季

和歌山市 若宮 武雄

花のない折りあじさいの七変化

米子市 光井 玲子

倅せが産湯の湯気につつまれて

高知県 小沢 幸泉

遍差値を背負う今日からランドセル

大阪市 渡部 さと美

砂はいて身軽におなりアサリ貝

寝屋川市 平松 かすみ

三十年後で聞いている好きだった

和歌山市 桜井 千秀

握らせた金がかしつかり物を言い

鳥根県 木村 はじめ

五月晴れ心安けくひとり酒

高知県 山下 登舟

春の野に過ぎ行く刻をおしみつつ

和歌山県 山川 克子

エプロンに匂い残して母は留守

唐津市 筒井 朴竜

勉学の子へ負けぬ気で母パート

京都市 木本 如洲

躓いたおんなは髪を染替える

唐津市 浜本 ちよ

敷き詰めたレールを子らは嫌いだ

唐津市 木塚 素石

無礼です客待たせての色直し

鳥取県 松本 みさき

靖国を仰いだ熱意孫知らず

奈良市 森田 カズエ

貸ポート進行中の恋も乗せ

富田林市 中村 優

嘆くまい古木に若い葉が繁る

豊中市 中塚塚三丁目13-15

★ 投稿先 〒560 橋高薫風 (ハガキに3句)

投稿先 〒560 橋高薫風 (ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題 「誘う」 選者 森中恵美子

締切 7月10日

(ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町3-43 NHK

大阪放送局 さわやか広場の係

発表 7月22日(日) ラジオ第一放送

午前10時から

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

高橋操子

胸張ると花が散りそう背をまるめ

堀江正朗

多分桜の木の下ではないでしようか。胸を張って、うっかり枝にふれると、花が散りそうだから背をまるめて歩いている白杖の正朗さんのお姿が神々しいまでに浮んできます。京大合格祖母をオッチョコチヨイにする

嘉数 兆代賀

さすがお上手ですネー。オッチョコチヨイなんて表現よく出ましたネー。いいおばあちゃんの手を物語っています。万才と叫びたい気持ち。

大鳥居くぐれば賽銭箱が見え

西 森 花 村

善男善女の色々な願をこめて投げ込まれるお賽銭、神前には必ず大きい賽銭箱が置いてある。万田札もたくさんあるそう。私もよくあちこちお詣りしてお賽銭を入れてくる。いい事に使つて下さる協力が、少しでも出

来るよつで嬉しく思っている。

残つてゐるたばこ一本吸つちまえ

大山と金

禁煙しようとして、いらいらしている気が、よく出ています。一本吸つちまつたお陰で、もうやめる事が出来ないのではないでしようか。ほんとうにつらいのですよネエ。

再起する足へ大地も呼吸する

森田熊生

再起する決意の強さを、大地も呼吸する、いい表現ですネ。これ位の決意がなければ、なかなか再起出来るものではありません。御成功を祈ります。

有りすぎる暇で仕事を溜めている

小谷 仙山

いそがしい時は、少しの暇も片づけて置かないと、出来ないからと仕事がよく片づく。暇な時は、いつでも出来るからと気がゆるむから溜つてしまふのである。人間気持ほど勝手なものはない。

ロボットの合図で人が使われる

森田 布堂

これから先の世界の中を考えると、何だか恐くなって来ます。いい着想だと思います。

公然と怠けて減反金になり

久保 正敏

輸入しなければならぬパンをたべて、お米はあり余つて海に捨てたり、句のように減反してはお金を払う。政治の事はあまり分らないが、おかしな世になったものである。アメリカの人がぼつぼつ米のめしを食へ始めた

とか今日(五月二十二日)のテレビでききました。が、このままでよいのか、すぐ案じてしまふ私です。

手洗いと言う考える場所がある

土居 耕花

笑い事ではなく、気持の落ちつく所です。涙の捨て場所にもなり、色々な利用出来る所ですねえ。

春光へ貸農園は手にも豆

佐野 白水

家族みんな春の光を受けて貸農園で喜々と取り組んでいる姿が、よく現われています。

金婚へ同じ歩幅で暮せよう

芳地 狸村

狸村さんはよく知っていますので、ほんとうに此の句の通り、少し目のお悪い奥様を实にやさしくしていられます。川柳は人を作ると言いますが、川柳もとても熱心で、他人様にも親切、町会長や他の公役にせわしい日々ですが、川柳人として句の通り立派な方です。

昔むかし勤めた村の記事を見る

堀端 三男

ふるさとにも似て、なつかしいものです。

許されるわたし自身が許せない

園山 多賀子

私にもよくある事で、後悔をしたあげく、二度とくり返すでないよと、自身に言いかけせています。素直な表現が好ましく思います。



悼畏友 伊藤茶仏氏

西尾 栞

昭和五十九年五月八日、川柳塔社参事・伊藤茶仏さんの歿くなられた報らせを吉田秀哉さんからいただいた。

去る三月二十五日、番傘同人酒井路也さんの第三句集「十字路」発刊の時、私は金沢に赴いたのを機に、茶仏さんをお見舞申上げようと、病院の所在をきいたところ、ご家族のお顔さえわからないご容態だから、ご遠慮された方がよいのではとの言葉だったので、後ろ髪をひかれる思いで帰阪したが、今日この追悼文を書く残念さを沁々と思っている。

私の書架に、茶仏句集「道祖神」と並んで小松市大和善隣館三十年の歩みという本がある。この本は曾て茶仏さんから贈られたもので、昭和四十九年発行、社会福祉法人小松市社会事業協会代表者伊藤繁之（本名）とあり、社会事業には随分と尽され、旭五に輝く人生

と文化賞受賞に榮える文人であつたことをつくづく思い出している。

小松市と八尾市は遠くはなれているが、大変親しい仲だった。だから、昭和五十五年の十一月に松寿園の前庭に

平凡にこの世を生きるむずかしさ

という句碑建立された時も、私は川柳塔社を代表して祝辞を述べ、また「道祖神」の序文も欣んで書いたものである。

茶仏さんは、明治三十七年九月五日のお生れだから、享年八十一歳という人生であつた。今「道祖神」を繙くと

頑張れよ九十五歳は母の年

という句が見つかる。茶仏さんとしては、十四歳早く逝つたことは心外な事であつたらう。

ことりともせぬ母が居て有難し

『夜市川柳』募集

第三年度 「出口」 谷垣 史好選
第一回 締切 7月末日

第二回 「前ぶれ」 西山 幸選
締切 7月末日

『夜市川柳』規約

一、「川柳堺」誌上で毎月一題『夜市川柳』の題を出題し、ハガキ又は便箋で三句を記名投句する（毎月月末締切）。

一、投句された句は番号で整理した上、一句ずつ句箋に清記し、予め係が決定した選者がこの選句に当る。

一、入選句は毎回四〇句に限定し『川柳堺』翌月号に発表する。得点は左記に基いて毎回加算し年間のベストテンを競う。
一、得点 前技…三十二句…一点
佳作……五句……一点
人……二句……一点

桐宮の紐を上手に結ぶ母

などと、母さん孝行の茶仏さんは、小松南車製作所の社長として活躍され、石川県福祉協議会副会長、その他多方面に亘る公職責任者のポストを果され、句碑を健立され、句集を刊行され、立派なご子息や、可愛いお孫さん、

子連れで橋の擬宝珠をなでてる

という余裕、又

仲のいい夫婦を夫婦見て帰る

愛妻が盗まれそうにいる渚

という奥さんとの生活は、最高の生涯だったと思考される。

中肉中背の茶仏さんの毅然たる容姿と、にこやかな温顔が今も高目に浮かぶ。一年中で一番気候のよい五月にあの世へ旅立たれたのも、茶仏さんの陰徳の賜物であつたらう。

謹んで御冥福をお祈り申上げる。

お浄土も五月の風のうるわしき 栞

にんげん伊藤茶仏

吉田秀哉

「それじゃ、秀哉さん、頼む。」と掌を合わされたのは、五十七年も暮れようとしている

二十七日の夕刻近い頃でした。それまで三日間にわたり句集発刊のお奨めに足を運んでいた私の心も、先生のお顔と同様に紅潮していたと思います。「道祖神」の句集名もこの解を得、晴れやかな面持ちで退出した思いも、つい昨日のことのように感じられます。喜寿の句碑と傘寿の句集とは、私たちの念願であり、ご恩返しでありました。

十日の葬儀には石川県知事も参列されるほどの名士でありながら、私たちに對しては、小松機械工作所社長伊藤繁之でもなく、県福祉協議会副会長伊藤繁之でもなく、あくまでよき指導者としての川柳人茶仏であり、袴を脱いだ人間味あふれる川柳人茶仏、その人でありました。

昭和四年九月号の「川柳雑誌」に「雷へしっかり抱いた父の膝」ほか二句を投じられて現川柳塔に所属されて以来五十有余年、その間三十二年には小松支部を結成され、同時に不朽洞正会員に名を連ね、三十三年には維持会員として活動を続けて来られました。

句会が終わって雑談に移る時は、決まって路郎先生初め川柳塔の方々にまつわる話題を提供され、作句姿勢、川柳観、作品鑑賞等にわたり、あたかも茶仏川柳構座を開いておられたがごとき感がありました。

地……………三点
天……………四點

選者軸吟……………一・五點

一、「川柳界」の例会を七月に限り七月三十一日(堺大魚夜市の日)とし、

その年のベストテン上位七人を選者に迎え、「夜市句会」を開催する。

一、投句料 一年分二千円。但し誌友

及び例会出席者は無料

一、投句先〒931 堺市堀上緑町二一九—二 河内天笑方 堺川柳会

すでに故人となられた千太郎、城南、宗太郎の各諸氏はもとより、小松柳界の多くの先輩たちが川柳塔に参加して、この片田舎に川柳の新風を吹き込まれました。

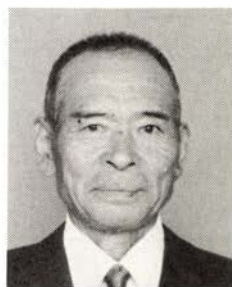
故人茫茫追慕の念しきりですが、それにしても惜しい重鎮を失いました。私たちは決して先生の死を無駄にすることなく、小松柳界発展のために微力を尽す所存です。これまでの浅からぬ縁を強い絆として、今後も変わらぬご指導を仰ぎ、先生のご遺志に添いたいと思っています。

昭和59年5月8日死亡 死因脳硬塞

法名 威徳院釋智誓 享年七十九歳

合掌

村諷子さんを偲んで



森 山 盛 桜

去る二月二十三日、鈴木村諷子さんが永眠されました。

思えば昭和五十三年六月、右も左も解らない私が、ふとした事で林露杖さんに誘われ青谷川柳会に出席させていただき、村諷子さんに引き合わせていただいたのがお目にかかった最初でございました。

私のような新米に対しても腰が低く、又、笑みを浮かべた話し振りが深く印象に残ったものでした。話の中で

「今のように点数で勝負をつけるのは、どうも好きになれない。もっと自由に自分の句

を作ったらいいと思う。」

ということを言われました。賞品目当てに頑張っているような私には何とも耳の痛い話でした。又、その日の兼題「つばめ」に関してある本から「母の日に母と見上げるつばめの巢」という句を引き合いに出され「いい句です。いい句です。」と念押しをされていたのが心に残っています。

青谷川柳会は、青谷町を中心とした集まりでしたが、村諷子さんは隣の気高町からただ一人、そして私は鹿野町からただ一人の参加者でした。ある時は私の車で、ある時は列車でと、ご一緒に出席させていただきました。やがて私の鹿野町にも川柳会が発足致しましたが、この頃から少し体調を崩されたようでも、それでも年に一回の大会には元気なお姿も見せていただきました。常に血の通った句、温みのある句を心掛けておられたように感じます。

人間を、人生を、慈愛の眼差しで見えておられたその根底は何だったのか、今では聞く術もありませんが、つい先頃偶然にも村諷子さんの一文にお目にかかり、その一端を伺い知ったような気がします。最後にそれをご紹介しながらご冥福をお祈りしたいと思います。

— S 58・10・13 付 —

母の背なあの電柱が見えるかい 村諷子
北海道から引揚げて帰るとすぐ小学校に入
学したからおそらく尋常一年か二年生の頃だ
ったかも知れん。眼をわずらって母に背負わ
れて郡家の眼医者に通った時のことである。
福田（今の農協本所の前）の辺りで遠
く生活センターの方へ抜けた）の辺りで遠
くの電柱を指さして

「あれが見えるか」

母の背中で聞いた母の言葉。七十過ぎた今
になっても忘れず、思い出すとジーンと胸
に来てひとりで泣けてくる。体験が産んだ
私だけの私の句です。

（原文のまま）

匿名の方より

金一封ご寄贈いただきました。

お礼申し上げます。

川 柳 塔 社

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から—

山内静水

欲捨てておいしいカレーを食べに行く

田中晴子
本当においしいカレー、一人でなく連れだつて食べに行きたいもの。亭主族の一人として、平明なこの句を厳しく受け止めたい。
花を置きただそれだけのことなのに

笠嶋 恵美子

花は花屋のものに限ったことはない。それれみな美しい。無手勝流であるが、私も花は絶やさないようにと務めている。中七をじつくりと味わいたい。

大掃除燃さずにおこう子のノート

高野 宵草

この時季ともなると昔はボンボン畳を叩く音がしていたのである。燃さなかつたこのノートは？ だいたいの想像はつくが、真情、微笑の浮ぶ句である。

孤には狐の安らぎ朝のレモンテイ

藤井 高子

この心境に至るまでの道のりは大変だったと思う。川柳を心のよりどころとして静かに充実した感謝の日暮しをされてる姿が浮んでくる。

ウインドウに見とれて夫見失い

竹内 花代子

明るい句の少くなった昨今、この句は一服の清涼剤である。その後ウインドの召物手に入ったか、どうかちよっぴり気になる。終生くれぐれも主人だけは見失われぬように。水が出ることに幸せ見つけた日

永田 俊子

蛇口をひねると水が出るのは当り前、生きているのも当り前と、感謝の気持が失せている当世だけに、作者は素晴らしい幸せを見つけた。実に素晴らしい方だと思います。

母さんに母さんがいる五目飯

赤田 裕美

スーパーの食品売場には何んでも揃っているが、母さんの味に勝るものはないと思う。その母さんの、母さんの味とは心憎い。その上に明るい家庭の雰囲気まで醸しだしている。約束をきっちり守って馬鹿にされ

古川 覚然坊

指切りゲンマンと違って、万才万才で目玉を買ったダルマガが、約束ごとを果さないのではなからうか。きっちり守って馬鹿にされと言いなから、胸を張って闊歩している万青年の作者に拍手をおくる。

孫よんでシャボン玉など吹いてみる

岸野 あやめ

「など」の二字がもろもろのことを想像させてくれて楽しい。シャボン玉の作り方も孫に教えたと思う。美しく老いるためにも、大いにシャボン玉を飛ばしてほしい。

子を四人並べて足の爪を切り

岩本 笑子

洗濯の山も手際よく整理して、さてと、子供の爪を切っている。若い母親のくつろぎの一時が美しく、鮮明に浮んでくる。

土一升金一升に犬の糞

桜井 千秀

路面は言うまでもない。流川の底までセメントで固められている時代、高価な地所も大には只の土でしかないが、飼い主は人間さまである限り、公害をまき散らしてはならない。そつとしておこうお伽の国の謎

大田 みさと

十五夜のお月さんを今時の子供はどんな気持で眺めるだろうか。時代がどう変わろうとお伽の国の謎は謎として、孫子に継承したいものである。

貧しさは言うまい湯豆腐踊ってる

高尾 よし子

お父ちゃん今日も一日ご苦労さんでしたと夫婦で乾杯して飲む一合の酒は、心の芯まで豊かにしてくる。

お父さん好きな遊びが多すぎる

六歳 奥 篤司

幼児とは思えない痛烈な、叫び声すらするこの句を、神妙に受け止めて、舌たらずの鑑賞となったことをお詫びする。

娘と時計と川柳と

中川 滋雀

急性白血病という恐ろしい病気に新婚早々から、わずか半年程の入院でこの世を去った娘の形見として、ただ悲しい思い出だけでも知れないが、当時の私達夫婦にはあまりにも烈しいショックとして今も残っている。

いま目の前でチクタク動いている置時計。何食わぬ顔して私達親子の間を見てきた平凡な型の置時計。

一周忌もすぎ、嫁先との話合いも円満に出来て無住のままとなっていた、かつての新居へ一年半ぶりに遺品など引き取りに行った。カラカラ雨戸を開けた部屋のカビ臭い空気の中で、ひと呼吸する間立ちつくした。

やがて視線が机の上の置時計に停った時、この建物全部が墓のように冷たくそして静かな苦なのに、

「動いてる！ うごいている」

一緒に行った妻と異口同音に叫んでいた。

娘の魂は遠く天国にある苦なのに、どこかに生ききているような錯覚をその動き続けてき

た時計から、もの言わぬ秒針からタイムカプセルにいる思いを、生生しく感じた。

吾れに返った私は、かすかに白っぽい埃を払った時計の肌から、娘のかも知れない指の跡らしいのを辿っていた脳裏に、入院中の頃のあるひとこまを思い出させた。

穏やかな晩秋の午後のひとときであった。

娘の病室でまだその時、本を読める元氣もあつたし、その横顔をあかずに眺めていた私に、

「お父ちゃん、この頃川柳やってんの？」

「ウン、相変らずやってるよ」

「面白い？」

「ウン、まあなあー」とか何んとか会話の

あと、

「お父ちゃん、もう帰ってえー、家ではお母ちゃんが一人でお店番しんどいから」と言つて傍の時計へチラリと目を移しながら、ベッドから私の方へ向き直つた。

人一倍他人思いの強い娘だけに、自分の病氣を忘れて母思ふ言葉となつたのだろう。やさしい表情が浮んだのをはっきり憶えている。その時の置時計である。

その日を境にしたように、娘の病状は少しずつ悪くなっていった。木枯が吹きはじめ巷にシングルベルのリズムが聞え出した十二月一日が命日となった。

それから十五年を過ぎて、こんどは私が老人病で入院の身となり、枕頭台には形見とつた時計が置いてある。

枯れよつとする作句熱の頭をゆり動かすように、励ますように秒針がコチコチ、コチコチ追つてくる。

娘よ、ありがと。頑張るよ。

セコンドが冴えて眠れぬ過去がある 滋雀

ボツの釈明

布施サチコ

四月一日発刊の『やさしい川柳入門』に、私の句が載つたことを知らせて下さつたのは宮城県東のS氏であった。

「嬉しかったです。投句もつづけたらどうですか」とハガキに書かれていた。「投句つづけたら」というのは、近頃、新聞にさっぱり拙句が登場しないことを指している。

「どうして句を出さないのですか」という便りをあちこちから、驚くことには選者の先生からも頂いている。悪い頭を酷使して作句、送つてみるがボツなのである。壁にぶつかつ

たらしいが、厚くて固い壁がしよつちゅう押し寄せるから困るのである。句を出さないのではなくて、出しても載らないのだが、他人様は良い方に解釈して下さるようで、まことに有難く、かつ心苦しい。

新聞川柳欄への投句量は膨大で、九割以上がボツと聞くと、心弱い私は怖気づいてしまふ。だが、そんな難関もものかわ、勝利をかちとる強者もあって、S氏もコンスタントに活字になる常連の一方である。教育委員会の偉い先生であり、川柳博士でもある。

「私にもスランプは常にある。そこで耐えて待つのです。投げてはいけません」と手紙を買ったことがある。昔、勉強を怠けては、先生にお説教されたことを思い出す。

さて、『やさしい川柳入門』とやらに、はたして拙句が載っているのだろうか。『贈の字がなければ並の置時計』はだいぶ前の作品だが大した句とも思われない。夫に言う、「悪い見本に載ったんやろ」いつもながら冷然と言いつのが憎らしい。

近所の小さな本屋さんには、川柳の本は置いてないので、梅田の紀伊国屋書店へ行って来ようか、と考えた。が、行ってみて無かつたら足代が損だし、とケチな私はすぐそつう風に思ふ。

前以て電話でたずねるのが良策と、翌朝、開店時刻早々に紀伊国屋のダイヤルを回すと、「その本はございませんが、日にちを頂ければ取り寄せます」とのこと。ケチな私はまた思案する。値段がわからない。もし、数万円もする豪華本だったら、と家計簿の残を思い浮かべる。そこで、ひとまず電話を切り、S氏のハガキにあった東京の出版社へ電話してみた。幸い、定価は千五百円なり、そして半月以内には紀伊国屋書店にも出るはずだといふ。再び、紀伊国屋へ電話し、住所氏名電話番号を告げ予約したのだが、なんと一時間経たぬうちに、「いま入りました」の連絡があったのだ。

先んずれば人を制す」といふ諺があるかと思えば、急いでは事を仕損ずる。また、慌てる乞食は貰いが少ない」の格言がある。私の場合、往々にして後者に当てはまる。反面蛍光灯的な部分も大きいので始末がわるい。

朝の家事を中断して本屋へ電話せずとも、昼ごろ電話すれば一度で済んだものと、東京への電話賃が惜しまれた。

『長英逃亡』という新聞連載の小説を読んでいるが、幕末の蘭学者だった高野長英が罪に問われ入牢の身となる。失火に乗じて脱獄し諸国を逃亡の末に自殺する。脱獄せず一箇

月ほどそのまま辛抱すれば情勢が変り、晴れて活躍できたものを。これも急いで失敗した例だろう。

高名な蘭学者と私は、性格傾向のごく一部芳ばしからぬ一点で共通しているらしい、と考えたりする。思考が飛躍し過ぎるのが私の欠点、長英はさぞ迷惑されることだろう。

とにかく、さようないきさつを経て紀伊国屋へ赴き、無事わが句との対面が果たせた。

そうしてお隣のページに、『日本川柳秀句集』から引用の橘高薫先生の「母病むに紅白分つ花多し」というご秀作を拝見し、傍らの拙句がいかにも面映く感じられたのである。とまれ稚ない句が曲がりなりに作れるおかげで私の世界はすいぶん広がったと思う。全国のすぐれた川柳家ともご縁ができ、親切にして頂けるのは有難い。川柳から、随筆の材料もたくさん貰っている。

「あなたの句が載っていて嬉しかった」と便りを下さる方々に接して、他人のことを虚心担懐に喜んであげる度量が、私にあるだろうかかと反省しきりである。

S氏へのお礼状に、「新聞に載らないのは、忙しくて投句していないから」と書きたい見栄があつたけれど、やっぱり正直にボツの釈明をすることにした。

新緑伊勢・志摩めぐり

《富柳会吟行》



● 吉岡美房

五月二十一日、十時二十分難波発の近鉄特急に薫風先生、藤田泰子さん、田形美緒さんと美房が乗り込み、上土六で栗先生、藤岡花梢さん、岩田美代さん、池森子さん、板尾岳人さんらの本隊が乗って、伊勢への吟行に出発し

た。車内ではビールのコップがまわされ、お弁当を食べる頃には賑やかな話に花が咲く。

前夜の雨で心配していた天気も快晴で、車窓を流れる山の緑に身も心も洗われるような中を十二時四十四分鶴方着、二時間二十五分が一瞬の間に過ぎてしまったようである。鶴方では京都から直行された山本規不風さんが合流、総勢十名の顔が揃った。早速タクシード波切の大王崎燈台に向う。九十二段の階段を一気に登ると眼下に太平洋の波が打ち寄せ地平線まで伊勢湾を一望にのぞむすばらしい景観を心ゆくまで満喫することが出来た。阿古屋貝に真珠の核を入れる作業場を覗いたりしながら

再び次の目的地・御座に向う。

御座では海岸の波打際に在す弘法大師作の地藏尊「潮仏」におまいりする。ちょうど地元のおばさんが線香をもっておまいりに来て「この潮仏さんは、女性の腰から下の病気に御利益があるほか潮仏さんのお蔭で御座はどんな台風が来ても被害がない」という話を土

地の言葉で聞かせてもらう。旅の中で土地の人達と話をすることは旅を一段と楽しいものにするものである。十五時十分船付場から英虞湾島めぐりの巡航船に乗り込み、真珠養殖筏がきれいに浮ぶ静かな湾内を右に左に見えては消える島影を眺めながらの二十五分の船旅を楽しむ。

ようやく日射しが強くなって来たが、吹き抜ける潮風をまともに受けて快適そのものである。美人達の笑い声がひっきりなしに上る中を賢島に到着。出迎えのバスで本日の宿泊地・第三賢島荘に到着。早速旅装を解き、混浴でない大浴場で汗を流した後、十七時三十分から一時間の句会に入る。兼題「島」を薫風先生、「海女」を栗先生という最高に賢沢な選者による選で「島」の天位美代さん、「海女」の天位泰子さんと女性陣の意気はますます上る一方である。

その後、部屋を替えて待ちかねた大宴会に入る。新鮮な料理に酒が入ると規不風さんの弁舌いよいよ冴えわたるが、お色直しをした美女達にはすべての面で押されっぱなしであった。宴会のあとはバーへお入りして女性軍もてのカラオケを楽しんだ上、部屋に戻ってからも楽しい話が尽きず、夜の更けるのも忘れて、ようやくみんなが寝ついたのは〇時

頃であった。(翌朝は仕事の都合で、あとに心を残しつつ栗先生と美房が一足先に帰阪したため、後半の報告を泰子さんに引継ぐ。)

● 藤田泰子

栗先生と美房さんをお送りし、朝食後英虞湾を一望出来るロビーでモーニングコーヒを頂き、八人はマリナランドを見学、美しい色の熱帯海水魚や貝の化石などまるで龍宮城へ来たような錯覚に陥りながら、最後にマンボウ君と初対面「吾が世の春」と言わんばかりの泳ぎっぷりにせかせかせ暮らしている毎日をばからしく感じました。マリナランドを出て、駅に行くべく歩いていると、観光協会のマイクロバスが「駅迄乗せて行つてあげよう」と言ってくれたので、大よこびで乗車、ほんの五分程の距離でしたが、途中おみやげを売っているおばちゃんに干物を買わされる羽目になろうとは、岳人さん曰く「実は運転手さんのお母さんでした」に一同爆笑。伊勢神宮へ向いました。

車中、規不風さんは若い森子さんの手相を、食いしん坊の六人は昼食に何を食べるかワイワイガヤガヤ、薫風先生と岳人さんの提案で「川八のうなぎ」に意見一致、ともかく参拝を済ませてからということになり、タクシー

に分乗、伊勢神宮に着きました。参詣の道すがら薫風先生より、昔伊勢の内・外宮の間にある相ノ山という所で、三味線を弾き、相ノ山節を唄い、撥で投げ銭を受けとめる若いお杉お玉という女性がいたそう、

江戸者でなけりやお玉は痛がらず

抜き打ちにお杉お玉に銭つぶて

江戸っ子氣質を詠んだ古川柳のお話など教わりながら五十鈴川に辿り着きました。五十鈴川ではよく太って彩鮮やかな真鯉耕鯉をみて「おいしそう」なんて美緒さん。

五十鈴川銀貨に託す願いごと

気障っぽく銀貨を沈めた筆者、笑いころげている森子さん、春先から体調を崩され検査入院から退院された美代さんも花梢さんと仲良くお手々繋いで内宮のお社の階段下まで、そこからは泰子代参、御二人の御健康をお祈りしました。参拝を終え、それぞれ家族へのお土産物を仕入れ、早速「川八」へ。緑濃い陸上競技場の見える二階座敷で蒲焼他八種類ものうなぎ料理で乾杯、「もう、二三日一緒に旅をしていたいね」等と話しながら、おいしい食べものと温い心に触れ合った吟行をしめくりました。

真珠抱く海を愛しと思う海女

森子

海底に海女は第二の故郷持つ
貝がらに海女のビデオがつめてある
美代
海女の情あわびのデートそつと見る
美緒
休日の海女は母たり女たり
花梢
海女老いて朝な親しむ潮仏
薫風
潮仏海にもぐると海女になる
規不風
潮騒に嬉しい予感を海女の足
命綱切つて人魚になった海女
泰子
インタビュー海女の一人は臨月で
栗

◇各地柳壇(追加)

堺川柳会

河内 月子報

ブルドーザ地球のうめき声がする
眉水
意外性持つ三男が親おもい
妻子
親馬鹿と笑うなさみし一人子よ
白兔
乱暴な風を期待しているのはどなた
凡九郎
そして地球を叱っている雷光か
金太
匿名で香典がくる陰の女
与呂志
倅せを匿名にして喋りたし
柳伸
ひと言も喋らぬ今日にふと気づく
甘平
城跡で確かにきいたうめき声
草春
肩書きはないけど僕の親父です
東雲
浜の風石バツターに気を遣う
紀美女
父落す雷へ子等かこしまり
千万子
貧しさをふっと忘れる春の風
月子
匿名の花が美事に咲き誇り
天笑
思いがけない告白をきく風の中

クール

辻 文平選

哀別をクールに閉じる自動ドア
泣きことは言わずクールに処理をする
クールにをモットーで来た底力
紫を着るとクールな顔になり
クールさが旗振られる羽目となり
クールさを売って主役をいつも買
ほつとけば死ぬよとクールな聴診器
探険に燃える男のクールな眼
孫とならクールに回る独楽の音
こと金になると狂いだすクール
横顔がクール人の気も知らないで
コロン吹きクールな僕の部屋にする
都会からクールな話持ってくる
クールさを緑と青で作り上げ
イエスともノーとも取れるクールな目
喝采がクールの中を泳いでる
とてもクールな雨の夜の別れ
ベレー帽着るとクールな瞳に変わる
インテリとしての言葉がクール過ぎ
クールにはなれぬ男の浪花節
外濠を埋めてクールな笑い顔
雑兵がクールに喋る軽い飢え
切れ長の眼のクールさが突き刺さる
木蓮の大輪の白にあるクール

失言のずらりクールな眼に出逢い
四十年クールな鎖太すぎる
コンピュータクールに予想はじき出す
緑談をクールに逃げて翔んでいる
核ボタンクールな指で押せますか
カタカナのクールの味が絵にならぬ
クールさを男に求める旅靴
他人ですクールに分析してくれる
働哭へ別なわたしのクールな目
素うどんを覗くクルの夜のグラス
クールにはなれぬ自嘲の夜のグラス
一節をクールに生きたベレー帽
笑みだけで女冷たく身を幹す
クールなどある苦がない小あきんど
白着ると妻がクールに見えてくる
条件も義理もクールに捨てて逢う

浪速子
みをき
晴彦
冬子
本蔭椿
米朝
与呂志
重人
村美
理村
婦美子
堕駄
宵明
道子
規不風

あの人が酔えばクールな酒になる
家計簿にクールな妻の顔を見る
解説がクールに出来る他人の死
燃え上る嫉妬をかくしているクール
一度をむけばクールな肌がある

玉恵
優
正敏
克子
武庫坊

土壇場をクールに捨てるのは女
商談に入りクールな目に戻り
クールさの欠けた女の数え唄

はつ絵
素身郎
つくし

味

神夏磯 道子選

能面の裏を読んでるクールな瞳
味わえる程には盛らず京料理
不味くとも食べねばならぬ無塩食
酔うだけのこと一人で味が無い
年なりの味がにじんんでいる和服
食前の薬がステーキ味を変え
母の味薬入道具の中に入れ
味にうるさい亭主で妻の腕あがる
煮ころがしの味を求めて縄のれん
嫁の腕さすが我が家の味を変え
母の日の父がつくった味自慢
指みんな使ってからの蟹の味
板前に味の秘訣を聞いて来る
ゴール前ちよつとの油断で苦い味
イキな味と言ってはみたが何料理
味知ってお客が客を連れてくる
雑兵へ味見はさせず生きる知恵
いつの間にか姑に似て来た嫁の味
お訣れの苦味が残るジンフィズ
甘党へ歩みよらせた妻の匙
味わいのある寸評が胸満たす
妻の味男は知らぬ顔で食う
握じ乾しの大根に沁んだ母の味
コンニャクの中は自分の味守る

さと美
ノブ
三吉
たず子
正
洛醉
節子
枯梢
元江
幸泉
ゆう也
星斗
美恵
文子
悠泉
雄々
はじめ
泰子
どんたく
年代
与呂志
耕花
三和

病む妻が見るに見かねて味をつけ
味な人と云われるまでの御道楽
おふくろの味は誰にも真似できぬ
井戸水の味忘れず遠廻り
仕事にも寮の味にも慣れ太り
真心のサービスマ味をひきたてる
味占めてついに苦虫かみつぶし
ほろ酔いのお茶漬の味妻の味
活け作り味へひととき憂さ忘れ
此の頃は味を聞かなくなった妻
母の味つめたりユックが跳ねている
健康の倅せ思う舌の先
なんべんも妻を泣かした味を持ち
じわじわと女房の味に慣らされる

佳

利義 倫子 公一 里風 素身郎 忠三 新一郎 婦美子 重人 テルミ 八重 可住 弘朗

吊橋を渡れば母のところが汁
味のある話座布団半分敷き
味見して買わねば済まぬ事になり
メモ通り作って我が家の味がポケ
熟年の味棘魚を包み込む

静歩 宵明 素石 満津子 はつ絵

三日三晩敵に追われた飯の味

達一郎

まだ食べぬ内からうまい母の味

伊津志

茶断ちした母が知ってる白湯の味

正敏

うす味にして大根の味を知り

軸

返 事

川 上 大 輪 選

素直には返せぬ子の自己主張
返事丈なら日本一という嫁御
断りの返事が料金不足で来
君がいるだけで素直な返事する
四人目の返事が駄目で飲みに行く
お相手が乗り気で返事急かされる
良い返事来るようポストに頭下げ
電話では負ける相手へ書く返事
よしよしと二つ返事が酔っている
代返を見逃している苦勞性
お返事へお返事書いて恋すすむ
いい返事持って来たのに犬が吠え
返事にはならぬ返事を持つ弱味
借金の返事他人の口を借る
二つ返事いつも後悔ばかりする
返事にはならぬ返事で逃げておき
出したその日から返事待っている
生返事ばかりやっぱり何かある
返事する相手も居ない米を研ぐ
欠席に○だけ愛想のない返事
ママどこに居ても返事してくれる
当たら返事を呉れと易者の弁
昨日した返事を今日又聞いて来る
返事から時間がかかる妻の尻
仲人へ迫る返事を娘がしぶり

そんな返事したことないと言う返事
イエスともノーともとれる生返事
大漁の轍が返事の帰り船
代筆の母の返事が横に外れ
よい返事したばかりに奢らされ
御返事の都合で父は出向く腹
いい返事お待ちしますと無理をいい
弁護士に返事預けている疑惑
父と娘のなんだん疎遠になる返事
返事せぬ妻は覚悟を決めている
冷静に返事押えた咽喉仏
返事せぬ妻ほど憎きものはない
返事ひとつにこだわりをもつ喉仏
雲行きが替わり返事を書きなおす
じいちゃんの返事とんちんかんでよし

佳

兼治郎 章久 耕花 星斗 七面山 佳雲 正敏 与呂志 静雄 悟郎 堕駄 寿美 明水 忠三

許すとは言わぬ返事の孫を抱く
唯今に返事のこない孤独感
ハイとしか返事が言えぬ宮仕え
田んぼ売る返事を聞いた赤とんぼ
糸電話やさしい返事ばかり来る
指切りで返事に替えた月丸し
ハイハイハイ本日妻は低気圧
顔いただけであなたと五十年
夫唱婦随呼べば答える距離にいる

軸

京子 キミ 優 可住 宵明 達一郎 晚月 利義 満津子

初歩教室

題 | 反 対 |

本田恵二朗

- 結婚に反対したけど孫を抱く 千代女
- (結婚には反対したけど孫は抱く) 高 明
- 捕まえる人が捕まる警部補で 同
- (手錠が手錠をとらえる不思議な世) 豊 太
- 反対も出さず娘の腹を見る 吉 子
- 反対のレターで恋を打診する 同
- 一応は反対してる天の邪鬼 サワ子
- (天の邪鬼反対せねば気がすまず) 同
- 反対の立場を説いて慰める 同
- 反対をされた二人に五十年 同
- (反対を乗り切り金婚港に着き) 同
- 反対で言えばよく効く孫娘 同
- (あべこべを言えばよく効く孫娘) 同
- 母の願いの反対側にいる息子 よし津
- (反抗期母へ反対また反対) 同
- 反対はしても笑顔は許してる 同
- (口では反対目ではもう許してる) 同
- 選挙戦反対党に手を振り 梨 郷
- (選挙戦反対党へもろ手振り) 同

- 反対と胸なで下ろす皮肉屋さん 同
- (皮肉屋が反対論をおびき出し) 同
- 反対をし得ず五月の雨となる たかし
- (反対も言えず雨垂れ聞いている) 同
- ブラカードの文字が死んでる核反対 同
- 出世には又乗り遅れ反対者 章 久
- (反骨が出世のパスに乗り遅れ) 同
- 反対論一息入れる出世坂 同
- 反対をとらえた友の声弱し 幸 泉
- (反対を唱える友の声弱く) 同
- ひとりだけ反対意見気にかかると 同
- (ひとりだけ反対したのが気にかかり) 同
- へそ曲がり反対してるたのしげに 昭 治
- (楽しげに反対してる臍曲がり) 同
- 野党さん歳費上げにも反対を 同
- (野党さん歳費上げにも反対) 同
- 反対をされた初恋よけい燃え 兼治郎
- (反対をされて初恋もえ上がり) 同
- 機動隊橋で反対押し返し 同
- 反対と言わずねちねち攻め上げる 芳 水
- (反対と言わずねちねち攻めてくる) 同
- 愛嬌の裏側のそろばん弾く 同
- (愛嬌の裏でそろばん弾いている) 同
- 人柄に反対する舌しぼんで行く 實
- (反論の舌人柄に呑み取られ) 同
- 父無言絶対反対の大胡座 同
- (絶対反対無言の父の大胡座) 同
- 反対はしたものの良策もなし 理 恵
- (反対はしたが良策浮かばない) 同

川柳塔社常任理事会(6月1日)

出席者 梨・形水・水客・紫香・潮花・萬の
太茂津・柳宏子・吸江・重人・岳人・雀踊子
凡九郎・敏・天笑・笛生・鬼遊・薰風

(議題と報告事項)

▼還暦記念句集は六月中発行を目標に順調に進んでいる。参加者は四百七十名に達した。

▼秋の大阪市民川柳大会打合せ会(6月11日)

に鬼遊・敏両氏が出席。

▼茗人忌川柳大会(8月26日)河村日満追悼川柳大会(9月30日)へ協力の件。

▼路郎忌、水府忌選者交流により番傘八月句会へ栗主幹が出席。

▼一名欠員となっていた川柳塔賞選考委員に板尾岳人氏を推薦。

▼柳歴五十年を記念、水客・紫香・潮花・萬の四氏の吟行と投句募集が行われる(詳細別稿)

▼川柳大阪五百号記念大会(7月8日)バックアップの件。

7月の常任理事会は1日(日)

- 反対の性格でうまが合うらしい 同
- (反対の性格不思議にうまが合い)
- 反対をされて真赤にもえる恋 山 久
- (反対をされて真赤に恋もえる)
- 生きて行く反対ならかってる 同

(生きするための反対なれば買いましよう)
賛成でも反対でもなく娘が嫁ぐ
賛成でも反対でもなく娘が嫁ぎ
紀久子

反対の風に湧いて来るフアイト
同

(反対の風がフアイト湧き立たせ)
末席は反対好きの者ばかり
同

反対の道を行く友見はなせぬ
久子
(反対の道を行く友放つとけず)

給料の値上げ反対だれもせぬ
同

(賃上げへ反対する者見当らず)
反対も親の愛だと今に知り
同

ザラザラの方に清書を孫の作
美津子
(孫の清書ザラザラの方に美事書き)

反対に穿いて得意な孫のくつ
同

(あべこべに穿いて得意な孫のくつ)
見舞に行き健康法を聞かせられ
同

(見舞に行き健康法を聞かされる)
反対を押し切る愛に勝てはせぬ
寿子
(反対を押し切る愛に生け捕られ)

愛の風を胸にそらいと言うて見る
同

(嫌いよと言うその胸で言うて見る)
反対意見の中でヒントが炎えはじめ
同

(反対論がくれたヒントが炎え上がり)
反対へ上げる手にもいる勇氣
勝美
(反対へ上げる手首にもいる勇氣)

反対の声もじっくり聞いてみる
同

反対の色が似合った衣替え
同

反対のポーズの裏で袖の下
みつる
あまえてるくせにすねてるポーズする
同

(すねているポーズでまんまとあまえてる)
人民が警察官を監視する
同

(民衆が警察官を監視する)
反対の為の反対する依怙地
凡太
反対といつて反応待つゆとり

反対の為の反対行き詰まる
照子
(反対の為の反対切れる)

反対に会うて出世の道がつき
同

反核の焰惜しまぬベンが芽え
あや子
反骨の音が聞こえる座り込み

不運にも反対から来た暴走車
保子
反対へ意見は述べず手を上げる

反対も何も婚前三ヶ月
同

風見鶏反対運動馬耳東風
キミ
反対を生きがいにして天の邪鬼

反対はするが正論持たぬ奴
ちよ
反対の意見見逃したため

反対に老後の事を意見され
克子
反対は「イエス」と顔に書いてある

聞き倦きた代案のない反対論
紀雄
反対の意見抱いてる軽い咳

反対のころ転がすペンの先
同

ある打算反対理由の中に置く
同

反対に回せば恐い味方あり
忠廣
反対も計算済みの策を練る

反対を進行の糧とするゆとり
同

反対をしたくはないが親ごころ
さと美
簡潔に日本表わす赤と白
同

また何か反対をする人の列
小愛
反対の武器も多勢に役立たず
同

反論をすることわざを選っている
同

一応は反対も言う老婆心
武水
相手側に立つと反対よく解り

柔和と剛馴れた夫婦の処生術
同

一応は反対それから考える
やすお
反対に反対が出て纏まらず

堂々と反対出来ぬ宮仕え
同

反対と叫んでいればよい野党
同

娘の縁談何時も反対する夫
よ志子
デモクラシー権利と反対つきまとう

(デモクラシー権利と反対つきまとい)
おとなりと反対側に勝手口
志津
反対を楽しんでるよな反抗期

値上げいやストもいやです反対です
同

題一追うー7月20日締切(9月号発表)
宛先 岡山県倉敷市下津井一―九―三四
本田恵二郎

中村ゆきを氏(神戸市)より
金一封頂戴いたしました。

お礼申し上げます。

川柳塔社

柳界展望

集録・板尾岳人

★新京都社創立5周年記念誌上川柳大会

結ぶ 前田芙已代選

予言 石森騎久夫選

立つ 岸本 吟一選

灯 泉 淳一選

雑詠 堀 豊次選

締切り・7月10日

各題別紙で各句・雅号・住所を明記の上左記へ

投句先・京都市中京区姉小路通柳馬場西入・川柳新京都社。

★第七回神戸川柳大会

日・7月29日 午後1時

所・婦人会館大会議室(湊川神社西門前)

染める 寺内 富喜子選

学生 赤井 花城選

守る 池田 南岳選

窓 藤本 静港子選

積む 小松原 爽介選

岸 去来川 巨城選

神戸点描 橋本衛門七謝選

出句締切り 午後1時50分

★ふあうすと川柳社第29回

全国川柳作家年鑑参加作品

公募

句稿 Ⅱ姓雅号、年齢、職業

郵便番号、電話番号、府県

名、住所、作品7句を記入

参加費三千円。作品と同封

又は振替使用

締切 Ⅱ7月末日・発行10月

下旬。投句所 Ⅱ明石市松カ

丘一丁目2-6-181

正谷柳筑使宛

★川柳はこだて第26回花童

子賞

入選者及び入選作品

平野半七氏

親を呼ぶプランを妻が練つ

てくれ・風邪で寝て我が家

の音に居る安堵・遠回りし

た人生を懐かしみ

★昭和58年度ふあうすと賞

作品と入選者及び紋太賞作

品と入選者

●ふあうすと賞

ひとり死すさだめえにしを

置き去りに 山口鐵三

どれほどを生きたと言うか

途を指す 小田二十貫

核家族塔の高さを言わずお

くかなもりかず枝

小便小僧も私も職をもつて

いる 加藤さよと

●紋太賞

どこでどう生きても通う地

の温み 阿野文雄

人間不信手をつないでは放

しては 嘉数兆代賞

泣くたびに美しくなるさく

らんば 門脇かずお

葉書一枚深い心が見えてい

る 松本 環

★武田節で知られる山梨県

甲府市に巨大な九人の合同

句碑が出現した。九人の一

人に東野大八氏の「友あり

き風林火山の旗のもと」と

いう句も刻まれている。

▽お便り△

■先日京都行の途中姫路近

くの新幹線で地震に遇い、

トンネルに三時間詰りになり、

洛北を案内されてすばらし

い一日を過しました。

(水粉 千翁)

■川柳川柳の毎日をごんじ

がらめた余生を「いずも」

の編集にのろろ運転を続

けている今の頃です。

(尼 緑之助)

■全日本川柳大会が終了ば

すぐに又若人忌川柳大会で

す。大会へのお願いは小林

由太香会長よりあると思ひ

ますがよろしく。

(森田 熊生)

■全国初の川柳列車は地元

のテレビ、新聞等の全社が

取り上げてくれましたので

所期の目的は果たしたよう

で、今後も紅葉狩り川柳列

車や、わらび狩り川柳列車

(堀江 芳子)

■むらぐも観桜35周年句会

ほんとうにお世話さまにな

りまして、おかげさまで無

事盛會にさせていただきました。

した事を感謝いたします。

(本多 洋子)

等をお組んでおりますので御

支援のほどを。

(両川 洋々)

■5月号「あらいの弁」

とても真面目な真摯な御意

見だと思ひます。言葉のあ

そびに終ってしまつたり、

一人よがり感傷に陥つて

いたのでは、安っぽい艶歌

と言われても仕方ないでし

よう。女性同人の一人とし

て心しなければと。

(本多 洋子)

社 告

香川酔々氏死去により川柳塔賞選考委員が欠員となつていましたが、六月の常任理事会において次のとおり選任されました。

川柳塔賞選考委員 板尾岳人

■ストレスをなくするのが一番、ではストレスをなくするにはどうすれば、せいぜい作句に没頭することが必要なかも知れません。

(中村ゆきを)

■同人の列に並ばして頂きありがとうございます。精進して自分の句を吐くよう努力しなければと。

(林 荒介)

■女性川柳教室で勉強していたら新聞社より取材があり朝日柳壇が六月から出来ます。

(林 瑞枝)

■「世界の願いは交通安全」の精神をつらぬく目的で、全山陰の交通安全の川柳大会を提唱して17年、その後大会は4年おきに開き「交通安全」が倉吉打吹川柳の

看板となったが、来年はぜひ開催したいと考えている。

(奥谷 弘朗)

▽消 息△

★河野春三氏(高槻市)は

六月二日、脳軟化症加療中の病院で咽喉の痰が切れず死去。翌三日、高槻市城北町の浄因寺で告別式が執り行われた。本社からは橋高薫風氏がお見送りした。故人は、岸本水府氏と親交があり川柳雑誌の編集部に在籍されたこともある。氏はまた、俳句性や川柳性を探求した上で、短詩は本質的に無性論であるべきだとの短詩無性論を提唱した革新派の元老であった。行年八十三歳、謹悼。

★誌友浜田儀一氏が5月9

日大阪大楠病院にて死去、柳友多数が葬儀に参列。

▽句会案内△

■卯の花句会

時・7月18日(水)13時

所・高槻市民会館3階和室

題||再会・水・頼む

■東大阪川柳同好会

時・7月28日(土)夕6時

所・社会教育センター内

題||忘れる・看板・割勘・返還

■南大阪川柳会

時・7月19日(木)夕6時

所・寺田町 高松会館

題||財産・辞書・ずれる・前進

■南海電鉄川柳会

時・7月19日(木)夕6時

所・南海会館内南海電鉄(株)本社地下食堂

題||駐輪場・靴・涙

■西宮北口川柳会

時・7月9日(月)13時

所・西宮中央公民館

題||乾く・口笛・自由吟

■菜の花句会

時・7月10日(火)夕6時

所・八尾神社内西郷会館

題||頭・扇風機・返事・消

■富柳会

時・7月19日(木)13時

所・富田林市中央公民館

題||雑魚寝・正直・散髪

尾藤三柳編

川柳総合事典

定価 5800円(千400円)

質量ともに江戸時代の川柳を凌駕する近代の川柳文芸。その内容を集大成し、体系化した総合事典。(6月25日発売)

〈体裁〉・A5判上製函入り

・総頁620頁(口絵16頁)

〈構成〉

・口絵(目で見る川柳文芸の歩み)

・序説(新川柳の史的概念/新川柳概史)

・項目解説(人物、結社、柳誌、著書、エッセイ、流派・様式、文芸用語その他約一千項目)

・付録(主要柳誌一覧、マスコミ川柳一覧、海外川柳の概況、旧大陸川柳の概略、主な川柳賞・年表)

・年表(江戸川柳略年表、近代川柳史年表)

・索引

千102 東京都千代田区富士見2-16-19

雄山閣出版

★ご希望の方は川柳塔本社にて斡旋致します。

新同人紹介

宮崎 シマ子

―菜・薫風・あいき推薦―

中国 上海・蘇州・桂林 吟行の旅

悠久の歴史と広大な国土、日本とつながりの深い中国、その魅力は大きく、また深い。この旅行では国際都市上海、水の都蘇州、幻想的な景勝地桂林を訪ねます。

9月24日(月)～9月29日(土) 6日間

お1人(全食付・添乗員同行) ¥215,000円

(申込金……1万円)

※他に海外渡航手続費用、中国入国査証代、損害保険費用が必要です。

■ 第1次申込メ切…7月20日 ■ 第2次申込メ切…8月10日
■ 定員…25名

		発着地・スケジュール	食事・宿泊地						
1	9月24日(月)	午前 大阪空港集合 昼 大阪発(2時間30分) 午後 上海着	<table border="1"> <tr> <td></td> <td></td> <td>機</td> </tr> <tr> <td>上</td> <td>海</td> <td>泊</td> </tr> </table>			機	上	海	泊
		機							
上	海	泊							
2	9月25日(火)	午前 上海市内観光 午後の列車で水の都蘇州へ 蘇州市内観光	<table border="1"> <tr> <td>B</td> <td>L</td> <td>D</td> </tr> <tr> <td>蘇</td> <td>州</td> <td>泊</td> </tr> </table>	B	L	D	蘇	州	泊
B	L	D							
蘇	州	泊							
3	9月26日(水)	午前 蘇州から上海へ 午後 航空機にて桂林へ	<table border="1"> <tr> <td>B</td> <td>L</td> <td>D</td> </tr> <tr> <td>桂</td> <td>林</td> <td>泊</td> </tr> </table>	B	L	D	桂	林	泊
B	L	D							
桂	林	泊							
4	9月27日(木)	1日中 漓江下り(約8時間)	<table border="1"> <tr> <td>B</td> <td>L</td> <td>D</td> </tr> <tr> <td>桂</td> <td>林</td> <td>泊</td> </tr> </table>	B	L	D	桂	林	泊
B	L	D							
桂	林	泊							
5	9月28日(金)	午前 桂林市内観光 夕刻 航空機にて上海へ	<table border="1"> <tr> <td>B</td> <td>L</td> <td>D</td> </tr> <tr> <td>上</td> <td>海</td> <td>泊</td> </tr> </table>	B	L	D	上	海	泊
B	L	D							
上	海	泊							
6	9月29日(土)	朝 上海発 昼 大阪着	<table border="1"> <tr> <td>機</td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	機					
機									

※機…機内食、B…朝食、L…昼食、D…夕食です。

<申込先> ●川柳塔社…大阪市阿倍野区三好町2-10-16
ウエムラ第2ビル Tel 06-629-6914
橘高薫風宛

<取扱旅行社/日本交通公社>

主催 川柳塔社

遠山可住川柳句集

「ふろんぼ」出版記念本社六月句会

6月7日(木) 午後6時・なにわ会館

今月の月間賞は芳地狸村氏が獲得。

(史好記)

(受付—与呂志・重人・敏)

(進行—天笑) (記録—射月芳・健司)

遠山可住さんの句集出版をお祝いして、地元川柳ささやまから大挙十二名のご出席。熱烈歓迎の大きな拍手で記念句会の幕が開く。
おはなしは前月につづき榊主幹。
「可住さんは本名を岩夫といわれ、名は体を現わすと言うが「いわを」という名は本当は人間がやさしいのです。私も西尾巖だから、序文を書くに当り句を全部読ませて頂いて感じたのは、人生の記録を五七五のリズムに乗せておられる。その意味で川柳はたしかに記録とも言えるだろう。」

弱い子があり人參の種を播く
恋人は居らず桜の木にもたれ
何をする人か巡查と笑いあい
扇風機味付のりを吹きとばし
壁下に先祖の飲んだ酒のつけ
冬を越す虫へ落葉のあたたかし
やさしい思いやりと、うがちが可住川柳の魅力である。川柳は片肘張ってむつかしく作ることはない。楽しく川柳を作ろう。」

出席者—与呂志・雀踊子・可住・千秀・千代三・天笑・月子・只士・白溪子・潮花・鬼遊・武庫坊・年代・水客・形水・幸・太茂津

三男・悦郎・覚然坊・重人・敏・岳人・英子
越山・笑女・紫香・勝美・みつ子・文平・靖子・森脇和子・とみ子・千寿子・春蘭・素水

喜風・三十四・柳伸・百合子・ひか平・はつ絵・いわゑ・萬的・蕉露・洋敏・米朝・史好

郎・金太・泰子・富士子・藤子・寿美・凡九郎・薰風・規不風・柳宏子・ゆう也・智子・節子・射月芳・葉子・登志代・狸村・正坊・美房・白兔・頂留子・美代子・健司・度・寿子・冬葉・楓葉・二三・文秋・赤木和子・吸江・緑良

席題「ランプ」 辻 白溪子選

山小屋のランプが語りつくどドラマ
アラジンのランプが揺れる風の夜
ランプのような灯りが点いた無人駅
ギヤマンのランプで立派な美術品
開拓の苦勞染みてる古ランプ
すばらしい出会いがあったランプの灯
もみ手する顔がランプの値を上げる
山小屋のランプへ民話ひき戻す
森脇和子

ランプ吊る家に民話が生きている
ランプ時代憶えば日本も豊か過ぎ
SOSランプが消えた山の小屋
もう点かぬランプが蚤の市で売れ
思い出のランプかなしい詩がある
ランプの灯に女の嘘はみくびられ
息子の代になってランプは捨てられる
山小屋のランプは月に負けている
写真用ランプを窓に山の宿
ランプまだ旧家の隅に釣ってある
ランプの灯目当てに霧の中歩く
山小屋のランプは暗い方よい
アラジンのランプが欲しいサラ金苦
おしんにも勝る哀史のホヤ磨き
ランプのホヤにおとき斬がぬむって
寝室はムード派らしくランプ型
ランプ型のシャンテリアでよし山の家
山の湯に生きたランプの灯がゆれる
海猫のうたがランプをとり囲み

藤子
千秀
洋敏
悦郎
泰子
英子
吸江
正坊
千代三
只士
年代
智子
水客
萬的
文秋
形水
三十四
蕉露
柳伸
寿美
三男
白兔
武庫坊
天笑

ランブこすって出て行け核よ日本から
 ランブの灯だます言葉が美しい
 ランブ消しキャンブファイヤーの輪に戻る
 水割りに写るランブが揺れ沈み
 荒れた海ランブが波間に浮き沈み
 烏賊を釣る船でランブの灯が揺れる
 がらくたの店で探して来たランブ
 若者に不思議ともてているランブ
 改札でつんのめつてる赤ランブ
 ランブともしてべら釣の舟背が出る
 消えてゆくテールランブにあるドラマ
 事故防止ランブおこったよう光り
 山の宿ランブが照らしているやもり
 豪邸へ趣味を生かしたランブ置く

兼題「遠い」 西山 幸選

越山 敏
 笑女 柳仲
 潮花 潮花
 洋敏 度
 萬人 重人
 葉子 千代三
 白漢子

遠くから届いた文に波の音
 潮騒が遠く聞えていた訣れ
 トンネルの出口遠くにある灯り
 絵葉書の遠い国から暮れてゆく
 遠くからあかへんでもしてやろ
 成功へ遠いが汗をほめておく
 遠くから見ている妻の目が怖い
 煌めいて海は惑いの身に遠い
 遠方へ飛んでゆきたいしゃぼん玉
 卒業は遠い昔の桐の木よ
 三日月の淡い白さに遠い人
 遠回りしながら木偶の旅つづく
 紅顔で出たふる里に遠くいる
 遠くなし二十一世紀はそこに
 遠花火大宰治も青春も
 喝采の遠い記憶がよみがえる
 少年が無口になった遠い道
 遠い矢が一番痛いところを突く
 かくれんぼ遠い昔の樹の影に
 妻の留守遠い記憶でめしを炊く
 遠い道驥一匹の中に居る
 遠花火泣かぬ女になりました
 太郎も花子も遠い昔を懐かしむ
 遠くからみる満開が美しい
 そう遠くない片道切符もっている
 遠い遠くにデートリッヒの足
 心とは遠い言葉で口にする
 米びつが満ちて闘志が遠くなる
 さくらんぼ色づき遠いひと想う

紫香 柳伸
 泰山 岳人
 美代子 緑良
 只士 太茂津
 武庫坊 史好
 はつ絵 寿子
 三十四 楓楽
 赤木和子 水客
 健司 美房
 健司 健司
 鬼遊 鬼遊
 ひか平 雀踊子
 水客 水客
 泰子 節子
 千代三 千代三
 水客 楓楽
 幸

兼題「道」 辻 文平選

ふろんぼの道に落ちてる子守唄
 真実の道は悩みの底にある
 人生の道連れ一緒に死ねず
 裏道を歩きとおして嘘に馴れ
 残り火のふたりは道を踏みはずす
 道ならぬ恋に悲劇の幕があき
 片道の切符であとを追いかける
 更生の道だよ楽なはずはない
 ひと筋の道しからぬ夫の靴
 送り火へこれから遠い道になる
 知恵の輪が解けて明るい曲り道
 逃げ道を先に女は教えられ
 不可能へ挑む男の出世道
 自叙伝に書く茨の道となる
 プライドが邪魔をしている廻り道

太茂津 滋雀
 綾珠 墮駄
 登志代 喜風
 年代 文秋
 笑女 雀踊子
 はつ絵 靖子
 悦郎 蕉露
 とみ子

〈新刊〉
 時実新子著
 時実新子一萬句集
 定価 三八〇〇円
 送料 四〇〇円
 発行所 木 木 社
 〒160 東京都新宿区西新宿7-17-14
 G5 プラザ新宿705
 TEL(03)361-3828

遠回りしてきた道で戻れない

横道にそれて噂が走りだす

道草をしてから出来た人間味

引き返す道はもうない古稀の宴

塩道を踏めば重荷がのしかかる

今日からは二人で一つの道を行く

妻子捨てても男が選ぶ道がある

視野少しひろげて道が見えてくる

抜け道へ誘って女小賢しい

宝くじ当ると道が狂い出す

凸凹の道が夫婦を深くする

でこぼこの道に落ちていた情け

熟年へいばらの道が追いかける

まわり道方程式がまたとけぬ

極楽へ行く道ですと鐘の音

逢うて来た余韻揺れてる帰り道

花の香は夜道をさらに深うする

逃げ道が風の行方のなかにある

逃げ道を作る女の目が赤い

一筋の道を極めて来た無口

一本道なら迷いはしないものなの

殻を脱ぐ男の道に詩がある

目標が出来ると一本道となる

ママの香に触れたく回り道をする

道ならぬ愛に疼いている夜明け

兼題「踊り」

北山越山選

智子

柳伸

緑良

美代子

とみ子

敏

可住

水客

太茂津

蕉露

いわゑ

赤木和子

とみ子

冬葉

越山

ゆう也

年代

寿子

只士

寿美

白兔

寿子

天笑

千代三

文平

はつ絵

精進の鬼国宝となる踊り

鹿鳴館足の短かき娘もワルツ

伊豆の踊り子に逢えそうなひとり旅

間違えたままで覚えてた傘踊り

冗談も言えぬ男が踊らされ

断末魔を海老の踊りとみる酷さ

ほうふらの踊り時間を止めて見る

床が今にも落ちそうなフラメンコ

手踊りをしても踊りの輪に入れず

ねぶた祭踊りに遠い動きする

豪壮な祭り鞍馬の火の踊り

踊り忘れた民は戦をしたくなる

家元のさす手引く手へきびしい目

化粧したヒエロが踊るから哀し

盆踊り河内娘は尻を振る

ばか踊りする目は決して笑わない

盆踊り去年は元気だった人

ふるりのころに触れる踊りの輪

帰省した娘にほれこんだ盆踊り

生真面目に踊り疲れた椅子を去り

踊らされ踊って善人かも知れず

戦勝のラジオに踊った日の悪夢

ドサ廻り踊る小猿に養われ

老いらくの恋は動悸も踊らない

サンバ沸く神戸はリオの色となり

白魚に怒まれながら踊り食い

三の糸切れて踊りの手がとまり

はつ絵

千代三

悦郎

悦郎

悦郎

射月芳

美房

千代三

蕉露

水客

悦郎

可住

重人

緑良

三十四

楓楽

月子

萬子

素水

ゆう也

与呂志

三男

メ女

耕花

どんたく

幸一

蕉露

いつしらす悪魔の笛に踊ってた

扇子一本踊る構えの腰を引き

お師匠の扇子の先にある踊り

踊りならもつときれない脚がある

踊らされているとはロケット思わない

満点の背中で踊るランドセル

若返える踊りにアレキなど利かぬ

竹人形に踊りの心おしえられ

唄うから踊れと仲の良い夫婦

兼題「城」

遠山可住選

ワンカップ何処においたか妻の城

城下町時計も眠っている動き

古城とはさみしきものよ鳥が啼く

我が城のゆとりが見える花鉢

わが城へ今日の疲れの靴を脱ぐ

落城の女は胸に琴を抱く

デカンショに古城の松も踊らされ

大阪の誇りを捨てぬ天守閣

城ぐるり回ってはまだ口説けない

子に残す城にロインと共に住み

城と言う程でも無いがくつろげる

ゆう也

一二三

可住

ひか平

水客

文平

ひか平

水客

越山

耕花

滋雀

紫香

文平

素水

静歩

越山

笑女

一二三

ゆう也

英子

吉田笑女さん(宝塚市)から
金一封ご寄贈いただきました。
厚くお礼申し上げます。

川柳塔社

落城の叫び赤色の天守閣
篠山の城跡に居る無鬼の影
平穏無事天守仰いで深呼吸
お城跡フアーストキッスしたところ
城址に残る小判の出る話
觀光のバスだけ止める城になる
城跡に堀の碧さが悲しすぎ
入陽映えて饒天に向く
先ず城を見上げカメラの位置につく
わたしの城に二重の濠をめぐらそう
父の城女の影にくすれたり
城持ってみて世渡りのむつかしき
城のある町で男は死ぬつもり
一つずつ積み上げてゆく母の城
古い唄抱いて城址は暮れ残る
家族みな個室にこもる砂の城
石高をまだ自慢する城下町
落人になる抜け穴が城にある
城下町いと丁寧にお辞儀され
觀光課お城まつりのほかはなし
カメラアイお城なかなかつかまらぬ
わが城を支えて呉れる薄化粧
明け渡す城に雑巾置いてゆく
築城の秘密洩れない水がある
男の夢城を墓標にして眠る
城跡で今朝も出逢ったお年寄
落武者の影が城跡離れない
かりそめの城と思えど花の種
落城の歴史へ重い陽が落ちる

武庫坊 与呂志 三男 重人 蕉露 凡九郎 滋雀 森臨和子 森臨和子 幸 与呂志 重人 智子 文平 水客 楓栗 楓栗 雀踊子 柳宏子 鬼遊 敏 年代 緑良 萬太 金太 千秀 水客

見おろされることが嫌いな天守閣 可住
兼題「とろろ(芋)」 黒川紫香選
とろろ芋ギョクリ腰が顔を出し 静歩
とろろ芋擦る程指が痒くなり ノブ
山の土産に自然薯提げて友が来る 幸一
音立てとろろをすする囲炉裏ばた どんたく
イノシシに会った話もしてとろろ 耕花
とろろ芋捧げ銃してバスを降り 千秀
もう一品出番待ってとろろ芋 千寿子
すり鉢のとろろにやさしい母がいる メ女
口髭がもてあましてとろろ芋 千秀
でかんしよの駅で待ってとろろ汁 与呂志
とろろ汁まだまだ続く長い旅 勝美
とろろヌルヌル女は意地悪な 史好
気の弱い男が好きなのとろろ汁 岳人
年寄が飯のお替りしたとろろ 白漢子
とろろ芋昔のことを言いたがり 史好
搦り粉木のリズムが軽いとろろ汁 狸村
嫁姑いたわり合ってとろろそば みつ子
実家帰り母のとろろに甘えきり 月子
恩師今とろろうまそうにうまそうに 越山
おかわりを一寸気にする客のたろろ汁 三男
亡母のした通りに娘とろろ汁 蕉露
今夜はとろろすり鉢の縁持たされる 登志代
掘りあてたところが土産となる夜汽車 節子
転校の子だけが知ってたとろろ芋 一二三
とろろ汁とても哀しいにぎり箸 吸江 英子

とろろ汁お替りでつかと念を押す 三十四
好物のとろろに茶碗が小さすぎ 寿美
すこし煽てられてとろろすつて 柳伸
バスで来て丹波土産のとろろ芋 潮花
ふるさととは山百合の香とろろ汁 はつ絵
体調を気づか母のとろろ汁 一二三
出世した男の好きなのとろろめし 英子
優しさに溺れてしまつとろろ汁 赤木和子
むぎとろろに夫婦で座る通り雨 水客
宅急便父の字で来たとろろ芋 天笑
とろろ汁ある日絆がゆるくなる 文平
月とろろにふる里のうた亡母の唄 金太
お喋りな妻とあかるとろろ汁 文平
平凡なくらしに合ったとろろ汁 狸村
ふる里の月は変らずとろろ汁 紫香

NHKテレビ全国ネット放送

『よめやうたえや川柳天国』

第4弾

日時 8月21日(火)午後8時から50分間

選者 森中恵美子・橘高薫風その他川柳塔から大勢協力出演します

☆前回に劣らぬご支援をお願いいたします。



締切毎月末。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。

整理・板尾岳人

にた川柳会

西村 早苗報

口実はどうであらうと歩が悪い
嫁入りの道具の一つ免許とる
年輪へ捨てた故郷の詩情恋う
さまざまなスターが脱いてたのしませ
解くことは出来て結べぬ太鼓帯
楨山の貨車は積み残しなどしない
根掘り葉掘り聞いて名医の診断書
のし紙を書いてお金も包まされ
甲乙丙その中丙が出世する
手拍子に追いたたてられて妥協する
世は平和老人ホームもプロポーズ
悪友と悪女が企む四月馬鹿
店じまい変なチラシにだまされる
落ち椿一つの思いが捨て切れぬ
こつてりと絞れる自信が父に無い
純情な方ねと女不服そう
千羽目の折り鶴にある祈り
なごやかな茶の間明るくする笑い
口紅を気にカステラを少し食う
嫁いびり今日はせぬ気の花まつり

きみえ 独 仙 孝 華 登美也 幸 一 多 賀 子 榮 夢 醉 由 郎 裕 巡 歩 景 子 宗 光 寿 美 子 花 子 雀 踊 子 弘 朗 早 苗 雄 々

月おぼろ影はやつぱり二つ置く
川柳塔からつ 浜本 義美報

紫 叻 虹 汀 素 石 正 敏 四 郎 朴 竜 多 々 子 高 明 広 幸 勝 一 盛 雄 常 善 彩 女 多 祢 多 祢 義 美 松 風 報

倦きもせて金婚迄の捕手投手
峠越え雲に心をのせてみる
教養を貧乏神は恐れない
トップへの距離を読んてる出勤簿
道草は喰わず弛まぬ牛歩幅
空いているレジへ廻って手間をと
幼ないの度胸だめしは夜の墓
三十三間堂大宮人の的場かな
子供の日苦手な馬になって這い
水泳は苦手水着は派手にする
女房の角が苦手の朝陽り
算数は苦手宿題母を待ち
来年を約して今日の花吹雪
テールに若鮎おどる山の宿
腹割るも割らぬも善人馬鹿をみる
武者轍五月の風に胸を張り
川柳高知 川竹 松風報

一 二軒寄り道をした酒の酔い
最後には人情論でけりがつき
二次会の分まで立てたスケジュール
アルバムはまだこの頃は夢があり
自画像をさてどの色で仕上げるか
自立する夢に亡き父生きている
旧姓にひとつの秘めた過去を持つ
ストレスの解消の長電話
もの忘れだけが容赦もなく進む
女神にも鬼にもなつて子を育て
戦いは常に暗号文があり
灰皿に溜まる秘密がおそろしい

再婚をしない女にある秘密
派手を着て秘密は帯に固く締め
幕場まで秘密をもつて逝つた母
川柳しんぐう 川上 深水報
温泉へ孤独を捨てての寡婦の旅
湯煙へ少し乱れてみる女
ホケかけた脳温泉の和やかさ
ブレンテされて二人でゆく出湯
温泉で冷えたところをあたためる
行間へ愛を覗かすテクニク
貧しさを出不ましい母のテクニク
テクニクなくとも桜きつと咲く
テクニクなどはいらない金で済み
善悪の真中歩くテクニク
哲学の講義いびきが返事する
哲学を極め悪妻持て余し
哲学の中途半端が死にたがり
哲学を笑い飛ばせる子沢山
哲学を論じて脛をかじつて
漫画読む子の顔が素顔かも
漫画ならここで正義の味方出る
子の叱る親が漫画をかくし読む
主人公の瞳は輝いている漫画
ドジな妻居て毎日がマンガです
倉吉川柳会 渡辺 善句報

飛び立つて部屋に残した子の匂い
飛ぶ鳥を落した人が墜つ波紋
使われて道具にされた停年に
計画で人落す穴俺が落ち
断りの道具に母の口上手
刃を渡る独楽中心を失わず
三 吉 竹 萌 松 風 忠 雄 武 雄 豊 太 三 男 登 志 代 ま さ 子 輝 子 博 代 雀 踊 子 十 郎 勇 太 爾 ミ テル ミ 喜 子 富 子 昌 子 大 輪 溪 水 柳 風

衣食住足つて悪書がよく売れる
 計画が空回りする若さです
 職人の恋人めいた道具箱
 水も漏らさぬ計画に雨が降る
 空席にビニール本が置いてある
 何時の世も飛び道具とる卑怯者
 計画の弱さ破れた蜘蛛の網
 飛び回る男の抱いた不発弾
 出勤に七つ道具を持って出る
 飛び夢は今も見ている墓の背な
 針道具女の秘密あえている
 無計画ぬる紅茶を飲まされる
 人妻に会う計画のサングラス
 道具屋のきたない壺が百万円
 酸欠死したくないから飛んだ毯
 飛び羽根を持たぬ駝鳥はよく走り
 赤い舌ひらひらさせて飛ぶ噂
 長安の砂がしきりに飛んでくる
 壺の中心にんげんが活けてある
 脱サラの構えじっくり練っている
 飛び夢があつてみの虫ぶら下り
 あと何年したら毎日日曜日
 線のどこを打つても中心になり

ハワイ川柳ウイロー社 市岡

宴會に話は野暮だ唄いましょう
 宴會のアロハ気分が馬が合い
 宴會も負担に思う八十路かな
 カレンダー宴會続きで吐息あけ
 宴會でお困詠りの花が咲き
 宴會で数年振りの手を握り
 宴會は幹事の腕の見せどころ

松女 宴會で友情温め飲みかわし
 阿秋 宴會で顔の皺だけ眼にとまり
 千秋 新年会三日四日と未だ続き
 まさる 宴會の楽しさこわすからみ酒
 観洋 宴會で竹馬の友と語る幸
 車楽 来賓の代表となる歳となり
 秋人 宴會もおつくうに成る年重ね
 弘朗 京都塔の会
 民子 埒もなく喋りセールストアを閉め
 荒介 山茶花の蕾去年のまま残り
 ゆり子 大ろうそく風が燃えている稲荷山
 瑞枝 ころもで降れば一度逢いたい雪女
 御前 蝶々の道案内で魔寺跡
 紫泉 過ぎ去ればとかくきれいな彩になる
 雄々 おみくじを見てから過去を語り出す
 碧水 背信のうずきへ女は襟合わす
 文子 遅桜縁遠き娘を頼まれる
 千代 その昔こころ蛙がいた団地
 三結 春愁や蛙も大きなあくびする
 独歩 菜種梅雨駆込寺でみた蛙
 秋女 飛び込んだピココンにらむ雨蛙
 石花菜 飛び込んだ音と老いやせ蛙
 菩句 ほんやりを気づくと老いが楽しくて
 公女 灰皿に夢を残して故郷をたつ
 拝山 日本のメルヘン灰で花が咲き
 秀山 練炭の灰の穴にも夢がある
 晩舟 話よりタバコの灰が気にかかる
 虹青 線香の灰へ未練が断ち切れず
 万里歩 稲の出来蛙が守るように鳴く
 高原子 五十銭を見つけてくれた灰篩い

松川 杜的報

著生 多情仏心灰になるまで火をくぐる
 張賀 川柳だけはら
 紅賀 ランドセルおきたいけれどうれしいよ
 梨花女 おともだちできたあきみのしいよ
 三十四 四年生ローマ字だつて習うんだ
 十吉 春の路アリのぐんたいかわいいな
 香夢女 先輩の眼が気にかかる中学生
 思つてもやれないことだとあきらめる
 先生も涙を見せた卒業式
 来年は受験でフワフワしておれず
 進学をひかえてオフの放送部
 極楽はひかえての如しや牡丹寺
 バースデーまだイバルに負けられぬ
 凡夫婦春夏秋冬泣き笑い
 諦めたはずへやつぱり欲がでて
 春闘のバッジを子等が欲しがりぬ
 勿体ない無事に迎えた朝である
 幸うすき家内が踊る花の下
 自問自答三猿主義に徹すべし
 大役を果したあとの身軽さよ
 それで良いの五月の風がそのかす
 遅太てす目一杯上げをする
 初めての任地カモメに迎えられる
 少年非行きつと何かに飢えている
 雲一つ無しお祝いを申し上げ
 幸せにとつぷりつかつていた不覚
 青春のかん詰開けるすべがない
 水切りの音もはずんで春袂
 緑の陽へしばしまどむ昼下がり
 極限に生きる男は愚痴らない
 作品にとどめは刺さぬ句詠点

水客 菅居報
 小一はるみ
 小一あきみ
 小一純平
 小一方昭
 小一仁昭
 小一亜貴子
 小一恵子
 小一紀
 小一愛
 小一居
 小一純舟
 小一比呂子
 小一蘭幸
 小一房子
 小一静水
 小一笑子
 小一頼子
 小一淑子
 小一令子
 小一節夫
 小一酉合
 小一路子
 小一康子
 小一博子
 小一貞子
 小一シゲヨ
 小一美佐雄
 小一かつこ

がんばるぞ50歳(柳暦)

まだ青春だ!!

水客・紫香・潮花・萬的の一寸変わった吟行

私達4人、故麻生路郎先生の門を叩いてや
つと50年。まだまだ先生の遺訓を抱いて頑張
ります。どうぞ吟行・投句に参加して私達の
尻を叩いて下さい。

★近江八幡めぐり (八幡城跡・村雲御所・水郷巡り)

日…7月16日(月)雨天決行

午前8時50分・大阪梅田阪急三番街バスセンター
集合・9時出発

会費…8,000円

申込…〆切6月30日(50名まで)

句会…なし(但し吟行句バス内にて投句受付)

★特別課題 一般募集

—水府・潮花・紫香の喜寿を祝って

「三人」 3句 西尾 栗選
「喜」 3句 正本 水客選

□他に祝吟1句、吟行に参加するしないに
拘らず投句して下さい。

□投句料 300円(切手可) 〆切 7月16日

□吟行申込受付及び投句先

〒661 尼崎市武庫荘5丁目25-17

春城 武庫坊 TEL.06-431-1152

主唱 西宮北口句会 京都塔の会

後援 川柳塔社

一件落着気分を変えろお茶を汲む
春うらら化粧も少し変えてみる
気分屋の顔色覗く頼み事
妻の気分で鈍子がふえるうれしい日
それなりの苦勞を背負う蟻の列
苦勞した昔の一つ一つにある未練
苦勞してこんな些細な涙金
子ができぬ嫁がやさしくしてくれる
苦勞なでけり忘れて亡夫を恋い
小石かど苦勞ふまれたりけられたり
苦勞して子に背かれる日が近い
社長から苦勞様をじんと聞く
売れっ娘のモデルが耐える美容食
軽食にしとこうあとは飲む子定
パンコーヒ我が家の朝はマンネリで
どん欲なカマキリ軽食など知らず
軽食で済ますつもりへ酒が出る
ころころとよくも上手にウソが言え
三転車ころころ路地の奥で泣く
お天気屋らしいころころ気変わる
ころがったお金そのまま釣りを出し
住所録友がころころ抜けてゆく
十字架が光ると善人駆けてくる

駒つなぎ川柳会

里 小路報

虎キチへ妻中毒と目をつむり
電話口胸まで下ろす無事な声
逆さ絵のなぞが解け出す夜半の月
血眼の噂浮べてティールカッパ
相手変えて中毒になるフルムーン
今夜こそ落城させる胸算用

智恵子
ハル子
章久
冬葉
滋雀
凡子
慶三
あいき
凡九郎
千代三
雅風
公一
律美
寿美
晴風
妙子
ものぶ
白兔
文秋
静子
春蘭

喜美子
山久
雀踊子
重人
智子
庸佑
金太
覚然坊
柳伸
頂留子
喜風

この足で駆ける夢見る車椅子
合格に希望の夢は駆け巡る
駆けてくる少年の瞳澄んでいる
茶柱へ気分よく出る朝の靴
気分よく騙されているシャンデリア
良いことがあるので花を買いにゆく
気分よく飲んでいるのに電話ベル
殿様になった気分の旅の宿
霧間気が良いので常連さんとなり
ハミングが出る早起きの窓を開け
その時の気分次第という返事
ささやかな気分日の出に掌を合せ

涙もろうなつて家内が気を使う
南大阪川柳会
中川 滋雀報
清水
恒明 楓 榎
信治 恒 榎
千里 信 榎
浩二 信 榎
只士 信 榎
勝美 信 榎
好一 信 榎
久子 信 榎
真砂 信 榎

マンションもあげると女から離婚
血眼で探す姿を見た噂

女傑にも涙ありますほつれ髪
中毒の汚点が消えぬ老舗の灯

即答を避ける女傑を信じよう
胸の内百も承知の無表情

氣にいらぬ書類逆さに判を押す
血眼になった日もある青い恋

女傑にもあつた哀しい離婚歴
逃亡の切符はアル中行きとある

冗談で済まぬぞ胸のわだかまり
逆さまに尻を叩いて呑み足らず

血眼の男で足をすくわれる
涙つば干した女傑の束ね髪

マルクスの中深らしい赤い書架
海女の胸海の毒さの息をため

春の野辺逆立ちしたいリズム持つ
血眼になろう浮世が面白い

女傑ちと酔うてボツボツ話す過去
中毒になるほど飲んだめでたい日

胸のうち知っているから無視をする
逆さまに見ても地球は丸かつた

鏡には写す氣のない血眼で
やがて逆になる切札をあたためる

アル中が小銭の音で目を覚ます
胸を叩いてのつびきならぬ羽目

女傑一代死ぬまで男はんが好き
中毒が出て板前が喋り出し

川柳わかやま

堀端

三男報

幸

凡九郎

凡九郎

幸

凡九郎

幸

凡九郎

弘生

一步

勝美

真砂

凡子

恒明

度

千代三

重人

楓楽

春蘭

覚然坊

育園

柳右子

信治

雀踊子

柳宏子

美津枝

萬的

浩一郎

律子

邦晴

凡九郎

柳伸

智子

文秋

史好

軽快な靴がつきつき今日も無事

軽快な振舞いの裏覗かせず

軽快に企みを脱ぐ日のゆとり

軽快なジョークのなかにある真理

軽快を装う服なら持っている

とまどいを表に見せぬ女傘

アッハッハととまどっている涙壺

女心に戸惑う指切り迫られる

小国のとまどい米・ソの真中で

とまどいと人の痛みが見えてくる

とまどいを隠しきれない目の動き

一糸切れて人形とまどいぬ

大阪に居てもとまどう地下の道

反逆のひとりととまどう蟻の列

運不運分けた打球のライン上

すれすれの線を上手に泳いでる

厄年のこよみへ父が太い線

線引きが僕を会社社に居させない

平行線続く女が譲らねば

いさぎよくこの線を引く自負もある

山の線故郷の歌はありがたし

無造作に線で消された私の名

児童画の中に素敵な一本線

青空に線を引いているアナキスト

かけ引きの譲れぬ一線さぐり合う

父が引く線は真すぐ伸びている

隅っこに隠れて塵は生きのびる

登志代

光代

寿子

保夫

白光子

輝子

信秋

緑良

太茂津

英子

稚代

正子

天彦

桂香

紫香

一二三

柳宏子

紀美女

豊太

きみ

克子

和子

萬的

紀久子

信子

道夫

正博

街頭に塵ひとつない後進国

川柳塔まつえ

落城のドラマ石垣語り継ぐ

石垣で偉容もたせたマイホーム

落城の悲話を石垣秘めている

石垣の亀裂へ恋を埋めておく

そり返る石垣のはるまみどり

石垣の石に幽気のある城址

近道をすれば前途は通せんば

近道した過去を裁く処方箋

近道を選んで墮ちていく女

近道を粹な出雲の神に聞く

いつものことで近道で踏み外す

母の唄きいた近道振り返り

近道で別れたくない恋模様

エリートの特権近道通り抜け

愛情へ大きい上げ底かもしれず

母の背が大きく見える失意の日

灯を消してからの大きい海の音

大小のない平等論に西瓜切る

背信の女大きい嘘をつく

人様の家大きいひまをみる

手に余る桃から鬼を征伐に

大国のエゴが五輪を惑わせる

禁煙家と知らずライター・プレセント

嘘つきのライター・火花散らすだけ

遊び着が似合い浪人慢性化

三男

恒松

叮紅報

芳枝

愚童

正江

早苗

三和

北樹

満江

鶴丸

正朗

荒介

孝華

秀子

軒太楼

雄々

寿美子

千代

昭二

春梢

紫吻

通児

巡歩

孤呂二

与根一

叮紅

円満にする相談でまたもめる
お茶を摘む八十八夜の空の色
わが村の青田大学セリ茂る

両親に相談もなく孫が出来
春がすみ口紅ピンクに変えようか
就職の糸口よければ太く伸び

相談へ齢ですからと逃げておく
摘み入れて春の香りのあたたかし
よもぎ摘みカラフル春の一ページ
もつ一度この子にかけよう土筆摘む

蓬摘む空の青さよ娘を思ふ
糸口を握れば闇が深くなる
相談を受ける立場にいる自信
心ない言葉が摘んだ風の距離
女から相談うれしいものうち

菜の花句会 高杉
走るよりコツコツ人生長い道
さて何をざんげしようか手の聖書
木挽のこ家宝となつてまつられる

ざんげも早い忘れれるのも早い
裁縫の道具を持たぬ義母がくる
マリアさまざんげ話は聞き飽いた
一人だけ沼から出れぬ社員いる

道具箱親父の肩も知つて
転んでも走るしかないわらし虫
一番に止った独楽は課長補佐
道具屋は少しとほけた顔がよい

神様も苦笑している色ざんげ
道具立揃つてどこか抜けた顔
按摩器を使えと嫁が買つて来て
父の汗母の涙がある道具

敏明 朝子 三和 ヒデ子 惠美子 英子 世似 輝水 清泉 蔵栄 民子 美栄 鈴江 白汀 優キミ 鬼遊報

社員みな肩書き付いてる小企業
日々ざんげ大師の顔がまぶしすぎ
一度目のざんげは妻も泣いてくれ
椅子ねらう社員で吹矢持つている
雲行きがどう変ろうと靴走る

盆栽の道具に高い金をかけ
盆雲に重たくなつてきた乳房
少し傷んだ道具に父の過去を見る
走つたら昨日の謎が遠くなる
一枚の紙で社員は軽く飛ぶ

平社員不満の礫は届かない
神さまの耳をくすぐる色ざんげ
雪しんしん能率給のつく社員
欺された女の方にもあるざんげ
春の風すこし謀反がある走り

歯科医師の道具痛いものばかり
騙された祖母の乳房で寝てしま
ざんげ聞く牧師も重い罪をもつ
柳柳藤井寺 赤木

舐め合えぬ傷だが涙拭き合える
妻病んで市場に顔を覚えられ
旬の味京の小さい宿で食い
考えたる余生はもつと暇な苦

喜寿迎えまだ捨て切れず夢を追い
思い出を語り合つよな夫婦墓
免罪の縄目が解けた日のグラス
裏窓にとり残された春の雪

さらさらと書いて未練は書かず置く
春ですよ眠る桜をゆり起こす
しあわせな余生ゆつくりベダル踏む

芭露 シマ子 恒明

覚然坊 頂留子 章 雀踊子 春蘭 健司 美幸 柳伸 射月芳 悦郎 鬼遊 凡九郎 冬葉 弥生 柳宏子 幸生

和子報 美房 吸江 与呂志 つや 哲朗 清心 かな女 美代子 作秀 一屯 伴子 本蔭棒

和子報 美房 吸江 与呂志 つや 哲朗 清心 かな女 美代子 作秀 一屯 伴子 本蔭棒

佳句地10選 (前月号から)

田中笑風選

サンガラスはずせば青い空が見え
街路樹の傷は訣れたときのまま
縫うひとがこんなに多い針供養
独りごと言うたら犬に見上げられ
雑巾をとつてもやさしい顔で縫う

女にはちゃんと理由のある涙
母ひとり招けば父を連れてくる
そつちへ行くから向い風になる
仲人の手帖に離婚は入れてない
ライバルにそつと引金あててみる

御遠忌の迦陵頻加の高野山
発車ベル窓へ駅弁飛んで来る
春日和窓から受け取る急急便
御遠忌を迎えるお山虹の色
天窓の斜光椅子の位置かえさせる

春の風土手のつくしに愛を呼ぶ
老いてなお新しき服うきつきと
コップ酒心の窓を開け広げ
パスの窓額縁にして伯耆富士
大都会窓はどんどん縦に伸び

焼肉の煙いぶしにあう桜
窓あけて丁子の香を満喫し
飾窓の女に傾く夕日影
ノラとなる眠れる美女は起こすまじ

秋園 繁男 治子 正人 美佐 末一 律子 麻男 昭子 比呂志 君枝 雅美 和子

秋園 繁男 治子 正人 美佐 末一 律子 麻男 昭子 比呂志 君枝 雅美 和子

尼崎いくしま川柳会 角野かず子報

先越したライブル先に召されけり

笑い袋おけば涙のとめどなく

さしかける傘へ素直な葱坊主

責任をもつ気などないのど仏

風五月ポストをあける郵便夫

ご機嫌な妻のかかとの減り具合

輪の中に味方がひとりの自信

ゼニ数えごくんごくんとのど鳴らす

花冷えに少し愁いの仁王さま

虫干しの着物多弁になっている

ロボットの出来ぬ一つに目分量

汗拭けばいい顔になる泣き寝入り

風呂敷をひらくと刑が軽くなる

頂上で味方のいないのに気づく

沈丁の愛が重たい傘にする

あの人が座るとなごむ話し合い

座椅子より座布団がよい病み上り

先人の足場があつた突破口

青い目も来てかしまる野点傘

母さんが座ればまわり暖かい

珍しく男が米をとぐ有情

味方でも弱点だけは隠しとく

負けた子が髭を生やしてはばつて

子等帰りが砂場に赤い毯一つ

惨敗の男の背が泣いている

うそでよいも一度さきと云うてほし

倦怠期強い味方が子がいま

五月晴鯉の親子が夢を追う

傘干して小さな悔いをたたみ込む

歯変わりを知らずに買った馬が負け

伊三郎

墮駄

定人

牧郎

水声

礼子

美智子

正一

紫香

静江

かすみ

かず子

歌栄

郁代

青子

伊升

弘生

はし芽

かね子

晴子

良征

美代子

一郎

玉子

保藏

すえ

君子

梨枝

佳秋

花婿の肩書きばかり聴かされる
鼻息の荒さ何かで儲けてる
片隅の理性が今日は重過ぎる
鼻薬ももう万単位では効かず
気が重い夫に代つて雨の中
風薫るそつそつ孫に鯉のほり
腹巻きを離さぬ父の老いを知り

幸子
登志美
みつ子
光子
綾子
いつを
兼治郎

離婚届一糸乱れず書く女
大物の返事は広い幅を持ち
うと伸びて小さい春が届けられ
後味がさわやか別れ上手な人
愛の味が上手に書けぬ日記帖
母の字つめたリユックが跳ねて居る
人生に似て紫陽花の七変化
北の島呼べど返事が届かない
短冊の座右の名句味わつて
冷静に返事押えた咽喉仏

右近
ただし
すみれ
志保
三和
テルミ
達子
婦美子
星斗
悟郎
笑風
八重
静子
美恵
登志代
正之
達一郎
倫子
茂樹
道子
利義
午郎
弘生
満津子
頼一
茂一郎
三十四
宏進

翠洋会 中西兼治郎報

疑わぬ妻に疑問を持つ夫
バトンタッチ嫁が始めて出るパート
悲しさに耐えるドラマの視聴率
内科外科眼科病院で日が暮れる
定年の孤独を妻に励まされ
巨星墜つドラマ佳境へ筆冴える
十分に終る夕食妻は待ち
見応えのドラマ余韻の中に座す
幸せはドラママの様に娘は嫁ぎ
万歩計歩け歩けとせきたてる
泥船の狸を誰も助けない
山吹の濡れて静かな寺の坂
出来栄えと別に満ち足る筆洗う
夕庭はひとり静かにひたるとこ
夕日燃えて城の威厳を浮び出す

植山 武助報

礼子
こう
加代子
世界人
希久志
浪速子
武助
白光子
幸代
富志子
射月芳
狸村
甘平
ひで

礼子
こう
加代子
世界人
希久志
浪速子
武助
白光子
幸代
富志子
射月芳
狸村
甘平
ひで

城北川柳会 神夏磯道子報

吊橋を渡れば母のどろろ汁
行きよりも戻りが早い老いの足
ふるさとを離れて思う父母の味
元専務一と味違う守衛さん
櫛の歯がこぼれて寂し同窓会
ツカ出身一味違う芸の星

静歩
炬斎
重彦
新一郎
公一
ふみ

川柳後楽
着こなしの顔ふさわしい夢二の絵
都会から旧家へふさわしからぬ嫁

井上柳五郎報
宏進

ふさわしい夫婦も刺を隠し持つ
ふさわしい人は出馬をしてくれず
香水がほのか喪服の薄化粧
国鉄がすこし儲けて空が荒れ

荒れた手で着付け手伝う妻わびし
荒れた手で老母の煎れた茶をすする
荒れる海に心の鈴は聞こえまい
合掌の十指に荒れた海が吹き

反対のための反対荒れつつけ
サラ金が背景にある暗い記事
嫉妬する妻に夫の浮気癖
背景を無視して喰った背負投げ

美校出て背景描きというくらし
新緑の匂う木蔭でロマン汲む
へたつけたまま柿の葉のうすみどり
森林浴招く樹海の緑呼ぶ

引越しのあとに佗しいヒヤシンス
明日ゆくと連絡電話が一時間
激戦のあとをとどめぬ青い海
ゆつくりと地球が廻る船の旅

民話をひとふし覚え旅終る
表札がテレビに映る時の人
カラフルなビキニに海もまぶしかろ
童話から抜け出たような女の子

表札を覗いたらしい音で去に
富柳会
水仙の島とのみきく君なりし
姿よき一本の松標鳥

教会の鐘が島中よく響く

幸好 秋月 哲郎 弘隆 紫峰 玉水 健一 照路 恒洋 敏昭 桃風 たけ志 佐加恵 葵丘 博友 草風 柳五郎

規不風 薫 栗 風

島を昏見下す位置に神在す
風呂敷で包めるような島一つ
再婚の一ふしとなり島を捨て
何も彼もゆるして島の人になる
やさしさときびしき島に打ち寄せて
若い恋老いた恋あり中之島
離れ島見る人のない桜咲く

川柳ペン皿
おばあさんテレビにお守りしてもらう
テレビさま親子の対話奪い取り
コマーシャル今夜のおかず思いつく
大切な時間をテレビに盗まれる
大惨事害やすめつつ見るテレビ
コマーシャルの間で急いで行くトイレ
宿題が頭の底にあるテレビ

東大阪川柳同好会 齊藤三十四報
まわり道せずに彼女にプロポーズ
風五月犬に誘われまわり道
まわり道した人生も無駄でなし
まわり道野心があった訳やない
理想追うと廻り道となる
あまりにも夕日がきれいだ廻り道
まわり道するたび恋の芽が育つ
先生のへそくり知っている生徒
クラス会子の縁談も頼みあう
クラス会先生抜きでやるもよし
先生に母の匂いがある園児
学校に母の座があるPTA
校長として口ひげがよく似合う
花が咲いたクハラス会をはじめよう
学生結婚ふたり揃ってクラス会

鈴木 節子報
いく子 妙子 節子 智子 いくの 好子 ふみ 良京 律子 千代子 凡九郎 三十四 春蘭 美子 柳伸 綾珠 眉水 雀踊子 弘生 湖風 慶三

美房 岳人 花梢 美代 森子 美緒 泰子

クラス会互いの嘘はいわなくて
担任も答えて迷うPTA
日曜に聞く先生の子守唄
ぞんざいな言葉もうれしくラス会
PTA男は隅の方に居る

川柳ささやま 河原みのる報
黙認へおぼれてならぬ血のきすな
上出来と根気認めた褒め言葉
欠点を認め補う夫婦仲
軽がると捺した重荷の認印
満足な顔が見上る鯉のぼり
鯉のぼり元氣余って尾まで上げ
汚染した大気は知らず鯉のぼり
遠くより名指しをされる鯉のぼり
英霊がまだ泣いている波の音
音の出ぬ破れ太鼓に踊らされ
ゆさぶれば炎える音する老いの壺
補聴器をつけた連帯保証人
補聴器を外して仏の顔になる
補聴器へみんない顔よせてくる
鈴の音で遍路の春となる四国

西村 早苗報
孝華 登美也 寿美子 きみえ 独仙 裕 幸一 宗光

にた川柳会
空だのみせめて故郷の風が欲し
絵ハガキで見るとお濠の水走る
養殖の蟹にこわい汚れ水
皿みんなきれいにあげて大家族
孫の目へ発情の犬追い払い
難しい事はまかせて田を植える
お遍路も歩かず巡る豪華バス
五輪の和赤の広場ではすされる

葉牡丹の色にまんまと騙される
 手相見の凶へ見料出ししぶる
 ぶらぶらと桜の下で色に酔う
 無理難題も呑まねばならぬ男の血
 晩酌に酒豪寂しく酔を知る
 まだ見分けつかぬ隣の一卵性
 うたた寝の夢へ優しい花毛布
 大会を老練なのが居て収め
 ロボットを中心にした社の施策
 灰皿に女医の疲れがすてである
 一度飲みましようとはんとの様に言い
 尾浜川柳会

多賀子 夢酔 三和 栄 景子 花子 弘朗 雄々 雀踊子 早苗 光重 上田 佳秋報 牧郎 寅之助 歌子 夢之助 弘治 江美 佳秋 紫香 すすみ 新吉 貞吉 すえ いわを 武庫坊 札子 貞男

楊貴妃が着飾っている通り抜け
 葉桜の良さもわかった年輪の所為
 酔うほどに花見の客のうかれ唄
 花の下味方ばかりで眠くなる
 花花私に蝶になつてゐる
 うみなり川柳会 森田 熊生報
 学歴に惚れ顔に惚れまだ迷い
 朝露と摘んだ一輪幸を呼ぶ
 パーゲンに袋いっぱい欲を詰め
 長電話たつた十円だけを置き
 親の夢入る袋が大きすぎ
 あきれも口に出さぬお母の愛
 この箸を割つたら汚職かと迷い
 愚痴つめた袋実家へ提げていき
 子の悪を摘み取る父の指確か
 新茶摘む指に暮らしが染みていく
 新入生リュックに夢を詰めて出る
 土壇場に来て良心が動き出し
 善人の顔で詐欺師が迷わせる
 花褒めて摘むにはおしひ花貰う
 若菜摘み故郷の夢恋の夢
 非行の芽摘むげんこつに愛がある
 サークル檸檬 田形 美緒報
 ハンサムな夫で女老けている
 手術後の明るい顔も又心配
 あべこべに心配させた気がしてる
 心配はしないと父の背が言った
 若者の大志を案じる年になり
 心配をよそに子供らは寝入り
 心配の芽が出揃つて春も過ぎ
 心配なあまりに女房腹を立て

保 清太 よしつぐ 晴子 昌子 芳泉 宣子 富美湖 よし子 雅宏 舟宏 一止 笑王 草人 葉士人 希満子 静生 雄人 華子 豊生 熊生 美代 千代 千代女 森子 美緒 雅子 章子 恵

心配の種を宇宙に蒔いてみる
 八十の母が心配してくれる
 演奏会心配顔の親御達
 横顔の方にその人らしい味
 ハワイ川柳ウイロー社 市岡 暁舟報
 善良な人と信じて気を許し
 善良な人はやさしく眼が奇麗
 善良な市民の誇りに常を持ち
 金つまり善良な事無関係
 善良に生きて満足早や八十路
 善良の裏に苦汁を経験す
 善良の家庭に咲いた花の山
 善良な友は言葉に無駄がない
 善良の意味を十訓の中に入れ
 善良に育て育てと母は請い
 善良の心食前にお祈りし
 外人言う善良なのは日系人
 善良に加え口八丁手八丁
 オイエスケー川柳会 大坂 形水報
 間違いが重なつてもう笑えない
 一日中顔晒して色紙展
 披露宴重なる祝辞に白けきみ
 パーゲンの展示品から先に売れ
 青い目がサクラサクラを口ずさむ
 手を重ね互いに弾んでくる心
 桜咲く合格通知で走り出し
 桜散る頃に悩みが多くなる
 重なつた手はそのままで言葉待つ
 失敗を重ね本物出来上り
 お隣の苦情は庭の桜散る
 川柳ねやがわ 高田 博泉報

泰子 美房 登美子 薫風 公女 拝山 張賀 十吉 秀山 香夢女 虹宵 着生 晚舟 一牛 万里歩 久一 三十四 聖成 亜也子 千夢 秀泉 亜也子 登 安竹 博泉 一扇 入水 入仙

春の雨みたらし団子食べながら
 人生の余白を埋める彩を撰る
 風止んで力みの抜けぬ仁王さん
 出欠の余白に書いてある温み
 正義感と隣合せにいる鉛
 核家族購本殆ど以下余白
 こんな顔して暮したい顔に逢う
 青虫が上阪しました宅急便
 傷つかぬ程にあつさり受け流し
 こりもせずやつぱり女に狂うてはる
 水やりをしても植木にえこひいき
 星のうち青い地球は狂うてる
 宅急便故郷の土の香ころげ出る
 急行が止らぬ駅で待ち合せ
 忘れ物追いかけてきた宅急便
 狂わない時計が憎い夜もある
 もう見えない月を心に白い杖
 嘘一つ描いて余白を埋めておく
 ブライドを捨てると狂う腕時計
 宅急便で送って欲しい人があ
 新聞の求人欄にある余白
 一通の手紙に狂う時もある
 あつさりと茶漬けの味になる夫婦
 人生の余白を埋める定期券
 花作りあつさり花を切ってくれ
 あつさりと話す話に落し穴
 神様があつさり聞いてくれた恋
 煩惱をあつさり捨てた数珠を持つ
 パチンコ狂指を切りたい時があり
 母の書く便りに余白等はなし
 南極は地球の余白にとつて置く

シマ子
 たす子
 よしひろ
 青 楓
 英千子
 君 子
 光 子
 かすみ
 春 子
 亜也子
 まさお
 亜 鈍
 右 近
 冬 葉
 小 路
 鼓 城
 晴 風
 一 途
 勝 一
 明 代
 野 生
 紫 香
 幹 子
 柳 水
 麗 水
 山 久
 鋤 平
 淳 朗
 一 鬼
 覚然坊
 光 夫

マドンナの恋はあつさり折り紙に
 病院の待合室にいる余白
 物狂い舞台は秋の陽が沈む
 初孫が兜の似合う顔になる
 川柳はびきの
 塩満
 ヤゴもいま夕焼け空を夢見てる
 長谷川の二枚目惜しき花吹雪
 ほんばりが満開待つてる金剛寺
 遊峡の石持ち帰る旅の友
 スーパーで命をつなぐ一円貨
 A面で生きれば敵も多かるに
 目の光る時計に夜中にらまれる
 テレビドラマやきこませて以下次週
 断崖に立てば本音が見えてくる
 わたしが沈むあなたが沈む夜の海
 結婚の夢が女を強くする
 おそすぎた春も桜も急ピッチ
 気の遠い未来を思い植樹祭
 札束を数える音に涙あり
 けんけんて花びらよけて通る道
 ライバルに何も言うまい隅に居る
 先の事神にまかすと良く眠れる
 銀婚の夫へハートのチョコレート
 受難期を生きたあかしの太い指
 ハート射る矢は何本も準備をし
 生き造り鯛は小舟に乗ってくる
 もっと冒険しなはれと言う朝の靴
 女三人一人寡黙なのが混り
 誰が為の君のハートの指定席
 呵阿大笑明るく生きる車椅子
 マンネリの生き方変えたい朝の靴

静歩
 入仙
 潮花
 薰風
 敏報
 一屯
 隅谷義一
 喜代子
 三千代
 隆二
 阿衣
 司
 忠宏
 美代子
 寿美
 只士
 キミ
 隆
 敏
 伴子
 末一
 昭子
 秦子
 恵美子
 石橋義一
 高村
 吐来
 白水
 和子
 繁男
 良絵

人生は妻と背負って歩をゆるめ
 お水取りたいまつ火が春を呼ぶ
 西宮北口川柳会
 妹尾 春江報
 鮮やかなタオルが匂う勝力士
 薄っぺらなタオル湯宿の名が入り
 さし出したタオル冷やした気の配り
 腰のタオルが働く汗を知っている
 うたたねの夫へタオルをそつと掛け
 そわそわしている事をまた聞かれ
 同じ柄着ている人が横にいる
 老いてなおそわそわ胸のおどる恋
 裸婦像へ視線そわそわと父子連れ
 口実を見抜いた妻へそわそわし
 そわそわと待っているのはいつもぼく
 おしゃれした妻の姿に無頓着
 無頓着では済まされぬ子の日記
 無頓着がおしゃれし出した春の風
 万葉のロマンスつばめは無頓着
 無頓着なおとこを構ってみたくなる
 無頓着すぎて金にはこまかすぎ
 昨晚の地震言うことみな違い
 牧人忌柳魂という瞳の光
 甘党の犬犬に洪茶入れてやり
 母の日を子らの笑顔と山の宿
 肩書のない名刺なら持っている
 宿の下駄なんと鼻緒のゆるいこと
 寝たきりをみると嫁あらうり
 牧人忌七たび菖蒲は咲いて散り
 虚勢張るうしろ姿に負けが込む
 妻が世話やいてお札に酒が来る
 数え唄一つとばして唄つてる

与呂志
 みつる
 紫香
 幸
 いわゑ
 冬子
 よ志子
 照子
 春江
 かすみ
 はつ絵
 すみれ
 杜的
 弘生
 みつ子
 年代
 水声
 まさお
 千世子
 為子
 春子
 一 郎
 春 蘭
 よし津
 婦美子
 笑 女
 シマ子
 武庫坊

路郎忌本社7月句会

日時 七月七日(土) 午後六時
会場 なにわ会館

天王寺区石ヶ辻町19-1
地下鉄谷町九丁目・近鉄上本町下車東南
電話 06・772・1441番

兼題
おはなし
「民」
「うっとり」
「封筒」
「枝」

桶高薫風
小出智子選
玉置重人選
岩井三窓選
西尾栞選

席題 二題 当日発表
各題三句以内厳守
兼題 五百円

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川 柳 塔 社

8月の兼題は31Pに掲載

8月の本社句会は7日(火)

本社へのご送金について

同人費、誌代、広告料その他本社へのご送金は必ず左記会計室へお願い致します。

★郵便振替(大阪8133368川柳塔社宛)をご利用下さるのが安くて便利です。

用紙は郵便局にあります。

〒581 八尾市中田二一三〇二 高杉鬼遊方

川柳塔社会計室

● 募 集 ●

九月号発表 (7月15日締切)

川柳塔(10句)西尾栞選
水煙抄(10句)黒川紫香選
愛染帖(3句)橘高薫風選
課題吟(各題5句以内)

「迷う」 野呂鶴汀選
「溝」 浦野和子選
「得意」 舟木与根一選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

十月号発表 (8月15日締切)

川柳塔(10句)西尾栞選
水煙抄(10句)黒川紫香選
愛染帖(3句)橘高薫風選
課題吟(各題5句以内)

「身近」 佐々木裕選
「揺れる」 鈴木節子選
「若い」 井上柳五郎選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
★用紙は川柳塔社柳箋をご利用ください。

7月の常任理事会は2日(月)

定価 五百円(送料50円)

半年分 三千二百円(送料共)
一年分 六千三百円(送料共)

昭和五十九年六月二十五日印刷
昭和五十九年七月一日発行

編集兼 発行人 中島蓬太郎
印刷所 藤原童心社

〒545 大阪市阿倍野区三丁目二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)元一六九一四番
振替口座大阪8133368番

編集後記

☆路郎忌の七月になった。

☆命日の七日の本社句会には番傘川柳本社から岩井三窓氏を選者を迎え路郎忌句会を開く。路郎・水府の両巨頭がこの世を去られたのは昭和四十年、以来二十年近くが経過したわけである

☆五月三十日の菊沢小松園さんの百ヶ日には、栗主幹や岳人さんと仏前に合掌し奥さんをまじえて故人を偲んだが、前後して伊藤茶仏岸田万彩郎、河野春三、田中桂太楼といった名だたる川柳人の詠が相次いだ。ご冥福をお祈り申し上げる。

☆東野大八さんの川柳群像は麻生路郎である。七月に生れ七月に亡くなった路郎先生に的をきらんと合わせて頂いたお心遣いに感激のほかはない。八月の葎乃夫人に続き、いよいよ関西の巨星が続々と登場するので俄然身近な感銘を得ることになるう。乞う、ご期待である。

☆六月十五日から青森への

旅に出た。寺尾俊平、海地大破ら畏友に曳かれての旅で、岳人さんを誘ったら、「僕も行く」と関西に善人が居なくなるので今回は止めておきます」とのこと、久しぶりに気づい気ままの解放感を味わった。

☆日本川柳協会の大会が米子で開かれたし、九月下旬には別項に発表の通り中国桂林への友好の吟行が持たれる。近來川柳界も旅をたのしむには事欠かぬようになった。

☆旅にともなうて旅の名目佳什が川柳の雑誌に紹介されることを望みたい。

☆中島生助々庵名譽会長ご夫妻を慰め励ます会が、名譽会長のお誕生日の七月二日に羽衣荘で持たれる。栗主幹や高橋操子さんの肝いりである。参加ご希望の方は岳人さんまでお申し込み下さい。(TEL・0722・52・4631)

☆匿名の方から事務所に扇風機のご寄贈を頂いた。これで真夏の雑誌発送日の汗がやわらぐことだ。

☆七月号到着に前後して、還暦句集をお届け出来る予定である。

(薫)

▼裏の田圃に耕運機が入り終日騒音に追いつてられ

と、今まで何処に居たのかと思われる蛙の大合唱が起り、八尾村の雰囲気が一変する。この田圃のお蔭で、わが家の南側は太陽をいっぱいを受けて終日あかる

地なので裏が軒である敷とは、わが家に空ありと云えるほど大変ありがたい。世に日照権問題で裁判沙汰も多々あるが、それに較べて何と大きな恩恵を被っていることか。田圃の持ち主よ、建売住宅に売らずに何時々々までも米作りに励んで下さいと祈らずにおられない。

▼夜になると、この南側のガラス戸にやもりがやって来る。灯に集まる蠅や小虫を狙うのである。サリガラスを隔ててシルエクトに見る限り、グロテスクなやもりもさほどに感じない。や

もりには縄張りがあつて、他の一匹が姿を見せると、捕虫作業をやめて、その一匹を執拗に追いつめて。ガラス戸いっぱい生活の場として次々と虫をとらえる生態を見ていると、生きているんだな」との実感が湧いてくる。今年もわが家を忘れずにやって来る夜の訪問者に親愛の情を覚える。

▼核問題でゆれる愚かな人間社会を他所に、先祖代々機械を使わず変ることのない生活様式で生き続ける彼等に思いをよせる時、我々が願うしあわせなるものも一瞬の夢に等しい。(き)

☆生命保険会社から一枚のハガキが舞いこんだ日から軽いショック状態が何日か続いた。そのハガキというものは、僕が掛けている保険の特別保障期間(十年)が七月二日に終り、三日以降は受取る保険金が契約時の五分の一に減る(もちろん五支払う保険料も相応に少なくなるが)という内容の通知状であつた。

☆十年以上前のことで記憶も薄れたが、勤め先に勧誘に来たのが魅力あふれる若い女性で、適当に應對して帰って頂くべし、あべこべにうまくベリが、あべこべに気がついていたら書類にハンコを押していた。そんないきさつで入った保険だつたと思う。保険金五百万は、当時としては多くも少くもない金額だつた。

☆特別保障期間の条項がついた保険であることは、当然、説明を受け、納得の上で入ったにちがいない。ちがいないが、それはころつと忘れていた。

☆忘れた自分が悪いので、会社を怒む筋合いでない。理屈はそうでも、感情は別騙されたという気分が頭の隅を離れないのである。困つたものだ。離れないといえは、七月二日という日が特別の意味を持って、これまた脳味噌にこびりついて打ちが、この日を境にたつた百万円になつてしまふ。そんな妄想にとらわれていた

☆十年以上前のことで記憶も薄れたが、勤め先に勧誘

日刊



投稿欄案内

川柳 選者・橋 高薫 風

(掲載日) 毎週水・土曜日

俳句 選者・小寺 正三

(掲載日) 毎週火・金曜日

短歌 選者・佐々木 信夫

(掲載日) 毎週月・木曜日

〈投稿規定〉

はがき一枚に三句(一首)以内(川柳・俳句・短歌と明示すること)投稿随時
自由課題・秀句には掲載紙贈呈

〈投稿先〉

〒五三〇・大阪市北区中之島三二二・朝日新聞ビル6F・電波新聞大阪本社「学芸部」あて。

この夏、おいしさひとりじめ……………

アイスクャンデー

宇治金時・あずき・チョコ・ミルク・パイ



高島屋 そごう 松坂屋 阪神 ドーゾカ店
近鉄(アベノ・上六・奈良・東大阪・京都各店)
サンストア(中之島・淀屋橋各店)
京阪モール 新川売店 虹のまち店
泉北高島屋 南海難波駅構店
国鉄大阪駅店
大阪・なんば



TEL (641) 0551

昭和四十二年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十九年六月二十五日印刷
昭和五十九年七月一日発行(毎月一日発行)
刊行六十二年七月一日発行(毎月一日発行)
七月号